

328-122

文學士 鈴木暢幸 著

大日本文學史 全

發行所 日吉丸書房

明治
16
丙午

序

鈴木暢幸君大學に在りて國文學を專攻し、卒業の後國文學と佛教との關係親密なるをおもひて佛教を研究し、又鎌倉以後の文學の國民的なるを覺りて、謠曲、淨瑠璃、俗謠等の研鑽に従事すること茲に年あり。今や其著大日本文學史を刊行せんとして一言の辭を求めらる。余未だ其書を熟讀するの暇を得ざれども、君の篤學匹鮮きを知れるを以て、必ず此書の江湖に裨益すべきの多大なるをおもふ。我が國早くより支那、印度文化の感化を受け、國文學の發達、亦之に負ふ所多し。然れども強大優勢なる文明に壓伏せられずして、早く平安朝女文の純國文學を發達し得たりしは、即ち我國民元氣の旺盛なるを示して、今日東洋の一強國たるの偶然に非

ざるを知る。徳川朝の平民文學、淫靡の譏なきに非れども、武家政治の直中に於て、亦平民社會の勃興を證明するものといふべし。一部の文學史、單に文學にたづさはるもの、愛讀すべきものに非ずして、國家の過去將來を知らんとするもの、思を潛むべきものたるや論なし。余は此の如き書の彌々益々多く出でんことを欲するのみならず、鈴木君に向つては其の研究の日に益々新にして更に精密なる文學史の編著あらんことを囑望して已まざるものなり。

明治四十二年十二月

芳賀矢一

しるす

凡例

- 一 本書は著者が多年國學院大學及び東洋大學に於て講ぜし日本文學史の稿本を訂正し、これに各時代の作例を加へて出版せしめしものなり。
- 一 従來の諸文學史が多く上古及び中古に精しき割合に近古及び近代に疎なるを憾とし、この缺を補はんと志せる事も本書出版の一動機となれるものなり。
- 一 併し乍ら長き間、講義の折々に稿を起したる物なれば、前後の繁簡、文章の體裁に自ら一致せざる所も少からず。諒を讀者に乞ふべき第一點なり。
- 一 本文の割註は、著書が口授の際に注意し置きたるを、學生の筆記によりて書き入れし物なれば、本文と重複せる所もあり、又體裁の一樣ならざる所もあれど、尙參考の爲にもとて強ひて省かず。これ諒を讀者に乞ふべき第二點なり。
- 一 各時代文學の作例は、出來得るだけ原書に就きて用語、用字の面影を傳ふる

が本意なれども、一は原書の得難きと、一は理解の便を計らんが爲とより、多くは流布本より抄出したり。彼此假名遣、句法等に不同なるはこれによれるのみ。諒を讀者に乞ふべき第三點なり。

一本書は一般の文學史に比して文例を示すこと過剰なるかの感もあれど、されど文學史の教授が往々空談に流れ、無趣味に陥る弊を救はんが爲には、研究者自身が出来るだけ直接に作物を取扱ふ事必要なれば、繁を忍んで各作者の代表的傑作を列ねたるなり。又若し本文の敘述は無價値のものとするも、借り來れる古今文學者の麗筆は讀者の机上を飾るに餘りあるものと信ずるにもよれるなり。

一本書は悉く著者獨創の見のみに依れるにあらず、先代の諸學者及び現代に於ける芳賀藤岡兩博士、其他先覺の研究に待つて蒙を啓き指導を受けし點甚だ多し。終に臨みて厚く兩博士諸先覺に謝意を表す。

明治四十二年十一月廿日

著者

大日本文學史目次

總論

第一編 上古の世

- 第一章 風俗及び思想……………四
- 第二章 歌謠及び口碑……………五
- 第三章 海外思潮……………二

第二編 奈良朝の世

- 第一章 平城の文化……………一九
- 第二章 平城の文壇……………二五
- 第三章 萬葉集……………四〇

第三編 平安朝の世

- 第一章 外交時代……………四五

第一節 漢詩文……………四五

第二節 新宗教の弘通……………五〇

第三節 和歌……………五三

第二章 藤原時代(上)……………五七

第一節 和歌……………五七

第二節 散文……………七一

第三章 藤原時代(下)……………九二

第一節 藤氏の榮華……………九二

第二節 源氏物語……………九七

第三節 源語同時の散文……………一〇六

第四節 狭衣と濱松中納言……………一二七

第五節 和歌……………一三五

第四章 院政時代……………一四七

第一節 政權の移動……………一四七

第二節 散文……………一四九

第三節 和歌……………一六五

第四節 歌謠……………一七八

第五章 平安朝思想の變遷……………一八五

第四編 鎌倉幕府の世……………

第一章 思想界の概観……………一八九

第二章 戦後の文學……………一九四

第三章 同代の散文……………二二二

第四章 和歌……………二三五

第五章 歌謠……………二三六

第五編 室町幕府の世……………

第一章 室町文學の概観……………二四二

第二章 南北朝時代の散文……………二四九

第三章 和歌及び連歌……………二五七

第四章 東山時代の文藝……………二七〇

第五章 猿樂の勃興……………二七四

第六章 猿樂の本質……………二八四

第七章 狂言……………二九八

第八章 紋事詩……………三〇七

第九章 戦記及び史傳……………三三〇

第十章 五山文學……………三三九

第六編 徳川幕府の世

第一章 徳川文學の概観……………三三三

第二章 啓蒙時代……………三三四

 第一節 文教興隆……………三三四

 第二節 假名草紙……………三三七

第三章 發展時代……………三四六

 第一節 元祿文學と大阪……………三四六

第二節 和漢混交文……………三四九

第三節 擬古文……………三五六

第四節 俳諧……………三六一

第五節 浮世草紙……………三七六

第六節 八文字屋本……………三八四

第七節 古淨瑠璃……………三九四

第八節 近松門左衛門……………四〇五

第九節 竹豊二座の作者……………四三五

第四章 沈滞時代……………四八一

 第一節 上方淨瑠璃……………四八一

 第二節 江戸淨瑠璃……………四九七

 第三節 歌謠……………五一七

 第四節 脚本……………五三三

 第五節 擬古文學……………五九九

第五章 隆盛時代……………六三三

 第一節 文化文政の江戸……………六三三

 第二節 俳文學……………六四五

 第三節 狂文學……………六三三

 第四節 草雙紙……………六四五

 第五節 滑稽本……………六五五

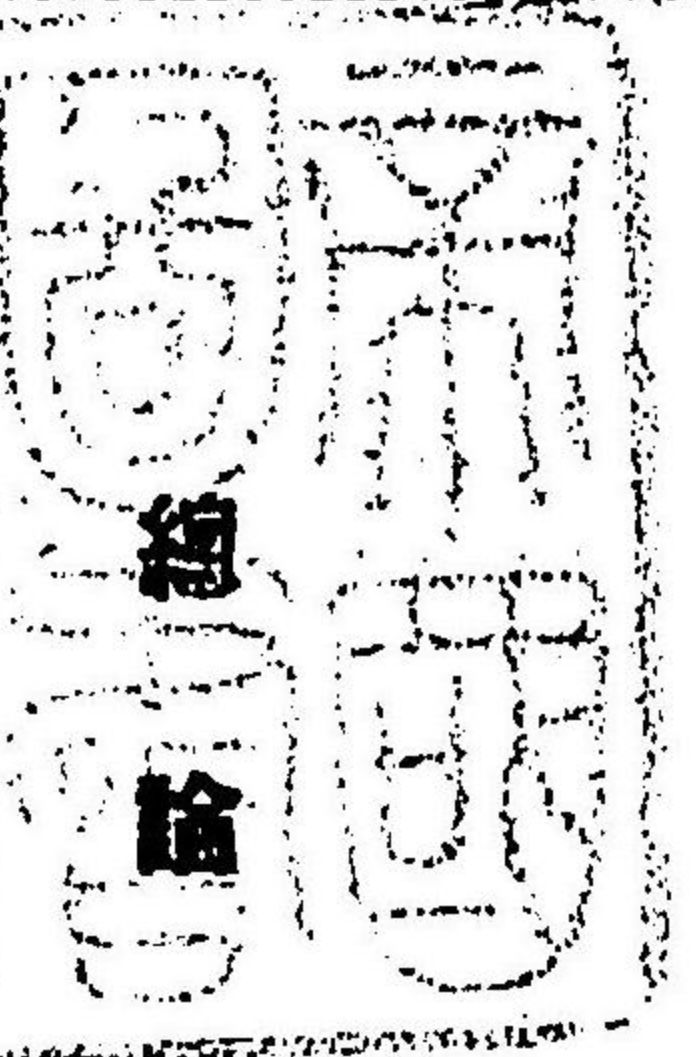
 第六節 洒落本及び人情本……………六七六

 第七節 讀本……………六七六

結論……………七三〇

大日本文學史

文學士 鈴木暢幸著



國民思想と文學

文學史研究の目的

凡そ各國民の爲ることなき特性は其の國民の製作せるあらゆる文藝の上に顯さるゝ物なるが中に、特に其の委曲は色なく聲なしと雖も尙時間と空間との兩性を具有する文學の上に見るをうべし。吾人の知識慾が箇人の容儀帶佩を見るの外にその人格即ち精神の真相を知らんと欲するが如く、一國に關しても政治外交等の普通歴史を學ぶを希ふ外更に一步を進めて其の精神史たる文學の歴史をも了解せんと望むは自然の勢なり。わが日本文學史は正に此の如き所以によりて講究せらるゝもの。且つわが國民の精神生活が經來りたる消長の概要を知りて現下の吾人の精神及び文學の性質を明にし、進

んでは過去に鑑みて將來の文學に對する吾人の態度をも定めんことを欲するものなり。

わが國有史以來茲に二千五百餘年初は神話的信仰によりて國民の精神を統一し、互に唱和して單純なる情趣を充すに過ぎざりしわが祖先も、年を積んで人智開け、傳誦相繼いで花また花を咲かしめんとする頃に臨みてや、一方に漢土及び天竺の思潮渡來して之に波瀾を興へ複雑を來し、まことの意味に於けるわが國の文學は此時初めて見るべきものを得るに至りたり。是を上古の世及び奈良朝の世となす。次いで平安朝の世に及びては漢唐文學の勢力によりて韻文及び散文に流麗なる趣を増し、佛教の影響を受けて特殊の潤飾と豊富なる内容とを得、其の後社會的事情と宗教的事情とによりて次第に衰頹の運に向ふに至り、鎌倉幕府の世、室町幕府の世、幾多の社會的變動はこれ有りたれども、宗教的妄信其の勢を逞しうせる結果、人心萎微として汪洋たる大文學を産出せしめず、近代徳川幕府の世、文教を興隆し天下を泰平ならしめしより始めて國民の自由的精神を養成し、政治上武門幕府の政權を疑ふ者を生じ

たると同時に、漢學にも國學にも、又和歌にも俳諧にも戯曲にも小説にも、自由的討究と大膽なる創作とを出して、まことわが文學史上蘭菊その美を争へる時代となり來りたりしなり。此の時や佛教の勢力次第に衰へて儒教的精神士人の間に力を有し、其の感化は下層の平民にも及びて、當代後期の文學は陰に陽にこの思想に觸れざる物殆どこれ無き有様となりき。現代明治の初年は全くこの情力に成れるものなりしが、新しき社會はいつしか新しき文學を生み、加ふるに外國思潮の感化は日に月に社會のあらゆる方面に注ぎ來りしを以て、政治及び軍事等が短き時期に於て驚くべき發展をなせると同じく、文學の面目も僅に數十年の間に幾度か改り、形に於て質に於て今尙進歩の途上にあるを見る。

吾人の日本文學史は如上の真相を明にせんが爲に、その起源發達變遷の跡を研究し叙述するにあり。まづ上古の世、文學漸く顯れんとする時代の狀況より筆を進むべし。

第一編 上古の世

第一章 風俗及び思想

上古國民の衣食住

我が上古の國民は其の生活法極めて簡單にして、衣は楮(かぢ)の皮を以て織りたるを荒妙とし、糠の汁を以て之を染めぬ。糞糞糞の事は三轉交通の後に始りて、食は米を主として外に雜穀果實あり、禽獸魚介の肉、食鹽酒もあり、住は多穴居にして、後丸木を造ること始りぬ。多くは部落的の居住をなし、地を耕し山に狩し、又漁を營み相互の間に鬭争をなす事も屢なりき。かるが故に天孫降臨して國土を定め、神武東征して中央政府を創立せられたる後と雖も、文政の状態は甚だしき變化を見ず、空しく數百年を経過して尙自然の利用、美術心の發達の如きは極めて遅々たるものありき。

上古國民の思想

從つて國民の思想も單純素朴にして、厚く長上を敬ひ、深く靈魂を拜し、光時神、忽然有浮來者曰。如吾不在者汝何能平此國乎。由吾在故汝得建其大造之。是時。大已貴神曰。唯然。爾知汝是吾之幸。魂奇魂。 天住し時あり。山川國土及び宮殿ありて、考へらる。黃泉國地下にありて死者の赴く所。閻魔の存在を信じ居たりと雖も、併も後世の如き來世苦樂の念を有せず、たゞ從順にして祖先を崇拜し、勇敢にして死を恐れざる一風を有したりしのみ。

神話の神

又彼等は自然界に關する神話によりて其の思想を支配せられ、殊に農事に關する多くの神神(火)河邊(水)速秋津日神、(山)大山祇神、(海)大綿津を信じ、祖先の靈神に仕ふると共に、此等の善神に祈り、惡神を鎮めて百事幸福ならんとを求むる思想は、常に國民の心理を離れず、上古に於ける國民の風俗習慣の是によつて生じたるもの甚だ多かりき。

第二章 歌謡及び口碑

單純なる思想を有し、素朴なる生活を營めりし上古の世には、事を記し思を述ぶるに必要なる文字あらず、人々たゞ口と耳とによりて用を辨じ心を喜ばし居たりしなり。神代に文字なしとの説は古語拾遺に、蓋聞、上古世未有文字、黃龍老少末等之を主張し、神代口決、古史微開、神代日文辨等には有文字、説を採り、又その文字をも載せたりされど、此は後代の捏造に出でたるもの、疑しくて信を置くに足らず。

神代文字の有無

第一編 上古の世

第一章 風俗及び思想

上古國民の衣食住

我が上古の國民は其の生活法極めて簡單にして、衣は楮(かぢ)の皮を以て織りたるを白妙とし、麻の糸を以て織りたるを荒妙とし、漆の汁を以て之を染めぬ。糞糞糞糞の事は三韓交通の後、食は米を主として外に雜穀果實あり、禽獸魚介の肉、食鹽酒あり、住は多穴居にして後丸木造るを以て宮を多くは部落的の居住をなし、地を耕し山に狩し、又漁を營み相互の間に闘争をなす事も屢なりき。 かるが故に天孫降臨して國土を定め、神武東征して中央政府を創立せられたる後と雖も、文政の状態は甚だしき變化を見ず空しく數百年を経過して尙自然の利用、美術心の發達の如きは極めて遅々たるものありき。

上古國民の思想

從つて國民の思想も單純素朴にして厚く長上を敬ひ、深く靈魂を拜し、時、神、忽然有浮來者曰。如吾不在者汝何能平此國乎。由吾在故汝得建其大造之。是時大已貴神曰。唯然。知汝是吾之幸。魂奇魂今欲何處住耶。對曰。吾欲住於日本國之三諸山。故即現在生活の以外に高天原天孫の本宮彼處使就而居。此大三輪之神也。(日本紀卷之一) 現在生活の以外に高天原天孫の本宮彼處使就而居。此大三輪之神也。(日本紀卷之一)

神話の神

の住すと信ぜらる。されど現身のまゝにても行きたる譯あれば、もとは國及び綿津見の宮、大神海中に在る世界にして多くの魚鱗と信ぜり。の存在を信じ居たりと雖も、併も後世の如き來世苦樂の念を有せず、たゞ從順にして祖先を崇拜し、勇敢にして死を恐れざる一風を有したりしのみ。

又彼等は自然界に關する神話によりて其の思想を支配せられ、殊に農事に關する多くの神神見神(雷)、火雷神(風)、級長戸邊神(總、歲神)、等數ふるに暇あらずを信じ、祖先の靈神に仕ふると共に、此等の善神に祈り惡神を鎮めて百事幸福ならんことを求むる思想は、常に國民の心裡を離れず、上古に於ける國民の風俗習慣の是によつて生じたるもの甚だ多かりき。

第二章 歌謠及び口碑

單純なる思想を有し、素朴なる生活を營めりし上古の世には、事を記し思を述ぶるに必要な文字あらず、人々たゞ口と耳とによりて用を辨じ心を喜ばし居たりしなり。神代に文字なしとの説は古語拾遺に、蓋聞上古世未有文字、黃賊老少末等之を主張し、神代口決、古史段開題記、神字日文辨等には有文字説を採り、又その文字をも載せたり。されどこは後代の捏造に出でたるもの、覺しくて信を置くに足らず。

神代文字の有無

歌謡の起源

蓋し未開の時代にありては、諸事大凡單純にして口と耳とを以て是を辨じ、又記憶に存する事も難きにあらざれば、別に文字の必要を感ずるに至らざりしならむ。即ち情内に動きて一事を嘆美せむと欲せば、直に聲を揚げて是を諷ひ、出し、口々これを移してさては後世にも傳ふるに過ぎざりしなり。素盞鳴尊が稻田姫と出雲に宮居せんとし給ひし時、遙に雲の下り居るを眺めて、
 夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻恭微爾夜幣賀岐都久流會能夜幣賀岐衰
 と詠み給へる如き、恐らく歌謡の初なるべし。この歌は又後世三十一文字の和歌より或は後世の潤飾に成れりやとの疑説もあり、尙可考れ、當代の歌謡戀愛に關するもの、軍事に關するもの、酒を歌へるもの、問答に用ゐたるもの、及び童謡と見るべき物等種々あるが中に、戀愛の歌最も多きが如し。但し直情にして露骨なるは文化尙甚だ若かりしが爲のみ、

比佐迦多能阿米能迦具夜麻斗迦麻迦佐和多流久昆比波煩會多和夜多比那
 衰麻迦牟登波阿禮波須禮打佐泥牟登波阿禮波意丹閉打那賀那勢流意須比
 能須蘇爾都紀多知迦那理

軍の歌

以上は日本武尊が宮津姫を戀ひませる時の歌。
 意佐加能意富牟盧夜爾比登佐波爾岐伊理袁理比登佐波爾伊理袁理登母美
 都々々斯久米能古賀久夫都伊伊斯都伊伊母知伊麻宇多婆余良斯
 斯久米能古良賀久夫都伊伊斯都伊伊母知伊麻宇多婆余良斯

以上は神武天皇が八十連御討伐の時の歌。
 許能美岐波和賀美岐那良受久志能加美登許余迦伊麻須伊波多多須須久那
 美迦微能加牟菩岐本岐玖流本斯登余本岐本岐母登本斯麻都理許斯美岐叙
 阿佐受衰勢佐佐

以上は神功皇后酒を醸してこれを伊弉沙和氣之大神に供し、以て皇子を購られし時の歌。

古波夜美麻紀伊理毘古波夜美麻紀伊理毘古波夜意能賀衰奴須美斯勢牟
 登斯理都斗用伊由岐多賀比麻幣都斗用伊由岐多賀比宇迦迦波久斯良爾登
 美麻紀伊理毘古波夜

以上は崇神天皇四道將軍を命じ給ひし時、山代の一少女が歌ひし謠。これによりて天皇皇庶兄建波邇安王の叛を知りこれを平げらる。

邇比婆理都久波衰須疑且伊久用加泥都流

問答の歌

軍話

酒の歌

以上は日本武尊東征して常陸より甲斐に入り給ひし時、往時を懐ひて常陸の新治筑波を經過して既に幾夜か寝つると聞ひ給へる歌なり。茲に火燒の翁側にあ

カガナベト 迎賀那倍豆用邇波許許能用比邇波登袁加表

此等の歌謠は總て直情の發露にして未だ技術詩の内に入らず、自然の配律として、對句、押韻、枕詞の如き多少の修辭の存するを見る。雖も、多くは歌形の長短、字句の數量にも一定の法なく、たゞ比較に於て五七七七七の短詩形が最も多くして後世三十一文字の和歌が流行すべき素地を成せりと云ふに過ぎず。歌謠と同時に、文字なき時代の習慣として注意すべき事二つあり。即ち一は古來よりの信仰及び出來事即ち神話及び傳説を傳誦する事と、他は神の御前に麗詞を伸べて神慮を慰め幸福を得んとする儀式となり。前者にありては、一家は一家族に關する出來事を子孫に語り襲ぎ、一國家は皇室を中心として起れる事件を代々に語り傳ふるものにして、朝廷には特に語部なる部族を置きて専ら之を司らしめ給ひき。此等の部族に天語、部連、語臣、語造、語君等ありて此等は天神の故事を語り傳ふる者と云へり。應神天皇以降漢字波來して後、記録の術始り、此よりこの事漸く衰へ、奈良朝以後殆ど要を見ざるに至りしが、貞觀延喜の頃は僅に一載

式として大群會に際して行はれ、武家に及びては此事さへ全く絶えたり。蓋し宗族の淵源を教へ、名譽ある祖先の歴史を没せざらんと欲するには、當時に於ては最も適當なる方法なりしならむ。かく言ひつき語り傳へて奈良朝の世までに及びたり。

後者は後世に所謂祝詞にして、或は伊勢の大神宮に祈り、或は殿宇門庇の神を祭り、又は山川風雨の主神を慰むる等、すべて此の如きに際しては、供物を備へ神徳を稱ふるが爲に飾りたる詞を用ゐ、之を神前に誦して、人々に謹嚴莊重の感を起さしむるものなりき。

蓋し日本書紀天岩戸の條、一書に、時中臣遠祖天兒屋命、則以神祝之、於是日神方開磐戶而出焉、と云ひ、又他の一書は、乃使天兒屋命掌其解除、之大諄辭、而宣之焉、と見えたるや始なるべきも、其の後専ら行はるゝに至りしは、何時の程よりなるかは知るべからず。賀茂真淵の祝詞考には、出雲國造神壽詞は舒明天皇の朝に、大祈年、廣瀬及び龍田の祭詞は奈良朝の初期に作られしものなりと説き、本居宣長は古事記傳及び大祝詞後釋に之を駁して、大祝、大殿、御門祭等の詞は既に神武の朝に存在せりとなす。たゞし此等の祭は古より年々繰返さるゝものなりければ、太古に出でたる祭詞も亦後年次第に潤刪を加へられつゝ、繰返し用ゐられたる事な

るべし。平安朝の世、醍醐天皇の延長五年に成れる延喜式第八に收めたる名目は次の如し。

祈年祭 春日祭 廣瀬大忌祭 龍田ノ風ノ神ノ祭 平野祭 久度古開 六月々次祭 大殿祭 御門祭 六月晦大祓 東文忌寸部獻横刀時呪 道饗祭 鎮火祭 大嘗祭 御魂鎮齋戸祭 伊勢大神宮 二月祈年六月十二月々次祭 豐受宮 四月神衣祭 六月々次祭 九月神嘗祭 豐受宮同祭 同神嘗祭 奉入齋内親王時詞 遷奉大神宮祝詞 遷却崇神祭詞 遣唐使時奉幣 出雲國造神賀詞

此等註釋書の主なる物は、祝詞考三卷、延喜式祝詞解五卷(以上賀茂真淵著)、天津祝詞考一卷(平田篤胤著)、祝詞講義卅卷(鈴木重胤著)、祝詞略解(久保季茲著)、大祓詞後釋二卷(本居宣長著)、同上後々釋一卷(藤井高尙著)、出雲國造神志詞後釋二卷(同著)等なり。

今祈年祭祝詞の梗概を述べん。

祈年祭の祝詞は、終歲風雨の災なく穀物の豊熟せんことを神に祈ふ祭の詞にして、二月四日神祇官にて行はる。内容は今年二月稻種を水に浸さんと

祈年祭

大祓詞

して天皇の幣帛を神に上らしめ給ふことを説くより始り、今年二月御年初將賜登爲而皇御孫命能宇豆能幣帛乎朝日能豊逆登爾稱辭竟奉久登宣と云ひ、若し祈の如く穀物の豊熟を得しめ給は、必ず瑞々しき初穂並に新酒其の他海山の魚菜禽獸布帛を神に奉りて其の徳を稱讚せんと云ふ。次に高産靈神産靈以下の諸神にも祈意を捧げ、別しては天照大神の廣前には、荷前に堆高く初穂を積み上げ奉るにより、五穀成熟を護らしめ給へと希ひ、次に御縣に坐す皇神、水分に坐す皇神等の前にも之を祈ひ、最後に忌部の人々の捧ぐる幣帛を神主祝部等の受けて、過なく全國八百萬の神々に奉るべしと云ふにて終結とす。

次に大祓詞の内容を述べん

大祓の祝詞は詳しくは六月晦大祓と云ひ下に十二月と割註せる如く、各半年づつゝの犯せる罪過をば六月及び十二月の晦に於て祓ひ淨むる意を叙べたる式詞にして、諸詞中最も雄大なる思想を表す。譬へば、茲に捧ぐる所の祝詞をば、天津神波、天磐門乎押披氏、天之八重雲乎伊頭乃千別所聞食

武國津神波高山之末短山之末爾上座氏高山之伊穗理短山之伊穗理乎探別
 氏所聞食武と云ひ、祓ひ去らるゝ天つ罪凡ての惡事國つ罪人體の不淨、親于國
 せるもの消滅し行く状を形容しては、科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之
 如久朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風能吹掃事之如久大津邊爾居大船乎舳解
 放艦解放氏大海原爾押放事之如久彼方之繁木本乎燒鎌能敏鎌以氏打掃事
 之如久と叙べ、かく祓ひぬればあらゆる罪過皆消えて跡方なく、朝廷の官人
 を始めて、天下の萬民盡く清淨にして犯さるゝ所なかるべしと云ふに止む。
 語詞素朴單調にして敬語天津、瑞、坐、奉、給、の類多く、對語天津、社、國、津、社、甘、桑、辛、桑、遠、山
 を用ゐ、總じて裕々相迫らざる趣あるは、莊重の感を深からしむる所以にして、
 歌謠が戀愛酒遊の人事に成れると異り、わが上古祖先の敬神的思想を反映せ
 るものと見るべきなり。

第三章 海外思潮

天孫はそも何國より降り給ひしかは茲に問はず、其の後神代の間日本書紀に「一書曰、素盞鳴尊所行無狀、故諸神
 蓋鳴尊の韓國に渡り給へる由傳へ、科以千座置月而遂逐之、是時素盞鳴尊帥其子

修辭

海外交通

漢學の渡來

史官

五十猛神降於新羅國、居於月茂利之處、乃與音曰、此地吾不欲居、又垂仁天皇の九年但
 送以三地土作舟乘之、東波到出雲國、簸川上所居、島上之峯、見ゆ。又垂仁天皇の九年但
 馬守が常世國に入りし由も傳ふれば、日本書紀に「春二月庚子朔、天皇命田道間守
 我が國の海國なるだけに、海に接せる近方の國々との交通はいと早くより行
 はれ居りし事なるべし。されど公然他邦との往來を開始せしは神功皇后の
 三韓征討以後と見て可ならむ。應神天皇十五年紀元九四四百濟王阿直岐を
 遣し、翌年阿直岐の推薦によりて賢人王仁來朝して論語十卷及び千字文一卷
 を獻ず。皇子菟道稚郎子、兩人を師として諸の典籍に通ずと云ふ。これ漢學
 の我が國に入りし始なり。かくて文字の輸入によりて記録のこと起り、彼の
 二人の子孫は阿直史、書首ト稱し其の後船史、田邊史、白猪史等ありて各此の事
 を司る臣となり、以て數代を經過したり。されど此間の我が社會は尙ほ甚だ
 簡單にして、國民の状態も亦た甚だ素朴に、未だ學を求むるの氣風を生ずるに
 至らざりしかば、稚郎子以後は熱心に漢學を學習するもの殆んどあるなく、從
 つて史の人々も怠慢に流れて其の道を進むる術を忘れ、繼體天皇十年紀元一
 一七六、別貢五經博士漢高安茂請代博士段陽爾依請代日本書紀の文も見えられど

も敏達天皇元年紀元一二三二の條に丙辰天皇執高麗表疏授於大臣召聚諸史令讀解之是時諸史於三日內皆不能讀爰有船史祖王辰爾能奉讀釋由是天皇與大臣俱爲讚美曰勤乎王辰爾懿哉辰爾汝若不愛於學誰能讀解宜從今始近侍殿中既而詔東西諸史曰汝等所習何故不就汝等雖衆不及辰爾日本紀等あるを以て見れば尙一般の世は擧りて學の尊むべき所以を知らざる有様なりしを知るべし。

佛敎の傳來

これより先欽明天皇の十三年紀元一二一二百濟佛像幡蓋經論を獻じぬ。其の讚文に曰はく。是法於諸法中最爲殊勝難解難入周公孔子尙不能知此法能生無量無邊福徳果報乃至成辨無上菩提譬如人懷隨意寶逐所須用盡依情此妙法寶亦復然祈願依情無所乏且夫遠自天竺爰泊三韓依敎奉持無不尊敬由是百濟王臣明謹遣陪臣怒喇斯致奉傳帝國流通畿內果佛所記我法東流初は蕃神として蘇我氏一家の外これを信ずるものもあらざりしが後次第に渴仰者を生ずるに至り推古天皇の頃に及びては朝廷大にこれを獎勵し殊に聖徳太子の如きは最も熱心なる信者として其の勢を助長するに極めて有力なる人なり。

遣唐使

支那文明の輸入

りき。されば此の前後に及びては三韓僧侶の來朝する者も次第に多く又經論の輸入も相つぎたりしかば其の讀誦研究は漸く漢學の修養にも資する事となりこれより一般の學術は我が國民間に勃興せんとするの機運に向ひたり。加ふるに十五年紀元一二六七小野妹子を隋に遣し翌年留學生學問僧并せて八人を彼の地に送る事となりしかばこれよりは直接に隋唐の盛なる文明に觸接する事を得彼我の交通いよゝ繁きを加ふると共に當時彩華陸離たる支那文明は忽ちわが野扑なる上下を風靡し聖徳太子の末年に史傳天皇國記臣連伴造國造百八十部並公民等本記の編纂あり孝徳天皇の世には大化の改新二年春正月甲子之詔を行ひて極力支那聖賢の治道に倣はんと欲し天智天皇の御代には盛唐の制に摸して律令の撰あり學校を起し明經紀傳等の學を修めしむ。されば此の頃に及びては文藝の趣を解して六朝初唐の間に行はれたる詩文の風に從ひ錦心を練り麗想を弄ふものも漸く顯はるゝまでに至りたり。弘文天皇の如きは即ちこれが魁をなし給ひしものにして御賦五言絶句二首今に残れり。

侍宴

皇明光日月 帝德載天地 三才并泰昌 萬國表臣儀

述懷

道德承天訓 鹽梅寄真宰 羞無監撫術 安能臨四海

之より詩賦の創作は貴紳士流の間に行はれ、弘文天皇の皇弟葛野王、文武天皇の皇子大津皇子以下作を當代に遺せるもの少からず。此等の詩作は孝謙天皇天平勝寶三年(一四一)淡海三船の選せる國風藻に收らる。昔中の作凡百二十篇作者六十四人あり。されど一般にそれらの詩の形は極めて小さく、内容も特に稱すべきに足るもの無く、自己の創作と云はんよりは寧ろ舊詩想の摸造に過ぎざれば、此等の漢詩はたとへ我が先祖によりて作りなされたりとも、之を以て直に當代の文學とは見るべからず。唯此等の消息によりて、當代に及びては漢文學が如何にわが國民間に弄ばるゝに至りしかの程度を覗ふの料とすべきのみ。

之と同時に佛教も次第に上下の信奉を得、僧尼の數を増し、寺院の建立を見るに至りたれども、素朴簡明なる國民精神は未だ深遠なる教理を了解する事難

かりければ、外觀の盛隆に比して内界の信念が尙甚だ拙く、古來の習慣たる、物に觸れ事に臨みて歌ひ出す歌謠の性質も、依然として舊性を改めず、佛教的思想の如きは、毫もその間に存在する跡を認めしめざるなり。例へば、鮪臣が大伴連に殺されたるを見て、影姫の悲める歌に

石の上布留を過ぎて こも枕高橋すぎ 物さはに 大宅すぎ 春日のかすがを過ぎ つまこもる 小佐保を過ぎ 玉笥には 飯さへ盛り 玉琿たまごに 水さへ盛り 泣きそぼち行く 影姫あはれ

と謠ひ、天智天皇のかくれまし、時の皇后の歌に

いさなとり 近江の海を 沖さけて 漕ぎくる舟 邊つきて 漕ぎくる舟 沖つ櫂 いたくなはねそ へつ櫂 いたくなはねそ 若草の 夫の思ふ鳥立つ

と見ゆるが如く古き歌に比しては、やうく句法定まり形式整ひ、對句の用ゐるも發達せるを示すと雖も、其の想に至りては依然簡樸現實的な性質を離れず、微妙なる何等かの思想の國民精神上に影響を及ぼせるゐるを見ざるなり。

かくの如き間にやがて奈良朝時代は相次いで至り、當代までの諸種の修養は始めて國文學上に形を成して表れ出づるに至る。そは別に章を立て、説き進めざるべからず。

第二編 奈良朝の世

第一章 平城の文化

奈良文學の時代

文學史に於ける時代は必ずしも政治史のそれと一致する事能はず。吾人の茲に奈良朝の世と稱するは、政治史上平城の遷都、和銅三年よりは殆ど二十年前、即ち柿本人麿が始めて創作をなしたる持統天皇朱鳥三年頃より、大伴家持が没年、即ち平安遷都に至るまで、凡そ百年の間を云ふ。この間は前代施政の方針をうけつぎ、大唐を模倣して試みられたる大化新政の計劃が漸く整頓し來り、文武天皇の大寶令に至つて漸く之を大成し、聖武天皇の天平年間に亘つて其の盛なる實現を見るに至りし時代なり。されば藝術の如きも彫塑は簡朴なる推古式より白鳳の過渡を進んで、豐滿端麗なる天平の様式を生じ、工藝は今尙東大寺正倉院中の御物を以てもその文明の程度を計り知らる。従つて佛教の信仰も著しく進み、奈良諸大寺の創建、移建、東大寺大佛像建立に加へて盛大なる供養式など頻りに行はれ、且つ諸國に國分寺の制定せらるゝ如き

天平の盛観

に至つては、佛教が全くわが國教たるに至しものと見て可なり。又漢文學の研究も日を追うて盛に、詩賦は前章に述べしが如くなるが、散文も唐制にならひ六朝以來の四六駢儷體を學びて、進士に登第せんとするの風を生じぬ。和銅五年に於て太安廐が古事記の序

寔知懸鏡吐珠而百王相續、喫劔切蛇以萬神蕃息、歎議安河而平天下、論小濱而清國土、是以番仁岐命初降于高千嶺、倭天皇經歷千秋津島、化熊出爪、天劔獲於高倉生尾、遮徑大鳥、導於吉野、列儻攘賊、聞歌伏仇、即覺夢而敬神祇、所以稱賢后望煙而撫黎元、於今傳聖帝云々

の如き、極力彼の風を學べるものたるを見るべし。既に漢文學の修養此の如くなれば、この文字使用の法を移して國語を寫出する事も自然に始り、今までは單に口語の上のみ述べられし歌謡も、此時に及びて始めて目に見るべく表され、從來語部によりて傳誦せられたりし口碑も、この記載法によりて不朽のものたらしめらるゝ事となれり。

是より先、聖德太子の時、國史の編せられし事は前章に云へるが如し。されど

古事記

古事記三卷

こは蘇我氏の亂に兵火の中に没して今に傳らず。日本書紀皇極天皇四年の條に蘇我臣蝦夷等誅悉燒天皇記國記珍寶船史惡尺即疾取所燒國記而奉中大兄あり。然るに今古事記と稱して世に傳ふる物は古事記、日本書紀、古語拾遺等を交へて綴りたる後人の偽作なるべき由本居宣長の古事記傳第その後亦この擧にならふ事ありけれども、未だ其功を見ざりしか一に見えたりば、天武の世、深く上代の神話史傳の誤謬を生じ、且つ煙滅に歸せん事を恐れ、稗田阿禮なる者先に述べたりし語部に屬をして之を誦習せしめ給ひし事あり。然るに元明天皇の和銅四年に及び、漢文字使用の術も次第に自在なるを得しかば、茲に漢文の大家太安廐侶をして、かの阿禮が記憶し暗誦せる神話史傳をば寫し出さしむる事となれり。これ即ち古事記三卷にして上は天神地神の化生より、下は推古の代までに至る事項を漢字の音訓を並用して書き起したるもの、安廐侶自身もその寫出の困難なりしを云ひて

上古之時言意並并、敷文構句於字即難、已因訓述者詞不逮心、全以音連者事趣更長、是以今或一句之中交用音訓、或一事之内全以訓錄

と。漢文字如何に自由なりきとも、彼我の語脈相同じからざれば口語寫出に際しては、その適當なる用語に苦心したりしや、察すべきなり。今その文體

を例せん

於是欲相見其妹伊邪那美命追往黄泉國爾自殿騰戸出向之時伊邪那岐命詔之愛我那邇妹命吾與汝所作之國未作竟故可還爾伊邪那美命答曰悔哉不速來吾者爲黄泉戸喫然愛我那勢命音下効此以入來坐之事恐故欲還且具與黄泉神相論莫視我如此白而還入其殿內之間甚久難待故刺左之御美豆良以音下湯津津間櫛之男柱一箇取闕而燭一火入見之時宇士多加禮斗呂岐豆此十字於頭者大雷居於胸者火雷居於腹者黑雷居於陰者折雷居於左手者若雷居於右手者土雷居於左足者鳴雷居於右足者伏雷居於八雷神成居於是伊邪那岐命見畏而逃遷之時其妹伊邪那美命言令見辱吾即遣豫母都志許賣以音六字令追爾伊邪那岐命取黑御鬘投棄乃生蒲子是撫食之間逃行猶追亦刺其右御豆良之湯津津間櫛引闕而投棄乃生筭是拔食之間逃行且後者於其八雷神副千五百之黄泉軍令追爾拔所佩之十拳劍而於後手布伎都都此二字逃來猶追到黄泉比良此二字坂之坂本時取在其坂本桃子三箇待棄者悉逃返爾伊邪那岐命告桃子汝如助吾於葦原中國所有宇都志伎以音四字青人草之落

古事記の編纂に相つぎ元明天皇の和銅六年五畿七道に命じて物産風土傳説に關する雜事を記載せしめらる。蓋し支那の山海經等に倣へるものなるべし。

風土記の今に残れるもの僅に常陸、出雲、播磨、肥前、豐後等の數者に過ぎず、それも果して當時の選進にかゝるものなるや否やを明にし難きものあり、尙可考
 古老曰石村玉穗宮大八洲所取天皇之世有人箭括氏麻多智點自郡西谷之葦原墾闢新治田此時夜刀神相群引率悉盡到來左右防障令勿耕佃於是麻多智大起怒情著被甲鎧之自身執仗打殺驅逐乃至山口標杭置塚掘告夜刀神曰自此以上聽爲神地自此以下須作人田身今以後吾爲神祝永代敬祭翼勿崇勿恨設社初祭者即還發耕田十一町餘麻多智子孫相承致祭至今不絕常陸風土記註釋に栗田寛氏の標註古風土記一卷最も新し。尙同氏の古風土記逸文二卷考證八卷見るべし

苦瀨而忠惚時可助告賜名號意富加牟豆美命美以音 (古事記上卷)

謂は本居宜長の古訓古事記にによる此の記の釋義多きが中に本居宜長の古事記傳四十八卷最も推すべし

これと殆ど同時に宣命として臣下に賜はる詔勅を漢字を借りて寫し出す事も此頃より始りぬ。文武天皇即位の元年(一三五七)に下し給へるもの續日本紀に見えたるが最も古きものなるべし

現御神止大八島國所知天皇大命止 詔大命乎集侍皇子等王臣百官人等天下公民諸聞食止詔高天原事始而遠天皇祖御世中今至麻氏天皇御子之阿禮坐牟爾繼々大八島國將知次止天都神乃御子隨母天坐神之依之奉之隨聞看來此天津日嗣高御座之業止現御神止大八島國所知倭根子天皇命授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐氏此乃食國天下乎調賜比平賜比天下乃公民乎惠賜比撫賜比 隋神所思行佐久詔天皇大命乎諸聞食止詔

宣命は多く續日本紀に載す。これらの釋義には本居宣長の歷朝詔詞解六卷多く用ゐらる。

文中に見る助辭の小書は、學術語にて宣命書と云ふ。以て當代漢字使用の一斑を知るべし。

古事記の完成後八年、元正天皇の養老四年(一三二八)に至り、舍人親王、太安萬侶等更に得意の漢文を以て、上は天地草創より下は持統天皇の朝に至るまでの編年史を草して朝に上れり。これ世に所謂六國史の第一たる日本書紀三十卷とす、蓋し口碑を記載せるに過ぎざる古事記の編纂に甘んぜず、漢唐の完備せる史傳に私淑せる結果なるべきか。

如上漢唐文明の親炙は直ちに一般の社會の進歩を促し、従つて趣味もまた多大の感化を受けて内容形式共に發達し、臨時の單純なる情緒の發露に過ぎざりし歌謠も、此頃よりは全く意識的構想による一種の文藝品たる事詩賦の夫れ如く、且つ文字の使用いよゝゝ自在なるを得るに至りしかば、茲に當代上下の詠出せる錦心は、借用せる漢文字に寫出せらるゝ事となりしなり。之を集めたるものを萬葉集二十卷とす。當代大小歌人の詠草は殆どこの内に網羅せられ、當代の天才またこの書についてのみ覗ひ知るをうべし。漢文漢字の德澤は大に感謝せざるべからざるなり。

第二章 平城の文壇

文壇の成立

上古の世には所謂文壇なるものはなかりき。精しく云へば、特に文學者を以て目すべき階級なかりしと同時に、國民の總てが低き意味に於ける詩人なりき。たゞし特殊の人の作の今日に残れるのみ。然るに奈良朝時代漢文學の輸入によりて文學の創作が意識せられ、外國思想は特殊なる上流者の修養にのみ待たざるべからざることとなるや、茲に初めて文學者と云ふべき一種の團體が社會の一隅に表るゝに至りしなり。尤も前代の風と同じく文學者ならぬ文學者の作もこの間に甚だ多く出でたるありと雖も、それらは奈良朝文學として重きを置くべき部分のものにあらず。當代の前代と異なる所は文壇建設の當初として、意識的に文學の作せらるゝに至りし點にあり。

和歌は平城文壇の代表

當代の文學は支那の詩賦にならひて國風を創作する事より始る。即ち和歌長歌短歌は當代文學の代表者にして、散文は祝詞の或るもの及び宣命等に過ぎざるが、此等は文學的技術の一部を覗ひ知る材料とはなるべきも、全體を採つて文學と稱するには餘りに實用に過ぐ。故にわが國文學としての散文は平安朝に入りて初めて見るべきものを得たりと云ひて可ならん。

平城文壇の前期

柿本人麿

吾人は當代の和歌に前後の二期を立て、述べんとす。前期に於て最も注意すべきは柿本人麿、山部赤人、大伴旅人、山上憶良等なり。柿本人麿は以上歌人中の先輩にして、持統文武の間に仕へたる人なるが、位階高からざりし故にか、其の進退を明にせず。歌作は持統天皇の朱鳥二三年の頃の「過近江荒都時作歌」を以て始めとし、元明天皇の和銅元年の頃、在石見國臨死之時自傷歌を以て終とす。彼は前代の歌謠が單純にして直覺的の域を脱する能はざりしに反し、その詩想に我が國固有の敬神的觀念を有し、直覺の裡面に趣味の存することを認め、加ふるに、詞藻豊富に修辭も巧となりければ、其の詠める歌は實に我が國文學の最初のものたるのみならず、又古今の文學中にも優勝なるものと言はざるべからず。而して長歌は最も彼が得意とする所にして、滔々百句を連ねて尙倦まざるものあり。但しその作風は多く主觀的にして叙事的の趣には乏しき所あるが如し。其思想中には未だ漢佛の影響を印する少く、殆ど純然たる日本固有民性の、文學勃興の機運に會して發展したる者と見て可なるべし。

玉だすき	畝傍の山の	榎原の	ひじりの御世ゆ
あれましし	神のことく	つがの木の	いやつきくりに
天の下	知召ししを	空に見つ	やまとを置きて
青によし	奈良山を越え	いかさまに	思ほしめせか
天さかる	鄙にはあれど	いはばしの	近江の國の
さざ浪の	大津の宮に	天の下	知召しけむ
すめろぎの	神のみことの	大宮は	此處と聞けども
大殿は	ここといへども	春草の	茂く生ひたる
霞立つ	春日のさける	百敷の	大宮どころ
見れば悲しも			

反歌

さざ浪の滋賀の唐崎ささくあれど大宮人の船待ち兼ねつ
 さざ浪のしがの大わだ淀むとも昔の人に又も逢はめやも
 幸千吉野宮之時作歌

やすみじし	吾大君の	神ながら	神さびせずと
吉野川	瀧つ河内に	高殿を	高知りまして
登りたち	國見をすれば	壘なはる	青垣山の
山ずみの	奉る御調と	春べは	花かざしもち
秋立てば	紅葉かざせり	ゆふ川の	神も
大御食に	仕へまつると	上つ瀬に	鶴川を立て
下つ瀬に	小網さしわたし	山川の	依りて仕ふる
神の御代かも			

反歌

山川もよりて仕ふる神ながら瀧つ河内に舟出せすかも

同

やすみしし	吾大君の	きこしをす	天の下に
國はしも	さはにあれども	山川の	清き河内と
御心を	よしののくにの	花ちるふ	あきつのぬべに

宮柱	ふとしきませば	ももしきの	大宮人は
舟なめて	朝河わたる	ふなぎほひ	夕河わたる
この河の	絶ゆることなく	この山の	いやたかからし
岩ばしる	瀧のみやこは	見れどあかぬかも	

反歌

みれどあかぬよしのの河のとこなめの絶ゆることなくまたかへりみむ
而して彼が特徴は次の短歌中にも観るを得べし。

近江の海 夕波千鳥 ながなけば 心もしぬに 古おもほゆ

山部赤人

山部赤人は少しく人麿に後れ、天正聖武兩朝に仕へたる人の如し。作歌は多く神龜天平の間にあり、人麿の比して歌形小なれども、詞藻簡潔にして更に冗漫の句を用ゐず、端嚴にして犯すべからざる概あるは、優に人麿と相並んで兄弟を争はるべき價値を有すと云ふべし。例へば

望不盡山歌

天地の わかれし時ゆ

神さびて

高く貴き

駿河なる

富士の高ねを

天の原

ふりさけ見れば

渡る日の

影もかくろい

照る月の

光も見えず

白雲も

いゆきはばかり

時じくぞ

雪はふりける

語りつぎ

言ひつぎゆかひ 富士の高嶺は

此歌の思想は、人麿のそれと相似たる點無きにあらずと雖も、其の間また別趣の存するものあるを覺ゆ。總じて彼は當代の歌人中著しく客觀的傾向を有する詩人にして、殊に敘景に於て秀づ。

ぬば玉の夜の更け行けばひさ木生ふるきよき河原に千鳥しば鳴く

和歌の浦に沙みちくれば瀉をなみ芦邊をさして田鶴なきわたる

沖つ浪へつなみしげみいさりすと藤江の浦に舟ぞさわげる

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける

赤人と時を同じうして山上憶良あり。かつて遣唐少録となり、又東宮に侍講たりしこともあり、且つ漢文を作るに巧に、長歌に付せる詞書或は詩等見るべきもの少からざるを以てすれば、其の漢學に精通せりしことは推するに難か

山上憶良

らず。彼は漢文學の修養ありしだけに又佛教にも通じ居りしもの、如く詩序の内に佛理を論じ歌作中著しくこの思想を印せる所あるは、當代に於ては甚だ珍とせざるべからず。されど彼の特色とする所は、理に於ては彼を言ひ、智に於ては之を認め居り乍らも聲にあげて歌ふ心の底に至りては徹頭徹尾今世の執著を離れざる點にあり。

風まじり

雨ふる夜の

雨まじり

雪ふる夜は

すべもなく

寒くしあれば

堅鹽を

とりつづしるひ

糟湯酒

うちすすろひて

しはぶかひ

鼻ひしくた

しかとあらぬ

聾かきなでて

吾をおきて

人はあらじと

ほころへど

寒くしあれば

麻衾

ひきかかぶり

布肩衣

ありのことく

きそへども

寒き夜すらを

吾よりも

貧しき人の

父母は

飢ゑ寒からむ

めこどもは

乞ひて泣くらむ

此時は

いかにしつつか

汝が世はわたる

蓋し此の種の主観的性質に於ては彼は人麿赤人を凌ぐと雖も、惜むらくは想の淳化と語の洗練とに於ては遠く二人の域に達せず。されば淳化と洗練とを以て優るべき短歌に至りては彼の最も拙とする所にして、殆んど取り出でて云ふべきもの無きが如し。たゞ次に燃ゆるが如き情熱ある一二の例をあぐ。

思兒歌

白がねもこがねも玉もなにせむにまされる寶子にしかめやも
なぐさむる心はなしに雲がくれなきゆく鳥のねのみしな加ゆ
すべもなく苦しくあればいで走り去ななと思へど子等にさやりぬ
山上憶良の和歌詩作中に漢文學の影響を印せる點諸所に多く認めらるべし。
例へば「いたき傷にはから鹽をそそぐちふ如くますくも重き馬荷に上荷う
つといふことのこと」或は「年月は流る如し」或は「くれなぬのおもて」などの語句
の見ゆるもの即ちこれなり。されど一篇の歌作として全然漢風のものを見る
に至りしは、大伴大納言旅人に及びて始めて認むる事を得べし。

大伴旅人

わが國に梅の花ちる久方のあめより雪のながれくるかも
 に於ける梅花を稱し或は落花を白雪と見立つるなどは、本來わが固有の思想
 の知らざる所、また人麿赤人等に於ても嘗つて見ざりし所に屬す。こはやが
 て平安朝に入りて國文學の花を咲かしめし古今集歌人の前驅と見るべきも
 のなり。旅人は天智天皇の四年(一三二五)に生れ、聖武天皇の天平三年(一三九
 一)六十七歳を以て薨じ、位は正五位上より從二位まで、經わがり、官は左將軍
 中務卿より大納言までに至りし人なり。性質は清淡豪放の風を尙びしかば
 其の和歌も從つて卒直なる風を帯び、萬葉集の和歌が一般に纖巧なる雕琢を
 用ゐざる特色あるが中にも、殊に旅人に於て此の風あるを見る。
 やすみし、我が大君のみけつくに大和もこゝも同じと思ふ
 奥山の菅の葉しぬきふる雪のけなばをしけむ雨なふりそね
 ゆの原に鳴く芦田鶴はわが如く妹に戀ふるや時わかずなく
 されど彼は到底人麿赤人と肩をならぶべきの人にあらざ、富饒なる想を寓し
 うべき雄篇長歌もなければ、數に於て萬種之美をあらはすべき短歌も多から

前期の歌人

ず、唯巧を求めざるが中に逸はやく支那思想を同化せりといふ點は、此の人に
 於て及び此の時に於て大に注意すべき事實となす。當期に於ては以上四人
 の外、萬葉集中にその作を残せる歌人尠からず。されど多くは平板なる格調
 思想のみにして、國民文學者として特に評論すべき程の價值あるものならざ
 れば、たゞ次にその名を列して一々の批判を略す。
 笠金村。赤人、憶良と殆ど同時に於て得意とする所は長歌にありしが如し。
 傑作としては、所詠郎子作歌を採るべきか。
 車持朝臣千年。金村と同時の歌人なるがその作多からず。
 高橋連虫麿。傳明ならず。又萬葉集にのれる歌も少けれど、後世虫麿朝臣家
 集より出でたりと稱する疑はしき歌も少からねば、尙注意すべきものなるべ
 し。

平城の文壇
の後期

尙、當代の人として長屋王、三方沙彌、久米禪師、長忌寸奥麿、春日藏首老などの名
 あれど、皆短歌のみにして、然もその數多からず。
 次に奈良朝文學の後期とは即ち天平時代より平安遷都に至るまで、凡そ五十

思想の傾向

年の間を指す。吾人は此の間の和歌を通観して、内容の上に於て二箇の思潮あることを認む。即ち一は我が國民固有の思想と、他は前期以來徐々に顯れ來りし漢文學的思想なり。されど隆々たる漢唐の文化はあらゆる方面に於てわが國の崇拜する所たりしを以て、其の勢力は文學の上に於ても優に國民固有の情趣を壓し、和歌をしていよゝ漢化せしめんとする傾を増さしむるに至りぬ。其の漢風が全く勝を制して野扑なる固有想を服し、華麗なる一種の風格を作るに至りしものは古今和歌集にして、祖國をうたへる人麿の詞藻もなく、沈痛なる情を吐露せる憶良の長歌も無し。爰に至るまでの過渡を示せるものは、即ち天平以後の和歌にあり。例へば

まそかゝみ照るべき月を白妙の雲か隠せる天つきりかも

も、しきの大宮人のまかりいで、遊ぶこよひの月のさやけさ

ぬば玉の夜わたる月を止めんに西の山邊に關もあらぬかも

の如き月をめぐる思想は全く後の古今集等に見る所のものと異なるあるを見ず。唯その修辭が尙多少技を弄せざる奈良朝の風を脱せざる點に於て區別

すべきのみ。その他花鳥和琴を題目とし、四季鳴鹿を詠出する等、いづれかの傾向を示すものにあらざる。上に憶良、旅人等をうけ下に平安朝に傳ふる過渡の状態は實に明に此の時代によりて表さるゝものと言はざるべからず。而して此の時代傾向の最もよき代表者は、大伴家持及び女流には大伴坂上郎女なり。

大伴家持

大伴家持は旅人卿の庶子にして生年を詳にせずと雖も、思ふに作歌の始は天平八年十八九歳頃よりの事なるべく、之より天平、天平勝寶、天平寶字の間に於て詠出せる短歌、長歌甚だ多く、萬葉集中十七、十八、十九、廿の四卷は多く彼の歌のみを以て充さる。その他の卷にも往々にして混在す。

葦原のみづほの國を
天くだり
知らしめしける

すめろぎの
神のみことの
御代かさね
あまの日つきと

しらしくる
君の御代々々
しきませる
四方の國には

山河をひろみあつみと
たてまつる
御調寶は

かぞへえず つくしもかねつ ……(賀陸奥國出金詔書歌)

父のみの ちゝのみこと 母そばの はゝのみこと

おほろかに こゝろつくして 念ふらむ その子なれやも

丈夫や ひなしくあるべき梓弓 末ふりおこし

なくやもち 千尋射わたし 劔たち 腰にとりはき

足びきの やつをふりこえ さしまくる 心さやらず

後の世の 語りつくべく 名をたつべしも (慕振勇士之名歌)

又憶良旅人等に入して漢想を顯し、橘時鳥、七夕、總じて四季景物を題目とする。ことに彼に至つて特に著しきを見ると、雖も其歌は比較的巧を求むるの風を見るに至りしが故に、天才なき多作は形式に於てこそ一般に整頓したるものとはなりたれ、人麿の詞藻なく、赤人の品韻なく、憶良の情熱なければ、内容は平板單調にして獨創の變化に乏しくなりぬ。たゞ彼に於て大に取るべきは、彼の家系がもと武を以て君に仕へし名門たりしだけ、又彼自らも兵部少輔征東將軍の職に在りしだけ、常に名を惜む士人の高志を有し、大君の爲には父母

妻子の恩愛をも捨つるの覺悟を歌ひ出せるもの多き點にあり。「喻族歌」陳防人悲別之情歌「慕振勇士之名歌」の如き即ち見るべし。かの人口に膾炙して士氣を鼓舞する「海行かばみづく屍山行かば草むす屍」大きみの邊にこそ死なめかへり見はせし」の語も、また彼が長歌「賀陸奥國出金詔書歌」に出でたるものとす。

なでしこが花見ることゝに處女らが笑まひのにはひ思ほゆるかも

いにしへよしぬびにければ雀鳥鳴く聲きゝて戀ひしきものを

渡人も舟をうかべて遊ぶとふ今日ぞわが背子花鬘せよ

櫻花今さかりなり難波の海おして宮にさこしめすなへ

大伴坂上郎女は旅人の妹にして家持の叔母に當る。その女坂上大嬢が家持の妻となりし關係等より家持と贈答の歌甚だ多く、聞秀作家としてのみならず、天平時代の一般文學者中に於ても優勝なる者たり。其の作は長歌少く短歌に於て勝る。亦平安朝に於ける女流作家輩出の先驅をなせる者とも見るを得べし。

後期の歌人

思へどもしるしもなしと知るものをなどこゝばくも我が戀ひわたる
 千鳥なく佐保の川瀬のさいれ波止むときもなしわが戀ふらくは
 夏の野の繁みにさける姫百合のしらえぬ戀は苦しきものを
 いとまなみ來ざりし君に雀鳥われかく戀ふといきて告げこそ
 その外當代の歌人として作を萬葉集に残せるもの、橘諸兄、久米廣繩、坂上大麿、
 橘奈良麻呂、藤原仲麻呂、市原主、大伴池主、忌部首黑麻呂、藤原真楯、大伴村上等尙
 多しと雖も、彼等多少の詠作は、以て奈良朝後期の文壇の價値を輕重するに足
 るものならず。

第三章 萬葉集

當代文壇の大勢は、前に述べたる所の如し。此等の消息を今日に告知す
 るものは萬葉集廿卷なり。萬葉集は漢文字の使用自在なるに至りしに従つ
 て當代の初期より、より一書き記し置ける人々の歌集を基とし、大伴家持が
 見聞せる歌と、之に己が歌集とを加へて、雜然廿卷となせるものなるべし。さ
 れば國語をうつすに用ゐし漢字の使用法一定せず。或は漢文そのまゝの如

漢文 萬葉集の用字

きあり

忘哉 語意 遺 雖過 不過 猶戀 (十二卷)

肅玉 五年 雖經 吾戀 跡無 戀不止 怪 (十一卷)

或は國語を直寫せんとするに音訓混用のものあり。

朝露 乃既 夜須 伎我 身比 等國 爾須 疑加 豆奴 可母 意夜 能目 遠保 利 (卷五)

大伴 御津 松原 可吉 掃豆 和禮 立待 速歸 生勢 (同上)

全く音のみを以てせるあり。

和我 保里 之安 米波 布里 伎奴 可久之 安良 波許 登安 氣世 受杼 母登 思波 佐加 延

牟 (卷十八)

和我 世故 能夜 度奈 流波 疑乃 波奈 佐可 牟安 伎能 田布 弊波 和禮 乎之 努波 世 (卷

二十七)

又訓中にも正訓あり。

朝露 天地 白雲 珠 弓

義訓あり。

義訓

正訓

音

音訓混用

金野

高山

冬風

求食

戲訓

戲訓と云ふべきあり。

山上復有山(出) 向南(北) 十六(猪)

而して此等のうち正訓と稱すべきものは、即ち漢字が當代語と同化して、全く日本語となりしもの、謂なれば、集中此の種の語彙を研究せんことも上代國語史上必要のことなるべし。

さて、當代の和歌の内容につきては前述せる所にては、いゝ観ふを得べし。然らば之に伴ふ形式は如何。この時代の歌には長歌五七の句を重れて終と短歌五七七の形と旋頭歌五七七の形とあり。このうち短歌の數最も多くして、後世和歌の範疇を確定せるものなれど、尙當代の特色としては長歌を押さゝるべからず。十五句以下のもの百十二首、五十句以下のもの百九十三首、五十句以上百五十一句までのもの三十七首、總て三百四十二あり。堂々たる此等の長歌、或は君を敬ひ、或は人を悲み、情を歌ひ、景を敘ふるに、調は概ね五七の句を用ひ、對句と枕詞と、時には序歌とを以て形容修辭するを慣例とし、この法に於て成功せる

形式

修辭

旋頭歌

者は當代の名手にして、この法を得ざるものは平凡なる作家たるの結果を見たりき。共に長歌の多くを有する人麿と家持との徑底は唯この點のみを以ても判じ得べく、又引いて奈良朝前期と後期との差異もこの點より論ぜらるべきものあるが如し。更に云へば對句と枕詞と序歌とは少くとも上代に於ける長歌の缺くべからざる條件なりければ、その豊富なる使用によりて奈良朝前期の文壇は勃興せしに、やがて後期には作家に天才なき爲か、この使用甚だ少く、歌は韻文ならずして次第に散文の性質に近づき來りたれば、情緒の興奮を以て生命とする歌は其の存在の意義を薄くし、平安朝に入るやこの傾向ますます、甚しき所、爰に長歌は創作の數を減じ、雄渾なる修辭を要せざる短歌のみがひとり和歌の名を占有するまでには至りたり。尙旋頭歌は五七七を二度繰したるものなるが故に、ふたもと、うたと呼べり。されどこは極めて諧調を缺ける形なるが故にか、當代を過ぎては殆ど行はれず。

春日なる三笠の山に月の舟出づみやび男の飲む盃に影の見えつゝ(作者未詳)

第三篇 平安朝の世

平安遷都

時は延暦の三年(一四四四)咲く花の匂ふが如くと歌はれたる平城の都を後に
 殘し、山城長岡の地に宮柱ふとしきませる桓武天皇によりて、新なる時代は始
 れるなり。ついで十年都が今の京都の地に定められしより、後鳥羽天皇の文
 治元年(一八四五)源頼朝政權を掌るに至るまで、正しく四百年之を平安王朝と
 し、我が古典文學が清新なる粧をこらして、古今の文學史上尤も光榮ある時期
 を成せる間とす。この時に種々の浪風にもまれて曲折百態消長斷續時の長
 かりしだけ變化の狀況も一にあらず。されば吾人はこの長き世の有様をう
 かがふの便として、まづ左の四時期を區別し、この順次に従つて文壇の狀勢を
 視はんと欲す。

一 外交時代(一四四四—一五四四)。

桓武、平城、嵯峨、淳和、
仁明、文德、清和、關成。

二 藤原時代(一五四五—一六四四)。

光孝、宇多、醍醐、朱雀、
村上、冷泉、圓融。

三 藤原時代(一六四五—一七二八)。

花山、一條、三條、後一條、
後朱雀、後冷泉。

時代區劃

奈良朝と平
安朝

遣唐使

文明の輸入

四院政時代(一七二九—一八四四)。

後三條、白河、堀河、鳥羽、崇徳、近衛、
後白河、二條、六條、高倉、安徳。

第一章 外交時代

第一節 漢詩文

政治上に於ける平安朝の初期は全く奈良朝の繼承のみ。都市の區劃が平城
 のそれに倣へたるものなるより始め、百官制度まづ以て前代の定に従ひ、然も
 常に文化の源泉をば唐の盛觀に求むる風にてありしが故に、延暦二十三年藤
 原葛野麿等を唐に遣せる外、大同元年に高階遠成、承和五年に藤原常嗣を遣唐
 し、善隣の交をなせる事の外、努めて彼の國の文化を輸入せんとし、遣唐使の往
 復には必ず留學生を伴ひて彼に學ばしめぬ。されど大寶以來政治に於ては
 既に彼の長所を學ぶことを得たれば、今はその後をつぎて力を學術、文藝、宗教
 の上に致し、一私人の入唐も相ついで行はれ、要するに此の間は奈良朝以前の
 たどだどしき模倣とは異り、真にかの七の文明を理解して之を我に移植する
 に至りし時代となりしなり。然るに寛平六年菅原道真を大使とし、紀長谷雄
 を副使として入唐せしめんとするや、當時唐末亂離の時に際せるを以て、道真

遣唐使

等入唐の益なかるべきを奏して止む、これより以後朝家遣使の舉絶えられたれば、私としては尙入唐のものありきと雖も、社會の表面はかくありしだけ、文明輸入の風次第に下火となり、従つて外國思潮の清新なる刺激漸く薄らぐに至り、今更で壓服せられ居たる本邦文學は、これより漸く勃興せんとする機運に向ひたるなり。

學校

まづ之を學術の上に見るに、大寶令以來、唐の制にならひて京師に大學寮あり、諸國に國學あり、又此の代に及びては、縉紳名流その門の勢力に従ひて私學を興し、一族子弟の薰育にあつるもの少からず、和氣氏の弘文院、藤原氏の勸學院、橘氏の學館院、在原氏の養學院、恆貞親王の淳和院及び僧空海の綜藝種智院の如き即ちこれなり。而して大學に於て教ふる所は、明經、紀傳、明法、算の四道を主とすと雖も、その才を試みて之を官に登用せんとするや、講說解義の明に採るよりは、對策の文藻に重きを置くの傾ありしを以て、世に出でんと希ふ程の者は、皆争うて詩文の術を練り、堂上の一般も亦滔々この風に靡きたり。蓋し墮唐の間詩賦最も盛に弄ばれ、文人詞客の世に重んぜらるゝ風あるを模せし

文藻を重んず

詩文家

によるものなるべく、これやがて今後の平安朝社會が詩歌管絃を偏重し、廟堂の人政治を疎外して朝暮飲宴遊樂に耽るの風を生ぜし基ともなれるなり。當代の漢詩文家としては、先づ空海と嵯峨天皇とを以て第一位に押さざるべからず。之について小野篁、菅原道真、仲雄王、賀陽豐年、良岑安世、清原夏野、菅原清公、滋野貞主等あり、女流には有智子内親王あり。少しく後れては、春澄善繩、大江音人、菅原是善、島田忠臣、橘廣相、都良香、藤原佐世、大藏善行、菅原道真、紀長谷雄、三善清行、三統理平等あり。共に當代の名匠にして、其の作は、凌雲集、文華秀麗集、經國集、本朝文粹及び各家の私集にかゝげらる。

贈賀和尙

嵯峨天皇

賓公遁跡星霜久 萬事無情愛寂然 水月尋常冷空性 風雷未敢動安禪

苦行獨老山中室 豎嶽偏宜林下泉 遙想焚香觀念處 寥々日夜看雲烟

後夜聞佛法僧鳥詩

空海

閑林獨座草堂曉 三寶之聲聞一鳥 一鳥有聲人有心 聲心雲水俱了々

奉和王昭君

良安世

廢地何遼遠 關山不恣行 魂情還漢闕 形影向胡場
怨逐邊風起 愁因塞路長 願爲孤飛雁 歲々一南翔

山寺鐘

仲雄王

古寺館東山翠下

日暮嗷咷響疎鐘

天籟相和幽洞谷

餘音過盡白雲峯

天台夜鐘

島田忠臣

寺在天台最峻峯

危樓夜打五更鐘

秋風一道淒々起

吹度深溪凡幾重

早春

都良香

氣霽風梳新柳髮

冰消波洗舊苔鬢

自詠

菅道真

離家三四月

落淚百千行

萬事皆如夢

時々仰彼蒼

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持每日拜餘香

天地始終

菅原清公

問混元肇判方圓自形或陽或陰日高日厚壽七耀而左旋較萬靈而右闕斯則
千品之源三才之本者也然而遞成遞壞釋氏之教斯存有始有終儒家之風不
落今欲法之釋教彼始自空尋之儒風其終焉在雖默語別道辭有頗異而聖哲

詩風

同致何可錯子才爲世出識作物表優劣異同佇聞芳話

此等詩文家の最も多く學べる所は文選なりき。併もこは甚だ上代よりの事
なりしが當代に於て特に愛讀せられたるものを白氏文集とす。著者白居易
は樂天と號し中唐文華の間に出づ。その詩文平明優雅にして些も難解の跡
なく日常の情趣を寫して流麗暢達なるものありければその詩はしなくも我
が國に入りて非常にもてゐるべし。今後の詩人相率ゐて之に私淑しわが漢詩
は殆ど彼が亞流を以て目すべき程のものなりき。菅公の詩の如き最もその
意を得たるものとす。

此等漢詩の歴史外漢文のもまたつゞいて此等の學匠によりて編せられぬ。
續日本紀四十卷桓武天皇延曆十六年日本後紀四十卷仁明天皇承和九年續日
本後紀二十卷清和天皇貞觀十一年文德實錄十卷陽成天皇元慶三年これなり。
上には奈良朝の日本書記と下には次時代の三代實錄五十卷醍醐天皇延喜元
年とを合せてこれを六國史と稱す。以て如何にこの時代に漢詩文の隆盛な
りしかを推知するにたるべし。

第二節 新宗教の弘通

天台の最澄

延暦二十三年遣唐せられたる大使の船は、壯年有爲の僧最澄日本天台宗の祖、空海真言宗の祖、弘法の二人をのせて彼の地に渡せり。最澄は近く天台宗の清寺に上りて道邃に天台宗を享け、又佛隴寺行滿に禪、越州龍興寺順曉に三部密教を受けて翌年歸朝す。歸來王城の鬼門比叡山上に薬師堂を建て、徐々に僧坊を築きて新宗弘通の根本道場となしたる者やがて日本天台宗の開立にして、又向後勢力をうべき延暦園城二寺の基なり。空海は遠く進んで長安に入り青龍寺惠果に就いて兩部秘密の大法を享け、經論曼荼羅諸具を齎して、澄に後る、一年大同元年十月歸朝す。これわが國真言宗の始なり。この二宗の經論教義等は多少奈良朝よりこれ無きにあらざりしかど、一宗の組織を備へて堂々其の義を張るに至りしは、全く二師渡來の以後よりとす。而して此等二宗の教理は今茲に論ずべき餘地を有せざれども、この二宗が今後わが國民精神上に及ぼせる重要な影響の存するあるをば忘るべからず。そは天台宗の一部及び真言宗の全部を成せる密教は、その形多神教的の性質を有す

真言の空澄

密教の隆盛

るが故に、新しき勢力としてこれに近接せるわが國民は、従つてそれらの説き知らする多くの佛菩薩を崇拜する事となりし事なり。兩師の後天台の圓仁慈覺大師、圓珍智證大師等の入唐求法するに及びては、天台の本義よりは、むしろ附隨の密教却つて重んぜらるる傾を生じ、天台の密教なる之に加へて真言宗真言宗は東寺を本據とするがの諸名匠も相前後して入唐し、天台の傳教、慈覺、智證、故にこの密教を東密と稱す、の諸名匠も相前後して入唐し、天台の傳教、慈覺、智證、行、慧、遍、宗、觀、を稱して入唐し、八家といふ。この外天台の彼の土の盛行に倣ふ所ありしかば、密教の體制はこれよりますます、整備するに至り、平安朝の佛法はこの點のみによりても、前代とは全く面目を一新せるものとなりたり。尤も奈良朝以前より多くの佛菩薩はなきはあらざりき。法隆、東大、薬師、興福諸寺に現存する佛像を見るに、佛には釋迦、阿彌陀、薬師あり、菩薩には觀音、勢至、彌勒等あり、天部に梵天、帝釋、四天王等あり。されどその信仰は自由にして各宗の宗義と必然の關係を有するものにあらず。然るに密教の一度わが國に入るや、大日如來の化身として四佛阿彌陀、寶生、四菩薩、觀音、勢至、妙賢より五明王不動中央、降三世、東、西、南、北、諸天天、水、天、風、天、日、金剛部、龍王、羅刹鬼、まで、殆ど無數の神格を生じ、此等神

格の製作配列觀念の法は取りも直さず秘密教成立の要素にして、之を規定せる儀軌は同教の間に動すべからざるものとして尊ばれ、此等の諸尊に對しては、息災、増益、福德、敬愛、鉤召、或は滅罪、延命、除病、平産等あらゆる天變地異人事をかゝげて、其の所望を達せんとする思想となりたれば、之を美術上より見れば信仰對象のおびたゞしき要求によりて佛像佛畫の製作頓に勃興し、天平期の純唐式より進んで漸く本邦固有の優雅なる趣を顯し來れる所謂弘仁期の美術を生ずるに至りたり。

弘仁美術

又之を思想上に見るに、此の如き多神的崇拜と、及びその巧妙なる教旨とは、從來の疎笨なる國民の精神を動して著しく宗教的ならしめ、又次第に情緒的ならしむるに力ありしものなりき。之と同時に同代支那に行はれたる諸種の妄信も、次第にわれに移されたる事を忘るべからず。支那は後漢以後晋梁隋唐の間、西域印度等の影響によりて種々の民間信仰を生じ、殊に道教神仙の思想、怨靈、物怪の妄信甚だ盛なりければ、わが平安朝の初期には此等の妄信も多神的崇拜の思想に相伴ひて入り來り、國史にも延暦十六年以後しきりに崇道

支那思想

情緒的傾向

天皇の靈を恐るゝ事見え、天長八年には物怪の爲に讀經し、承和四年にはこれが爲に悔過せる事あり。この後國民思想の感情的なると共にこれらの妄信しきりに行はれ、之に對しては密家の修法は必ず要せらるゝ事たりしが故に、あらゆる妄信をも包擁して捨てざる東台の兩密教は、更に國民の感情を過敏ならしめ、互に相依り相輔けてますます、向後に盛行するに至りぬ。たゞその影響の著しくあらはれしは、第二期以後にして、それが文學上に見るべくなりしは第三期以後よりなり。

第三節 和歌

前述の如き漢唐詩文の模倣及び盛行は、大に當時文壇の趣味を養成し、やがて次時代に面目を一新せる國文學の勃興を見るの基をなせるものなりと雖も、この修養期間に於ける和歌(當時に於ける國文學の全體は未だ甚だ盛なる運に達する事能はざりき。當代の歌人としては世に六歌仙と稱する僧遍照(四七五—一五五〇)在原業平(一四八五—一五四〇)文屋康秀、僧喜撰、小野小町、大伴黑主及び小野篁(一四六二—一五一二)菅原道真(一五〇二—一五六四)藤原敏

行(一) — 一五六七あり。其他尙多少の作者の名を知られずして作のみ残れるもなきにあらざれども、社會の表面は漢詩文の勢力に覆はれて大に振ふを得ず、知己を次期に得て始めて面目を施せるの觀あり。一概に云へば當代の歌は奈良朝後期の歌風に一步をすゝめて、いよゝゝ優雅なる平安朝趣味に轉じ來れる事を示すと雖も、尙、いづこにか素朴の質を存して、艶麗の域に入らざるものと見るべきが如し。

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ蟹のつり船 篁

數ならばかゝらましやは世の中にいと悲しきは賤が小だまき 同

君が住む宿のあたりをゆくゝも隠るゝまでにかへり見しはや 道眞

東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ 同

妹が門過ぎ行きがてに草結ぶ風吹きとくな逢はむ日までに 業平

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉 同

途に行く道とは兼ねてきゝしかど昨日今日とは思はざりしを 同

たらちねはかゝれとしてしもうば玉のわが黒髪をなでずやありけむ 遍照

末の露もとの雫や世の中の後れさきだつためしなるらむ 同

思ひいでゝ戀しき時は初雁の鳴きてわたると人しるらめや 黒主

玉津島ふかき入江を漕ぐ舟のうきたる戀もわれはするかな 同

夢路には足も休めず通へども現に一目見しとはあらず 小町

色見えでうつるふものは世の中の人心の花にぞありける 同

わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ 同

かり菫の思亂れて我が戀ふと妹知るらめや人しつげずば 藪人しらず

駿河なる田子の浦浪たゝぬ日はあれども君を戀はぬ日はなし 同

宵々に枕さだめむかたもなしいか寝し夜か夢に見えけむ 同

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる 同

夜を寒み衣かりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり 同

されどこの卦實と輕華、單純と婉曲とは同じ時に於ても人の傾く所によりて

異りあり。僧正遍照の如きは構想練辭の最も新しきものなりき。

名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな

新傾向

小町が

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき
の如きも殆ど遺憾なく平安朝女流の特色を示す。之をとつてかの大伴坂上
郎女が歌に比せば前後百年に於ける歌風變遷の真相を知るをうべし。

而して平安朝文學の成立には前述せる漢詩文及び宗教の關係の外に、わが新
國字の發明てふ一事與つて大に力ありし事を忘るべからず。古事記、宣命、萬
葉集の用字は如何に熟したればとて、到底借用の文字たるを免れず、一語をう
つさんが爲にも劃多き數語を要するの不便は、文明進歩の社會には堪ふべか
らざる所なりき。茲に於て漢字の劃を省くより片假名出で、草書の形を和ぐ
るより平假名生れぬ。この作者につきては古來諸説片假字は古來吉備眞備の
字片省略の自然的發達にして一人の作に成りしものにあらずと云ひ又は佛者の筆記
の便より始りこれを五十音圖に配當せるものは吉備眞備なるべきかと疑ふ。次に平
假字は空海の作となすを通過とすれども研究せる學者多くはこれを疑ひ、これも萬葉
假字の草體の自然的發達に出でしものにて作者を定むべからずといへり。又、これは萬葉
は空海の作とも云ひ、まぢくなると雖も、奈良朝の終より平安朝の初期にわた
れる社會の要求が、當代先進の手をわづらはして徐々に此等の新字を陶冶し

假字の發明

出さしめ、これより普く世に行はれて、女流の間もしくは文人の私用に供せら
れたるものなるべし。漢詩文隆盛の間は、和歌は所謂私に屬せるものなりき。
そがこの新國字の普及と共に潜に詠出せられたりしは即ち當代第一期の歌
にして、そが捨つべからざるものとなりしは即ち第二期なり。

第二章 藤原時代 (上)

第一節 和歌

見捨つべからざるものとして、和歌が公より勅選せしめられたるは、醍醐の聖
帝延喜五年(一五六四)五月のことなり。嵯峨天皇の漢詩勅選後醍醐集一卷小野岑
王等に選せしめらるるに對々して、和歌が文壇に重要な地歩を確定するに至り
しはこれよりなり。

これよりさき醍醐天皇紀友則紀貫之、凡河内躬恆壬生忠岑に勅してその家集
を献せしめ、萬葉集に入らざりし歌をも合せて續萬葉集を選せしめられしが、
重ねて勅ありて二十卷を精選せしめ給ふ。古今和歌集即ちこれなり。全部
を別ちて春(上下)、夏(秋)(上下)、冬(賀、離別、鬪旅、物名、戀)(一、二、三、四、五)、哀傷(雜)(上下)、雜體(長

古今和歌集

歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所歌、東歌とす。四季と及び戀とが如何に當代歌人の好題目たりしかを見るべきと同時に、今後この傾向がわが歌人思想を支配したるもの大なりしことを思はざるべからず。

古今和歌集その歌數一千百餘首、この集の註解は平安の末より鎌倉室町徳川時代も云ふべき二三を擧ぐれば、季吟の抄、契沖の餘材抄、眞淵の打草、堂長の道鏡、尾崎雅嘉のひなことば、景樹の正義等なり作者は上は人麿等の奈良朝歌人より六歌仙を経て下當代の人々に及ぶ。人麿等については奈良朝既にこれを論じ、六歌仙等につきてはほゞ前節にかゝげしが如し。然れば當代を代表する歌人としては、その選者貫之、躬恆、忠岑、友則等を押して其の歌風を見ざるべからず。

紀貫之(二五四二—一六〇六)傳詳ならず。延喜の頃御書所預となり、延長八年土佐守たりしことは文學上に關係多き時期たりき。天慶九年卒す。彼は古今集選述につきては實にその主腦者たりしもの、如く有名なる假名散文の序は彼の手に依りて成れるもの、後世歌をいふものは必ず上代の柿本人麿と并べて歌の聖となす。されば歌人としては其の才甚だ疑ふべきものありと

紀貫之

は云へども、彼が歌風は後世の歌人に指導を與へ少くとも古今集に選進せられたる諸歌の標準となりしものたるや疑なきなり。彼にまた新選和歌集四卷の選及び家の集二卷あり。

共に群書類從に收めらる。其外土佐日記一卷、蟻屋の神に奉る和歌序(扶桑拾葉集二)大井川行幸和歌序(同上)新選和歌集序(本朝文粹一一)等の著あり。散文につきては後章に之を述ぶべし。

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり

あつさ弓はるの山々を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

あふ坂の關の清水に影見えて今やひくらむ望月の駒

の如きは尙多少眞率の調を存すと雖も

人はいさ心も知らずふる里は花を昔の香に匂ひける

わが宿を春と共にし別るれば花は慕ひてうつろひにけり

の如きは情緒にみならずしてむしろ理屈なり。

わがせこが衣はるさめふる毎に野邊の緑ぞ色まさりける

君まさで煙たえにし鹽竈のうら淋しくも見えわたるかな

など、かけ語の巧を見れども却つて人の感興をそぐものあり。
夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一聲にあくるしのゝめ
に至つては、優麗を過ぎて既に纖巧の域に入れるもの、後世新古今等に見
と甚だ差異なきを見る。

凡河内躬恆

凡河内躬恆(一五一九—一五六七)は延喜の頃丹波和泉等の任にあつて位置甚
だ高からず、貫之と交つて情親密なるものありしが如し。共に當代文壇の重
鎮たりと雖も、其の向ふ所多少異なる所あるを見る。彼は古今集の他の作者と
同じく理性的傾向を有し

秋深み戀する人の明しかね夜を長月といふにやあるらむ

照る月を弓張としもいふことは山邊をさしていればなりけり

世を捨て、山に入る人山にても猶うき時はいつち行くらむ

の如き興味に成立てるもの少からざるも、また摯實多恨

みな人は花の衣をきる中にひとりぞ老に沈みはてぬる

ことさらに死なむことこそ難からめいきてかひなく物おもふ身は

吉野川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

の如きもなきにあらず。然も彼に於て注意すべき所は纖巧なる情趣を以て
容観の景を敘し、又修辭上體言止となせるもの

住の江の松を秋風ふくからに聲うちそふる沖つ白波

秋風に山とび越えてくる雁の羽むけにきゆる峯の白雲

の如き、平安朝末期の歌に酷似せるものを有することなり。

紀友則

紀友則(一五〇五—一五六五)は貫之の縁者にして整へる歌風は貫之のそれと
相比すべしといへども、歌數の多からざるは即ち彼が前兩者に一步を譲る所
なり。

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

命やは何そは露のあだものをあふにしかへば惜じからなくに

宵の間もはかなく見ゆる夏蟲にまどひ勝れる戀もするかな

壬生忠岑

壬生忠岑(一五二八—一六二五)は右衛門府生攝津權大目等の下官に歴任し、又

藤原定國の隨身たりしことあり。貫之、躬恆等に雁行する歌人として選者の列に加へられたる人なれども、一般に辭句の洗練足らざるもの多きを以て、その想に於て勝れるものにあらざる限りは、往々にして見るに足らざるものあらんとす。

山里は秋こそ殊に侘しけれ鹿のなく音に目をさましつゝ、

陸奥にありといふなる名取川無き名とりては苦しかりけり

されどその修飾なき所却つて戀歌に可なるものあり。

命にも勝りて惜しくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり

有明のつれなく見えし別より曉ばかりうきものはなし

思ひやる心の程は果もなし風のいたらぬ隈は多かり

右の外當代に名あるものは清原深養父、藤原與風、在原元方、大江千里、素性法師等あり。今一々に論ぜず。

要するに、當代の和歌は前代、特に萬葉集のそれに比して著しき變遷をなせるを見る。

萬葉と古今

句法

(二)句法が五七より七五の調に移りしことなり。奈良朝の歌は長歌は勿論短歌も殆ど五七の調を以て本體となせしに、平安朝初期に及びては五七と七五との兩調相半し、この期に及びては殆ど七五調を主とするに至りたれば、凡そ五七の調に伴ひて發達せる長歌も、こゝに至りて甚だ振はず、殊にこの期に始れる三句切は形式の擴大をゆるさざる性質のものとして、これよりいよく短歌の運命を定むるものとなれり。蓋し七五の諸調は優雅なる平安朝人士に適せる自然の勢によれるものならん。

「おほ君^五のみことかしこみ^七」おほの浦をそがひに見つゝ、「都^七へ登る」(萬葉集二十卷) 流れては「妹^五春の山の中^七」におつる「吉野^七の川^五のよしや世の中^七」(古今集十五卷)

ちはやふる 神の御代より くれたけの よきにも絶えず

あまびこの おとはのやまの 春霞 思ひ亂れて

五月雨の うらもとゝろに 小夜ふけて 山ほとゝぎす

鳴くごとに 誰もねざめて からにしき 立田の山の

紅葉ばを 見てのみしのふ かみゆきの 猶消えかへり

としごと
君をのみ
富士のねの
ふじごろも
すべらぎの
伊勢の海の
玉の緒の
年をへて
つかふとて
板まあらみ

ときにつけつゝ あはれてふ
千代にといはふ 世のひとの
もゆる思も あかずして
おれる心も やちくさの
おほせかしてみ まきくしの
うらのしほがひ 拾ひあつめ
みじかきこゝろ 思ひあへず
おほみやにのみ ひさかたの
かへりみもせぬ わがやどの
降り春雨の もりやしぬらむ

ことを云ひつゝ
思ひするがの
別るゝなみだ
言の葉ごと
中につくすと
取れりとすれど
猶あられたまの
書よるわかず
悉草生ふる

こは其之がふる歌奉りし時の目錄に添へし長歌なり。用語の新しきはさるものにて、修辭は萬葉の對句を失ひ、歌調は漸く五七より七五に移り轉じて長歌の特徵を失ひて散文に近づき來りし事を示す。

(二)修辭の修練進み、助辭、助動詞の使用多くなりしこと。奈良朝の歌は想の素朴と伴ひて辭の修練に乏しく、發露せる直情は或は玉となり或は瓦となれ

るものなりしが、古今集の當時に及びては社會文化の進歩に従つて歌作の意識盛んとなり、句の配置より語の選擇まで、次第に用意せらるゝ事となり、特に助動詞、テニヲハ少くして、倍偏粗放の風ありし萬葉集より進みて「らむ、らめ」けるけりの助動詞、ぞけるこそ、けれの係結、かなばや、やはばかりの如き助辭の用ゐを盛にして、歌調を整頓し、優麗閑雅の風格を生じたり。もし此度を過ぎてこの技を巧にせば、冗漫或は輕浮の弊に陥るべき傾のものなれども、古今集は未だかくの如く甚しきには至らざる間にあり。

夢とこそ云ふべかりけれ。世の中をうつゝあるものと思ひけるかな。
かり菫の思ひ亂れて我が戀ふと妹知るらめや人し告げずば
久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ
人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける
心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花
有明のつれなく見えし別よりわかづきばかりうきものはなし
ぬるがうちに見るをのみやは夢と云はんはかなき世をも現とは見ず

墨染の君が袂は雲なれやたえず涙の雨とのみ降る

(三)前代の單純なる思想が複雑に進みしと云ふの外(イ)事實を離れて思惟となり、真情を忘れて推量的となりしこと。

秋風に初雁ぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらむ

年のうちに春は來にけり一年を去年とや云はむ今年とや云はむ

山田もる秋のかりいはにおくつゆは稻負せ鳥の涙なりけり

心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花

雪のうちに春はきにけり鶯の氷れる涙今やとくらむ

(ロ)人事景物に對する悲觀の漸く増加し來りしこと。奈良朝に於ては佛教の無常觀は、世は常なし、世は憂し、朝露の我が身と云へるが如く、單純なるものに過ぎざりしが、

世の中を常なきものと今ぞしる奈良の都のうつろふ見れば

世の中はかすなきものか春花の散りのまがひに死ぬべく思へば

朝露のけやすき我身ひと國にすぎがてぬかも親の目をほり

この頃に及びては人生に對する意識の漸く發展すると共に、人間生死の無常の外、飛花落葉の瑣事にも心を勞し、わけて、戀愛情交の無常を悲むの風を生じ、はかなき命、露の身、うき世の語は至る所に繰返されぬ。

いざ櫻吾もちりなむ一盛ありなば人に憂きめ見えなむ

まてといふに散らでしとまゐるものならば何を櫻に思ひ増さまし

蟬の聲さけば悲しな夏衣うすくや人のならむと思へば

の如き消極的思想多くなり來りぬ。此の如き傾向は後世いよいよ盛に行はるるに至りし者にして佛教傳播の影響のこゝに及びしものと見るべきなり。

以上を總括したるものは即ち藤原時代の前期を代表する古今集の性質なるが、此集一度勅選せられて和歌が社會の表面に尊重せらるゝや、是より相續いて歌人を以て自ら任ずる文學者次第に多く表れ來りぬ。延喜の聖帝醍醐天皇御治世卅三年、史を編し、

皇御治世卅三年、史を編し、實錄三十卷を撰びて三代格式を定め、延喜式五十卷を撰びて

ひ、風土記を徴し、元明天皇和銅六年始めて諸國に令して風土記を奉らしめしが、

十四日の大政官符に、五畿七道諸國司應早速勸進風土記奉右如、同諸國可有風土記、宣不

天曆の盛時
詩文

到得通問符宗教を保護し文人を奨励せられ、朱雀天皇を経て村上天皇に至りては、天皇殊に文事を好ませ給ひしかば、文人詞客相并びて起り、歌合の弄始り詩合も亦之にならひて行はれぬ。是を天曆の盛時となす。まづ詩人には大江家に朝綱あり。前相公音人の孫、後相公といふ。渤海客の歸郷を送れる詩序
前途程遠 馳思於雁山之夕雲 後會期遙 沾纓於鴻臚之曉淚
は客をして感歎措く能はざらしめきといふ。維時また彼の從弟として詩文に名あり、江納言と稱す。菅原家には道真の孫に文時あり、菅三品と稱す。詞藻流麗、朝綱と共に當代の雙壁と稱せらる。其の他皇弟兼明親王(前中書王)橘直幹、源順等あり。其等の諸作はおよそ扶桑集、本朝文粹、和漢朗詠集等にをさめらる。多くは前期道真等の詩風の更に倭化したるものにして、やゝ辭句の一層華麗なるを見ると雖も、想の必ずしも進歩せるものあるを認むべからず。さてこの間に於ける和歌は、古今集選の後四十六年、天曆五年(一六一二)始めて梨壺に和歌所を置き、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城の五人に命じて萬葉集を釋し、併せて前代の集に漏れたる和歌を選せしめらる。此の集を

後選集

和歌の餘弊

後選和歌集と稱し、選者を梨壺五人と云ふ。されどこの集は奏覽を経ざる未定稿たりしものゝ如く、其の體整はず、編集の方針もまた古今集の缺を補ふにありたれば、其の特色として茲に論ずべき要を見ず。唯當代の和歌は感によりて起る自然の聲にはあらずして、むしろ意識的に作り出すものとなり、男女の贈答、歌合、題詠の具として才器をあらはすべき翫び物となり來れる傾あるを注意すべし。されば鑑賞の標準は、作の優劣よりも、機智の興味による所多く、歌作は流行の外観を有し、文士詞客の輩出彬々たるが如きものありと雖も、實は内容に於て早く保守沈滯の風を生じ來りしものたるを免れざるなり。然も此の集及び當代一般の歌作を通じて更に注意すべきことは、太平の餘弊として上流男女間の風俗次第に姪卑に進み、和歌が最もよきこの媒介具となり來りしことなり。戀愛は何時の世にも好適なる詩歌の題目となり、又製作の動機たるべしと雖も、當代及び次期の如く和歌を以てこれが要具とせることは東西決してこれ無き所なりき。

この集の註釋には北村季吟の抄、契沖の標註、中山美石の新抄、宣長の詞のつがれ緒等あり。

題しらす

橘 敏 仲

わび人のそぼつてふなるなみだ川おりたちてこそぬれわたりけれ
返し

大 輔

淵瀬ともこゝろもしらす涙河おりやたつべき袖のぬるゝに

又 敏 仲

こゝろ見に猶おりたゝむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと
涙川にぬるゝてふ興味を繰返す外何ぞ趣味の索然たる事や。

著名の作者

源順は當代の學者學才は眞の天才にあらず。清原元輔は深養父の子、清少納言の父。歌人としてはむしろ順に越ゆべし、大中臣能宣は神人の家系として自らも祭主に身を立つ。子に輔親及び伊勢大輔あり。時文は貫之の子、親の後をつがんと覺束なし。その外赤染衛門の實父と稱せらるゝ、平兼盛忠岑の子壬生忠見また當代の歌人なりき。女流には紀内侍、檜垣の姫等あり。老いぬれば同じことこそせられけれ君は千代ませし。水の上に照る月なみを敷ふれば今宵ぞ秋の最中なりける

同 順

花薄まねく袂はあまたあれど秋はとまらぬものにぞありける 元 輔
御垣守衛士のたく火の夜は燃えて晝は消えつゝ物をこそ思へ 能 宣
さりともと頼む心にはかられて死なれぬものは命なりけり 忠 見
さよふけてねざめざりせば郭鳥人づてにこそ聞くべかりけれ 同
梅が香をたよりの風や吹きつらむ春珍らしく君が來ませる 兼 盛
秋風の關吹き越ゆるたび毎に聲うちそふるすまの浦浪 同
勅なればいともかしてし簀の宿はと問はひいかゞ答へむ 紀内侍
年ふればわが黒髪も白川のみづはくむまでなりけるかな 檜垣の姫

第二節 散文

平安朝の初期漢詩文の盛なりし間は、未だ國語を寫し出せる散文學現れざりしが、假名の發明によりて思想を寫出する方法容易となるや、韻文の勃興と共に散文も徐々に製作さるゝに至りたり。その先達とも見るべきは、歌人として前に覗ひたりし紀貫之等なるべし。彼は漢文にも通じ、自ら選せる新選和歌集に序を物せる程なれど、尙彼は國風宣揚の重任を自覺したりしものゝ如

紀貫之

く、新國字を使用して始めて新國文を作り出した。古今和歌集序、大堰川行幸和歌序及び土佐日記は今に残る所の標本なり。古今集の序は子夏の作と稱せらるゝ詩經序などをや範とせりけん、よく序の體を得て和漢を融合し彼の清とこれの麗とを集めて、優に後世の模範たるべき一種の文體を始めたるなり。されどその文は畢竟するに和歌の論序にして純粹なる文學を以ては目すべきにあらず。

やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人事わざしげきものなれば心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花に啼く鶯、水に棲むかはづの聲を聞けば生きとし生けるもの孰れか歌を詠まざりける力をも入れずして天地を動し目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌天地の開け始りける時より出で來にけり、然はあれども世に傳はる事は久方の天にしては下照姫に始り荒金の地にしては須佐の雄の尊よりぞ起りける。千早振る神代には歌の文字も定らずすなほにして

ことの心分きがたかりけらし、人の世となりて須佐の雄の尊よりぞ三十もとあまり一もとは詠みける。かくてぞ花を愛で鳥を羨み霞を憐び露を悲ぶ心、言葉多く様々になりける。遠き所も出で立つ足もとより始りて年月を渡り高き山も麓の塵ひぢよりなりて天雲の塵くまで生ひのぼれる如くこの歌もかくの如くなるべし。

大堰川行幸和歌序亦前者と殆ど同體の文なり。土佐日記は貫之が晩年土佐の國守となり、任滿ちて歸京の途に上れる承平四年十二月廿日より翌年二月十六日舊宅に入るまでの旅中日記なり。當代文人の日記聖明親王の幸部王記、師輔の九層師尹の小一條記、小野宮實頼の水心記、實資の小右記等は皆漢文を以てせる頃なるに、男もすなる日記といふものを女もして見んとてするなりと、自らは女と稱してこの純國文を物せしものなるが、句法單純にして連續形の語少き、わが初期の散文狀態は最もよくこれらのうらに視はるゝなり。この世の註釋にて參考すべきは幸吟の部の舟の直路、景樹の創見等とす。抄、富士谷御杖の燈、岸本由豆流の考證、橋守

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は白馬を思へどかひなし。たゞ浪の

白きのみぞ見ゆる。かゝる間に人の家の池と名ある所より鯉はなくて鮒より始めて川のも海のものもどまながびつに擔ひつゝけておこせたり。若菜こに入れて雉など花につけたり。若菜を今日をば知らせたる。歌あり。そのうた。

淺茅生の野邊にしあれば水もなき池につみつるわかかななりけり
いとをかし。

當代の日記
紀行

蜻蛉日記

これよりこれにならひて日記を物するもの相ついで出で、僧増基の庵主熊野紀行、遠江道記、大中臣能宣の榊葉日記等あり。少しく後れて右大將道綱の母に蜻蛉日記あり。但し蜻蛉日記の頃に及びては和歌は後選集勅選の前後にして多少沈滞の状を見しと雖も、散文は新進の勢を以て次第に勃興せんとする機運に向へる時なれば、その文に於て、その内容に於て土佐日記よりも一段の進歩をなし、且つ著者自身も明し暮すまゝに世の中に多かるふる物語のしなどを見れば云々と云へるが如く、この頃までには既に種々の物語小説も出で來し如く見ゆれば、自然にその感化をうけて、事實を主とする日記も次第

に茲に小説化せんとする傾を生ずるに至りぬ。

つくづくと思ふつゞくることは猶いかで心として祈にもえにしがなと思ふより外のこともなきを唯この一人ある人を思ふにぞいと悲しき。人となしてうしろ安からむ女などにあづけてこそしかも心安からむとは思ひしか。いかなる心ちしてさすらへむずらむと思ふに猶いと死に難くいかにせむ。形をかへて世を思ひ離るやと試みむも語らへば又又深くもあらぬなれど、いみじうさくりもよと泣きて、さなりたまはまろも法師になりてこそあらめ、何せむにかは世にも交るはむとていみじくよと泣けば、我もえせきあへねどいみじさに戯に云ひなさむとて、さてたかくはては如何し給はむずるといひたれば、やをら立ち走りてしすゑたる鷹をさりはなちつ。見る人も涙せきあへず。まして日暮し難き心地に覺ゆるやうあらしへば思ひにわぶるあまぐもに脱ごまづる鷹ぞ悲しかりけるとぞ。日暮るゝ程は(に)文見えたり。天下(の)脱ごそら言ならむと思へば唯今心ち悪しくて漸今はとてやりつ。

此頃に高光日記あり、世に多武峯少將物語と云ふものこれなるべし。九條師輔の八男藤原高光が應和元年十二月世を厭ひて叡山に上りまた大和多武峯に隠れたる折の事實記なり。

もしこれらの我が身、人の身の経験が想像として取扱はるゝに至れば、事實は一轉して寫實小説となるべし。

然らば、當代の小説は如何なりしぞ。凡そ小説の起源は神話傳説に始り、後次第に自然人生の描寫に進むを常とす。わが國の小説に於ても古事記、日本書紀、萬葉集或は諸風土記中に存する趣味ある小話は、その起源と見るべきものなるが、之について一作家が一事件を題目として首尾の整へる物語を組織するに及びて、初めて説話的小説は成立す。其の種の小説の現存する最初の者は竹取物語なり。萬葉集中の傳説にも見えたる竹取の翁が、竹の中より不思議の子を得ておぼし立てたる赫耶姫といふ絶世の美人を主人公とし、之に戀する五人の貴紳が、わが戀かなへんとての各の失敗談及び御門も強ひて後宮に入れんとし給へどもうけがはざりし筋を敘し、かくて始は月界の天女の罪ありて假に人界に生をうけたるものなりければ、今はその罪の償終りて、ある

小説の起原

竹取物語

思想の由來

作者時代

年の八月十五夜月宮の使に迎へられ昇天せんとするに、翁嫗悲泣して姫を放たざらんと歎き、姫自らも餘波を惜みて思を千々に碎くと云ふを山とし、遂に護衛防禦のつはものゝ方も及ばず、仙車に乗じて月明に遠く去り、後には帝へと残せる文と不死の薬とをば、之さへ思の種とて富士山上に焚き捨てさせ給ふ、不盡の山とその烟とは之よりの事なりとの結なり。月界の天女に關する物語はもと佛教月上女經に面白きこれに由來せるも雲に乗じ車を廻らして上天下地する狀況は、支那神仙譚より教へられたる所の如し。蓋し當代まで佛典に伴ひて印度説話の漸々われに輸入せられし事の外、雜書に滿載せられて六朝隋唐の間に盛行せる神仙恠談の、わが國民思想に感化を與へたる事實に豫想の外にあり。而して此等の感化は奈良朝及び平安朝初期に於て未だ十篇の作物を出すに至らず、口碑や記録や歌謠やの内に組みこまれて漸く其面影を見しむるに過ぎざりしが、假名の使用によりて韻文の勃興する頃に、始めて小説の體形を得て文壇にあらはるゝ事となりしなり。されど其の作者及び作の年代は詳ならず。宇津保物語初秋の巻既に赫耶姫の名なるのせ、源氏物語繪合

覽れば我國最初の小説たる事は殆ど疑なきに往よりありしものなるべし。竹取物語に源氏物語に繪は巨勢相作と云へる借これが見ゆれば延喜の以て源氏物語に繪は巨勢相作と云へる借これが考説もまち／＼なりと雖も、大凡宇多醍醐兩朝の頃即ち古今和歌集作者の榮えし時代に出でしとの説穩當なるが如し。わが國文學の興隆に於て散文が常に韻文に後る、事即ち古今集はわが國文の精華にして後世の範となるべき價值を有するにもかゝはらず、竹取物語は思想と文體とに於て未だ全く幼稚の域を脱せず。又其の作風幼稚にして原始的説話の小説なるに加へて、作者が常に滑稽の意を寓せることは觀過すべからざる特徴なり。これ恐らくはわが國民の輕快なる樂天的性情による所多きものなるべけれど、又以て作者が切實なる人生觀を立つるまでに至らず、小説の作を以て一種の戲事となせるに依る事無からずや。さきに觀へる土佐日記もまた至る所にこの調を帶ぶ。要するに假名文創作の未だ眞摯なる業と信ぜらるるに至らざりし時代の特風と言はざるべからざらん。

今はむかし竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつゝ萬の事につかひけり。名をば讚岐の造磨となんいひける。その竹の中に

樂天性反映

本光る竹一すぢありけり。怪しがりて寄りて見るに筒の中光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう。われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめりとして、手にうち入れて家にもてきぬ。妻の嫗にあづけて養はず。美しきこと限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。……

中納言石上磨は家につかはる、男どもの許に燕の巢くひたらば告げよと宣ふを、うけたまはりて、何の料にかあらむと申す。答へて宣ふやう。燕のもたる子安貝とらむ料なりと宣ふ。……日暮れぬればかの寮におはして見給ふにまことに燕巢作れり。くらつ磨申すやうに尾をさゝげて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて燕の巢に手をさし入れさせて探るに物もなしと申すに、中納言悪しく探ればなきなりと腹だちて、誰ばかりおぼえんにして、我のぼりて探らむと宣ひて、籠のりて釣られ登りて窺ひ給へるに、燕尾をさゝげていたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめたるものさはる時に、われ物握りたり今は下してよ翁しえたりとのたまひて、

集りて疾くおろさんとして、綱をひき過して、綱絶ゆる。即ちやしまの鼎の上
 にのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目
 はしらめにてふし給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじて息
 出で給へるに、又鼎の上より手とり足とりして下げおろし奉る。辛うじて
 御心ちいかゞ覺さるゝと問へば、息の下にてものは少し覺ゆれど腰なん動
 かれぬ。されど子安貝をふと握りもたれば嬉しく覺ゆるなり、まづ脂燭さ
 して、この貝顔見んと御々しもたげて御手をひろげ給へるに、燕のまゝりおけ
 る古糞を握り給へるなりけり。それを見給ひて、あな、かひなのわざやと宣
 ひけるよりぞ、思ふに違ふことをばかひなしといひける。

竹取物語と殆ど同じき頃に伊勢物語あり。こは歌の詠み出されたる由來の
 小話を集めたるものにして、其の歌は多く在原業平の作にかゝれば、思をひそ
 めて之を味ふに、其の間に自ら一貫せる業平一代の經歷はうかゞひ得べきが
 如し。故に古來よりこの作者を以て業平自身となす説もありと雖も、又後人
 の試に出でしものならんとの説もありていづれとも確定すること難し。た

伊勢物語

作者

その文簡古にして平安朝第一期の末、第二期の初を下るものならざるは誤
 なるべし。かの竹取物語が説話的小説の最古のものなると共に、これはま
 た歌物語の前驅として、初期の散文學を飾るものと見るべきなり。この物語の
 平安朝末より表れ室町時代に於ても和歌歌重の風につれて數々の書を出せるが中
 特に参考にあすべきは徳川時代に季吟の拾遺抄、契沖の臆所、眞淵の古意加茂、季鷹の
 傍註、清水波臣の添註、藤井高尙の新釋等なり。
 餘へし。現代の學者にも二三同種の著あり。

昔田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出で、遊びけるを大人にな
 りにければ男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思
 ひ、女もこの男をこそと思ひつゝ、親のあはすることも聞かでないありける。
 さてこの隣の男のもとよりかくなん
 つゝ井筒あづゝにかけしまるがたけ過ぎにけらしなぬひ見ざるまに
 女かへし

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずして誰かなづべき
 かく云ひくゝて遂に本意の如くあひにけり。さて年頃ふる程に女の親な
 くなりてたよりなくなるまゝにもるともに云ふかひなくてあらんやはと

て河内の國高安郡に行き通ふ所いで來にけり。さりけれどこのもとの女あしと思へるけしきもなくて出しやりければ男こと心ありてかゝるにやあらんと思ひ疑ひて前裁の内にかくれ居て河内へ去ぬる顔にて見ればこの女いとう化粧じてうちながめて

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君が一人こゆらむ

と詠みけるをきゝて限なく悲しと思ひ河内へも通はずなりにけり。さてまれくかの高安に來て見れば初こそ心にくもつくりけれ今は打ちつけて髪を頭にまきあげて、面長やかなる女の手づから飯匙を取りて筒子のうつは物に盛りけるを見て、心うがりて行かずなりにけり。さりければ彼の女、大和の方を見やりて

君があたりみつゝを居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも

と云ひて見いだすに、辛うじて大和人こむと云へり。よろこびてまつに度々過ぎぬれば

君來むと云ひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬものゝ戀ひつゝぞをる

大和物語

と云ひければ、男すまざるにけり。

伊勢物語に對して大和物語あり。その出でたるは凡そ五十年を下れる天曆の頃のもの、其の名が相關するものあるが如く内容も前者にならへる歌物語にして、延喜天曆頃の男女の情話、和歌の贈答を寫し、且つ後部に於て特に和歌に關する口碑傳説を敘しぬ。處女塚傳説、芦荊傳説、采女傳説、娘捨傳説等は布衿せられて、この物語中に一篇の譚となり、後世の文學に材料を供せる點注意するに足る。この書の註釋には季吟の抄、眞淵の眞解、井上文雄の冠註等あり。

陽成院の二のみこ、俊蔭の中將の女に年比すみ給うけるを女五のみこを得奉り給うて後更にとひ給はざりければ、今はおはしますまじきなめりと思ひ絶えて、いと哀にて居給へりけるに、いと久しくありて思ひかけぬほどにおはしましたければ、え物も聞えで逃げて戸の内に入りけり。歸り給うて、みこあしたに、などか年頃の事も申さむとて參うで來りしに、隠れ給ひしとありければ、詞はなくてかくなむ

せかなくに絶えとたえにし山水のたれしのべとか聲を聞かせむ』

昔ならの帝に仕うまつる采女ありけり。顔かたちいみじう清らにて人々よばひ殿上人などもよばひけれどあはざりけり。そのあはぬ心は帝を限なくめでたきものになむ思ひ奉りける。帝召してけり。さて後又も召さゆりければかぎりなく心愛しと思ひけり。よるひる心にかゝりて覺え給ひつゝ戀しく侘しくおぼえ給ひけり。帝は召しゝかど事ともおぼさずさすがに常は見え奉る。猶世に經まじきこゝちしければ夜ひそかに出で、猿澤の池に身を投げてけり。かくなげつとも帝は得しろしめさゆりけるを事のついでありて人の奏しければ聞しめしてけり。いといたうあはれがり給うて池のほとりにおほみゆきしたまうて歌よませたまふ。柿本の人まろ

わぎも子がねくたれ髪を猿澤の池のたまもと見るぞかなしき
とよめる時に帝

猿澤の池もつらしなわぎも子が玉藻かづかば水ぞひまなし
とよみ給うけり。さてこの池に墓せさせ給うてなむ歸らせおはしませしけ

るとなむ。

されど作の時代の新しうなりしだけ其筆委曲に及び、少しく冗漫に失して、勢語の簡淨奇抜なるに及ばず、歌の作が伊勢物語の價值に及ばざるが如くに他の文もまた大に稱するに足らず、これより凡そ二十餘年を経て、宇津保落窪の二物語あり。宇津保は竹取物語の系に屬する説話物語のやうく、進歩せるものにして、發端の俊蔭の巻は天人佛菩薩の奇特或は阿修羅變化の怪談を以て充さるゝが、其の後段、巻をたつること、藤原君、嵯峨院、忠こそ、梅花笠、吹上、祭使、菊宴、貴宮、初秋、田鶴群鳥、藏開、國讓、樓上の十餘、敘する所は左大將正頼と嵯峨院の女一宮との間に由でたる、貴宮てふ美人を中心として多く貴紳が身を忘れ心をつくして戀ひ渡るさま、の筋にて、遂に貴宮が東宮に参りて御子一の宮を生み給ふにて一段落となし、ついで、かつて貴宮を得んと希へる男の中或者は志を失ひて世外に出でたるものもあれど、他の多くの才人は皆配を得て仕途も心の如くに叶ひ、東宮即位し貴宮第一の女御となり給ふに及びて一の宮東宮に立ち給ひ、又貴宮と相對し理想的の男子として寫されたる仲忠は、祖

父より傳へたる彈琴の名譽によりて、一門の加階昇進心のまゝなる由にて局を結ぶ。作者は紫式部の父藤原爲時又は源順の二説あれども信じ難し。時代は圓融のみ後篇は後人の手に成りしものかと。内容を以てすれば別種と見えざるにあられども文體より見れば全部一貫のものなること疑なきが如し。

又上野宮とてふる親王おはしけり。其親王は物ひがみ給へる親王にておはしけり。……貴宮に御文あり。されどあやしきものにおもおし聞え給はず。此親王萬におほし騒ぎて陰陽師巫はくち京わらべ姫翁召し集めて宣はく「我此世に生れて後妻とすべき人を六十餘國唐土新羅高麗天竺まで尋ね求むれども更に無し。この右大將源の正頼のぬしの女子ども十よ人にかゝりてあなり。一人にあたるをば帝に奉りつ。其次々悉くとゝのへたり。残れる九に當るなむ四方の國聞さしにかくばかりの人聞えず此女なむ耳につく。心につく。しかあるに父大將に乞ひ正身に乞ふに女も大將も今にうけひかず。いかなる佛神に大願を立てなでふ事のためばかりをしてか女のおもむくべきと宣ふ時に、比叡の山に惣持院の十禪師なる大徳の云ふやうかたきを得んずるやうは比叡の中堂に常燈を奉り給ひ又奈良長

谷の大ひさ人の願みて給ひ龍門坂本壺坂もと大し、かくの如くすべて佛と申すもの土をまろがしてこれを佛と云は、御あかし奉り神といはむには天竺なりとも大幣帛奉らせ給へ、百萬の神七萬五千の佛に御明幣帛奉り給は、佛神各與力し給はむ。天女と申すとも降りましまむ。況んや娑婆の人は國王と聞ゆとも、赴き給ひなむをや又山々寺々にあぢきなく物なき行ひ人を供養し給へと聞ゆ。親王の宮いと尊き事なり、御みあかしはいくらばかり奉らん。大徳一寺に米一合奉り給ふとも、比叡の四十九院に一月に一石四斗七升なり、大小も同じごと各奉り給ふばかりなり。ひさうとして思ひならねど、佛に奉るものは徒にならず、來世未來の功德なり」と聞ゆればいと痛う喜び起居七たび拜み給ふ。わが聖の如くなし給へば大徳ぞうけい、何かおぼす、此事御心にしみためり、いとよく叶ひ奉りなむ。若しさらむ宿世なくば、少し心許なくなむあらむ、男女の御中は昔縁のまゝなり」と聞ゆ。この君しかありとも我が大事の聖の君この事赴けしめ給へとて此の御みあかしの料幣帛の料皆とらせ給ひつ。

此の一籍を通観するに、説話的物語の性質より人生的小説の域に進めると同時に、文體もやゝ整ひて人事の委曲を盡しうべきが如くなり來れりと雖も、其技未だ圓熟の境に入れりとは云ふべからず、人物の配置宜しきを缺き、長篇なるに比しては趣向餘りに平凡なるに過ぐ。而して吾人のこの書によりて注意すべきは(一)時代の進歩と共に佛教的感化次第にあらはれ來りしが如くなるも、一般國民の樂天的性質は尙所々に滑稽なる筋として畫かれたること。(二)竹取にも見しが如く堂々たる貴紳が一美婦を得んが爲に、朝な夕なにうき身を篋して餘事なきが如くなるは、描寫が唯其の一面のみに力を入れたるが爲にもよるなるべけれど、さりとは又平安宮廷の紀綱ゆるみに弛める有様を反映するものなること。(三)平安朝は眞よりも善よりも大に美を重ずる時代なりしこと。殊に音楽は當代に於ける最も理想的技術にして、鬼神も爲に心を和らげ佛天も爲に影向し、この技の爲には奇特靈瑞も敢てあやしむべきにあらずと信ぜられ居たることなりき。

註釋の書には細井貞雄の玉琴、新釋、及僧契沖の河社あり。本多忠憲に不拂摩、安藤爲

落窪物語

章及び桑原刀自に考等あれど、此の番題解の語句少からざれば未だ充分なる了解をなし得ざる如し。

落窪は中納言忠頼といふ人の姫君、繼母にくるしめられて寢殿の一隅落窪なる所に置かれ、落窪の君として異腹の妹等にさへ輕しめられ居たりしが、時の左大臣の子左近少將なる人に思はれて深く契をこめ、これより少將の計らひにて繼母の一系重ねくりに苦しみを蒙ることあり、つひに父中納言も心解けて少將及び姫の心づくしを悦ぶに至り、大納言に申し上されてうれしさのうち、に父は薨じ、少將は大納言大將より左大臣をへて太政大臣にまです、み、子孫も榮華を極めたりといふめでたき筋なり。親子の關係を重んずるわが國に於て繼母の虐待物語は、既に此の時代の社會よりありしを材とせしものなるべく、弱きを助けて強きをひしくわが國民の俠氣的精神は、少將が姫に同情して繼母北を方^りを苦しむる筋の上に十二分にあらはされたるを覺ゆ。されどこれを以て後世の儒者が所謂勸善懲惡の主義を寓したるものとは見るべからず、また佛者の所謂因果應報の理を示せるものとも解すべからず、儒佛の主

義によりて文學を支配するまでには時代並に作家が進み居らざりしなり。かるが故に因果の理を考ふるまでに思慮深からざる作者の樂天性は、至る所に快濶なる描寫をなし滑稽の趣をあらはし居るも亦この書の一性質となす。未だ全く外國思潮によりて蔽ひつくされざる率直なる固有性を流露せるものと云ふべきなり。

この書の註解には僅に眞淵の頭書、源道別の註釋あるのみ。現代中村秋香氏の落筆物語大成出づ。

今はむかし、中納言なる人のむすめあまたもたまへるおはしき。大君、中の君には聲どりして、西の對ひんがしの對に華々としてすませ奉り給ふ。三四の君にも、裳させ奉り給はむとて、かしづきぞし給ふ。又ときく通ひ給うけるわかんどほりばらの君とて、母もなき御むすめおはす。北の方、心やいかいおはしけむ、仕うまつるごたちの數にだにおぼさず、寢殿のはなちいで、の又一間なる落窪なる所の二間なるになむ住ませ給うける。君達ともいはず、御方とはましていはせ給ふべくもあらず。名をつけむとすれば、さ

すがにおとゝのおぼさむ心あるべしとつゝ、み給うて、おちくぼの君といへとのたまへば、人々もさいふ。おとゝも、ちごよりうたくやおぼしつかずなりにけむ。まして北の方の御まゝにて、はかなき事多かりけり。……むつきのつごもりによき日ありけるに、物まうでする人ぞよかなるとて、三四の君、北の方、車ひとつして忍びて清水にまうづ。をりしもこそあれ。三位中將殿の北の方、男君もまうで給ふに、中納言殿の車は、とくまうで給ひければ、さいだちゆく。しのびたりとて、御せんもなにかいすゝみたり。中將殿は男女のおはしければ、御前いとおほくて、さきおひちらして、いとまうにてまうで給ふ。さきなる車は尻ばやに追はれて人々わびにたり。たいまつすきかげに、人のあまた乗りたるにやあらむ、牛くるしげにてえのぼらねば、しりの車どもせかれて、とゞまりがちなれば、雑色どもむつがる。中將殿人を呼びて、誰が車ぞと問はすれば、中納言の北の方の忍びてまうで給へるといふに、嬉しく詣であひにけりとした心には、をかしく思して、をのことも先なる車とくやれといへ。さるまじうはかたはらにひきやらせよとの

たまへば、御前の人々、牛弱げに侍ればえさきにのぼり侍らじ。かたはらに引きやりてこの御車を過せといへば、中將、牛弱くば、おもしろの胸にかけ給へ。このたまふ聲いとあいぎやうづきてよしあり。車にほの聞えて、あなわびし。誰ならむとわびまどふ。猶さきに立て、やれば、中將殿の人々、えひきやらぬ、なぞとてたふてをなぐれば、中納言殿の人々、腹立ちて、事といへば、大將殿ばらのやうに、中納言殿の御車ぞ、はやう打てかしといふに、この御供の雑色ども、中納言殿にもおづる人あらむやとて、たふてを雨の降るやうに車になげかけてかたやうにあつまりて押しやりつ。中將殿の御車どもはさきだてつ。御前よりはじめて人いと多くてうちあふべくもあらねば、片輪を堀におしつめられて、物もいはであり。

第三章 藤原時代 (下)

第一節 藤氏の榮華

良房基經以後藤氏の攝政關白として朝廷の樞機を司り、外戚の縁によりて一門權勢の巷に立ちしことは早く前代に於ても見る所なりしが、師輔の子兼家

花山天皇をたばかりて出家せさせ參らせ、女詮子の出たる一條天皇を位に即け參らせてより、藤氏の運次第に張るに向ひ、その子道隆、道兼、道長相ついで關白の職に當るや、道長特に豪毅にしてよく他の群小を壓し、政權を專にするこゝと殆ど三十餘年、長女彰子を納れて一條天皇の中宮とし、後一條後朱雀の兩御門を生み、二女妍子は三條天皇の中宮となり、三女威子は後一條天皇の中宮となり、四女五女亦共に女御となりて外戚の權甚だ強く、加ふるに子息の賴通は關白左大臣、教通は内大臣、賴宗、能信共に大納言の顯位に上りて一門の榮達皆世の羨む所となりぬ。彼が、この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へばと歌へるもの、得意の條想見すべし。次期にあらはれたる榮華物語四十卷は實に彼を中心としてその一門の榮華を詳述したるものなり。此の如き榮華は泰平安逸の世に於て始めて專にするを得べし。然り當代に至りては、漢佛によりて養成せられたるわが國の文化始めて圓熟し、上下に文學、美術、音樂の天才を出し、尙多くの閨秀を出しぬ。一條天皇位にましますと二十五、年朕の人を得たることは延喜天曆にも勝れりと自贊し給へる程な

りき。且つ同天皇最も音楽を好ませ給ひ、神樂歌の散佚を患へて三十八曲を制定し、東遊五曲と共に祭祀に用ゐらるる事とし給ふ。又催樂風俗、朗詠、雅樂、散樂亦この頃に盛に行はれぬ。當代の遊戯としては、音樂の外に詩合、繪合、香合等あり。雙六、圍碁あり、打毬、蹴鞠あり。貴人は常に此等風流韻事に夜を明し日を暮して互に相劣らざらん事をこれ競ふ。まことに泰平無事の世と云はざるべからざりき。併し乍ら此のとき泰平安逸、風流韻事は、ことごとく一般國民の幸福なる樂天性を助養せしものなりやといふに決して然らず。延暦弘仁の頃、天台眞言の新しき宗教が輸入せられしより、顯教としては法華經の講讀至る所に行はれ、密教としては國家及び箇人の爲に修法祈禱が盛となりて、國民一般の宗教的觀念が前代よりも著しく進み、其流弊としてあらゆる事項をば、悉く宗教の説明する所によりてのみ解釋せんとする傾を生じ、病患、災厄、成功、失敗みなその理を無形なる佛神魔縁の所爲と考ふるが如き思想となりたるが爲、泰平の文弱と相待つて大に國民精神を情緒的ならしむるに至りたり。支那の思想になれる陰陽五行の説もこれに混交して大に行はれ

宗教的信仰

支那思想の混入

宗教的風俗

嫁娶、元服、葬儀、方位等吉凶禍福を卜占し、凶を忌み吉をよるこゝの習慣は、今も俗間に信ぜらるゝが如く、いとしいしき人々の精神をばいよゝゝ感情的ならしめたり。而してこの感情的精神はやがて、自己が來世に對する願慮を促さしむるにも大にたよりとなり、無常にして思ふにかなはぬ事多きこの土を厭ひて、満ちたらぬ事なき無量壽の極樂淨土に往き生れんとの思想次第に盛ならんとし、現世の幸福追善供養の爲には法華八講等の功德をつみ、除病息災等の爲には加持祈禱を營み、後世安樂の爲には阿彌陀佛を念ずる事、これ即ち當代人士の思想信仰の大略なりき。かるが故に榮華を極めたる藤原氏の代々も一門の氏寺として南都興福寺を尊敬する事の外に、基經は極樂寺を建て、忠平は法性寺を初め、師輔は楞嚴院を定め、兼家は法興院を、爲光は法住寺を、道隆は積善寺を造り、殊に道長は京極に法成寺を建立し、善美を盡して内外の莊嚴を極めたりければ、時人皆目を驚かして、極樂淨土この世に顯はれけると評せる由大鏡に見えたり。御堂關白の稱は即ち之より生ぜるなり。其の外從來の寺塔を修理し、像具を寄進することも擧げて數ふべからず、されば此等の貴紳

淑女は朝には現世に誇りて一門の榮華をよろこぶと雖も、夕につらく我が身を觀ずればかげるふの儚きをば悲まざるを得ず、しばらくは忘れてこの世の甘き酒に酔ふと雖も醒むればやがて悲しきわが運命に思ひ及ぶ。この兩思想の出入と衝突とは、取りも直さず此の時代前後の人々の心的状態にして、貴紳は多く灌頂受戒し、病ある者は剃髮して罪障を輕めんことに心を用ゐ、死後は冥福の爲住宅を寺として莊園を寺領とすることも、盛に行れぬ。さればかの望月のかけたることなしとほこれる道長も、一度病の床に臥しては、佛を頼み後生を畏れて髪を剃り戒を保ち、佛名を唱へ、臨終の行儀には一門僧俗にとりかこまれて

たゞいまはすべて此の世に心とまらべく見えさせ給はず、このたてたる御屏風の西おもてをわけさせ給ひて九體の阿彌陀佛をまもらへさせたてまつらせ給へり……すべて臨終念佛おぼしつけさせ給、佛の相好にあらずよりほかのいろを見んとおぼしめさず、佛法のこゑにあらずよりほかのよの聲をさかむとおぼしめさず、後生のことより外のことをお

來世觀念

ぼしめさず御めには彌陀如來の相好を見たてまつらせ給、耳にはたうとき念佛をさこしめし、御心には極樂をおぼしめしやりて御手にはみだ如來の御手の絲をひかへさせ給ひて北枕に西向にふさせ給へり。(榮華物語つるのはやし)

さしもに勝ちほこりたりし御堂關白の信仰此の如し。以て如何に當代が佛教的感化を蒙ることの多きに至りしかを見るべし。當代の繪畫、彫刻、文學等皆この状態を反映せざるなし、後世に所謂平安朝趣味と稱せらるゝものは主にこれらの間に顯されたるものを標準とするなり。

第二節 源氏物語

靜に慮れば憂世悲しく後の世も心細けれど、事なき折の紳士淑女は、多く現世を樂みて文藝にうき身を雲し居たりしのみ。されば文學特に小説も、宇津保落窪以後相ついで作り出され、弄びかはされたりしもの、如く、この後凡そ二十年の間に世にあらはれたる小説の名目は、かたの少將物語「からもり」狛野物語「正三位物語」せり川物語「はこやのと」物語「以上源氏物語に見えたるもの」梅

同代の諸物

壺少將物語「埋木物語」園ゆづり物語「道心すゝむる物語」月待女物語「殿うつり物語」ひとめ物語「松が枝物語」以上、枕草子に見えたるもの等其の他尙多くに及びぬ。惜い哉此等の小説は今に存在せざるを以て、其の文體内容の如何は知るに由なしと雖も、兎に角に當時文學的機運の盛なりし事と、年と共に内容外形のいよゝゝ發達し來りしものあるべきとを想見するの料たるべし。實に此等の充分なる準備を得たる後、洗練と修飾とを完うして一大小説を作成するに至りしものは、紫式部の源氏物語なり。前期に行はれたる歌物語及び日記の特色も大凡美化してこの内に納め入れられたり。

紫式部

紫式部は越前守藤原爲時の女、性聰敏父について史記を學べるに、兄惟規に先んじて之を諳んじたりければ、爲時は男にてもたばやと云へりきとぞ。されど温順謹慎にして他にほこらず、深き造詣をつゝみて一文字をだに知らざるが如く装へる由彼の女の日記に見ゆ。長じて左衛門權佐藤原宣孝に嫁し大貳三位、辨の局の二女を生む。長保三年四月宣孝卒するの後寡居すること數年、ついで出で、一條天皇の中宮彰子に仕ふ。蓋し源氏物語は彼の女が

源氏物語

寡居の頃につらゝ世のありさまを觀じて稿を成せしものなるべし。式部時に三十歳前後か。その歿年も後一條天皇の頃、五十歳前後と思はるれど詳なることは知るに難し。さてこの閨秀作家によりて成されたる源氏物語とは、光源氏と稱せらるゝ玲瓏美玉にも譬へつべき貴公子を主人公として、其の一生及び其の一族の關係を描寫せるによつての名なり。この物語、卷を立つること五十四帖。

- | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|----|-----|-----|----|----|-----|----|
| 桐壺 | 帶木 | 空蟬 | 夕顔 | 若紫 | 末摘花 | 紅葉賀 | 花宴 | 葵 | 賢木 | 花 |
| 散里 | 須磨 | 明石 | 落標 | 蓬生 | 關屋 | 繪合 | 松風 | 薄雲 | 槿 | 乙女 |
| 玉鬘 | 初音 | 胡蝶 | 螢 | 常夏 | 篝火 | 野分 | 御幸 | 藤袴 | 真木柱 | 匂宮 |
| 梅枝 | 藤裏葉 | 若菜 | 柏木 | 横笛 | 鈴蟲 | 夕霧 | 御法 | 幻 | 雲隱 | 紅 |
| 梅 | 竹河 | 橋姬 | 椎本 | 總角 | 早蕨 | 宿木 | 東屋 | 浮舟 | 蜻蛉 | 手習 |
| 夢浮橋 | | | | | | | | | | |

これを大に別てば前篇四十四帖と後篇十帖となる。前篇はまづ開卷桐壺の卷に桐壺の御門と寵愛の更衣との間に生れたる源氏の君が生立ちを敘する

より始めて、中將、宰相、大將、内大臣を経て太政大臣に上り、實は御子なる冷泉院の御即位に及びて三十九歳の時太上天皇に准ぜられ、五十餘にして薨せらるゝに至るまで、此君を中心として其の身の浮沈盛衰悲喜の状態を寫し出せることの外、これに關したる貴賤さまざまの女性を點出して、その物語を續なし、殊に紫の上てふ才色無雙の淑女を以て光源氏に對せしめ、又男子として源氏の君に對すべき多くの人も出し、彼此の性格の各同じからざるを寫してよく人情の機微を描き得たり。但し第四十一帖雲隱の卷は、源氏の君が薨去のさまを出すべき所なるが、その名あるのみにして實なし。續篇十帖は光源氏の子薫大將を中心とし、之に對せしむるもの、男子には句兵部卿の宮あり、女子には宇治の宮の息女姉妹あり。篇中寫されたる舞臺は主に宇治河のほとり閑寂なる所にあるを以て、世にこれを宇治十帖と別稱す。今この兩篇を對照するに、前篇は篤實なる乍らに色めきてあだなる樂天性の源氏を中心とするからに、多少の盛衰を有しながら、大凡浮きやかなる總調を有するに反し、後篇は好き心はあり乍らも尙沈鬱なる厭世性の薫大將を主人公とし、所も宇治の

宇治十帖

さびれたるあたりを主とせるが故に、一二快闊の性格を點出せりと雖も、尙總調は閑寂悲哀の傾あるを免れず。故に或は之を以て前後別人の作と考ふるものもあれど、その文の圓熟と思想の傾向とは、むしろ紫式部が順序を追へる筆致と見るを當とすべし。

いづれのおほん時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやんごと無ききはにはあらぬが、優れて時めきたまふ有りけり。始より我はと思ひあがりたまへるおほん方々、めざましき者におとしめ猜み給ふ。同じ程其より下臈の更衣たちは、まして安からず朝夕の宮仕につけても、人の心を動し怨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、いよく飽かず哀なるものに覺して、人の謗をも得憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

とあるを發端の文とし、源氏はやがてこの更衣の子として生れしより物語は始る。

宵過ぐる程、すこし寝いり給へるに、御枕上に、いとをかしげなる女居て、おの

がいとめでたしと見奉るをば尋ねも思ほさで、かく殊なる事なき人をゐておはして、ときめかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ。とて、此御傍の人をかき起さんとすと見給ふ。物に驚はるゝ心地して、驚き給へれば、火も消えにけり。うたて覺さるれば、太刀を引抜きて打置き給ひて、右近をおこし給ふ。これも恐ろしと思ひたる様にて、参り寄れり。渡殿なるとのゐ人起して、紙燭さして参れ。と云へ。とのたまへば、いかでかまからん。聞うて、といへば、あな若々しと打笑ひ給ひて、手をたゝき給へば、山びこの答ふる聲いとうとまじ。人はえ聞きつけで参らぬに、此の女君いみじくわなゝきまどひて、いかさまにせんと思へり。汗もしとゝになりて、われかのけしきなり。物おぢをなんわりなくせさせ給ふ御本性にて、いかに覺さるゝにか。と右近も聞ゆ。いと加よわく、晝も空をのみ見つるものをいとほし。と覺して、我れ人を起さん。手をたゝけば、山びこの答ふるいとうるさし。爰にしはし近くとて、右近を引寄給ひて、西の妻戸に出で、戸押しあけ給へれば、渡殿の火も消えにけり。風すこし打吹きたるに、人は少くて、候ふ限り皆寐

たり。此の院の預りの子の、睦まじく使ひ給ふ若き男、又うへ童一人、例の隨身ばかりを有りける。召せば答へして起きたれば、紙燭さして参れ。隨身も弦打して、絶えず聲つくれ。と仰せよ。人離れたる所に、心とけてもいぬる物か。惟光の朝臣の來りつらんは、と問はせ給へば、候ひつれど、仰せどもなし。曉に御迎へに参るべき由申してなん、まかで侍りぬる。と聞ゆ。……還り入りて探り給へば、女君はさながら臥して、右近はかたはらは、うつぶし臥たり。こはなぞ。あな物狂ほしものおぢや。荒れたる所は、狐などやうの物の、人おびやかさんとて、氣怖ろしう思はするならん。まろあれば、さやうの物にはおどされじ。とてひき起し給ふ。いとうたて亂り心地のあしう侍れば、うつ伏ふして侍るなり。御前にこそ、わりなく覺さるらめ。といへば、そよ。などかうは、とてかい探り給ふに、息もせず。引動かし給へど、なよ〜として、我れにもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、ものに、けどられぬるなめり。とせん方なき心地し給ふ。紙燭もて参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引寄せて、なほもて参れ。

とのたまふ。……めし寄せて見給へば、唯この枕がみに、夢に見えつる形し
 たる女、おもかげに見えて、ふと消失せぬ。昔物語などにこそ、かゝる事は聞
 け。といと奇らかに、むくつけけれど、まづ此の人いかになりぬるぞ。とお
 もほす心さわぎに、身の上も知られ給はず。添伏して、やゝと驚かし給へど、
 たゞひえにひえいりて、息は疾く絶えはてにけり。(夕顔)
 須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關
 ふきこゆるといひけん浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なる
 ものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人ずくなにてうち休みわ
 たるに、一人目をさまして、枕を敬て、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞこゝ
 もとにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりけり。
 琴を少しかきならしたまへるが、われながらいと凄しうきこゆれば、彈
 きさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦浪は思ふ方より風やふくらん
 とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるにしのばれて、あいな

う起きあつ、涙をしのびやかにみわたす。げにいかに思ふらん。わが
 身一ツにより、親はらから片時はなれがたく、程につけつゝ、思ふらん家を別
 れて、かく感ひあへると、おほすにしみじみて、いとかく思ひ沈むさまを、心細
 しと思ふらんとおぼせば、晝は何くれとたはふれ言うちのためひ紛らし、徒
 然なるまゝに、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をしたまひ、珍らしき様なる唐
 の綾などに、様々の繪どもをかきすさびたまへる、屏風のおもてどもなど、い
 とめでたく見どころあり。

人々の語り聞えし海山の有様を、遙におぼしやりしを、御目に近くては、げに
 及ばぬ磯のたゞずまひになくかきあつめ給へり。此の頃の上手にすめる、
 千枝、常則などめして、作り繪をつかうまつらせばや。と心もとながりあへ
 り。なつかしうめでたき御有様に、世のもの思ひ忘れて、近うなれ仕う奉る
 を嬉しきとにて、四五人ばかりぞつと候ひける。前栽の花色々咲きみだれ、
 おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出給ひて、たゞみ給ふ御さまのゆゑ、
 しうきよらかなる事、ところがらはまして、この世のものともみえ給はず。

白き綾のなよ、かなるしをん色など奉りて、こまやかなる御なほし帯しどけなくうちみだれたまへる御さまにて、しやかむにふつでしと名のりて、ゆゑる、かによみ給へる、また世にしらすきこゆ、沖より舟どものうたひの、しりて、こぎ行くなどもきこゆ。ほのかに、唯ちひさき鳥のうかべると見やらる、も、心ほそげなるに、かりのつらねてなく聲、かぢの音にまがへるを、うちながめ給ひて、御涙のこぼる、を、かきはらひ給へる御手つき、くろぎの御ずいにはえ給へるは、故郷の女戀しき人々のこゝろ、皆なぐさみにけり。

初雁はこひしき人のつらなれやたびの空とぶこえのかなしきとのたまへば、良清

かきつらね昔のことぞおもほゆるかりはそのよの友ならねども
民部太輔

心からとこ世をすて、なく雁を雲のよそにもおもひけるかな
さきの右近のせう
とこよ出で、たびの空なる雁がねもつらにおくれぬ程ぞなぐさむ

友まどはしては、いかに侍らまし。といふ。おやのひたち成りてくだるにもさそはれで、参れる也けり。したには思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。月のいとほなやかにさし出でたるに、こよひは十五夜なりけり。と覺し出で、殿上の御遊びこひしく、所々ながめ給ふらんかし。とおもひやり給ふにつけても、月のかほのみまもられ給ふ。二千里外、古人、心とずしたまへる例の涙もといめられす。入道の宮のきりへだつるとの給はせし程、いはんかたなく戀ひしく、をりくゝの事思ひ出給ふによ、となかれ給ふ。(須磨)

有明の月のまだ夜深くさし出づる程に立出で、いと恐びて、御供に人などもなく、やつれておはしけり。河のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに、霧ふたがりて、路も見えぬしげ木の中を分け給ふに、いとあらしき風のきはひに、ぼろくゝと落ち亂るゝ木の葉の露の、散りかゝるも、いとひや、かに、人やりならず、いたく濡れ給ひぬ。かゝるありきなども、をさくゝ習ひ給はぬ心地に、心細くをかしう覺されけり。

山おろしにたへぬ木葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな

山がつの驚くもうるさしとて、隨身の音もさせ給はず。柴の籬を分けつゝ、そこはかとなき水の流れどもを、踏みしだく駒の足おとも、猶忍びてと用意し給へるに、かくれなき御匂ひぞ風に從ひて、ぬししらぬ香と驚くねざめの家々ぞ有ける。近くなる程に、其の事とも聞き分かれぬ物のねども、いとすぢげに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くを、ついでなく御子の御きんのねの名高きも、えきかぬぞかし。よき折なるべしと思ひつゝ、入り給へば、琵琶の聲の響なりけり。黄鐘調にしらべて、世の常の掻合せなれど、所がらにや。耳なれぬ心地して、かき返す撥の音も、物清げに面白し。箏のこと、あはれになまめいたる聲して、たえく聞ゆ。しばし聞かまほしきに、恐ひ給へど御けはひしるく聞付けて、殿居人めくをのこなまかたくなしき出来たり。しかくなん籠りおはします。御せうそこをこそ聞えさせめと申す。なにかは。しか限りある御行ひの程を、まぎらはし聞えさせんに、あいなし。かく濡れぬれまゐりて、ゐたづらに歸らんうれへを、姫君の御方に聞えて、あ

はれとの給はせばなん、慰むべき。との給へば、見にくき顔うちゑみて、申させ侍らんとて立つを、しばしやと召しよせて、年をろ人傳ひとづたにのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、嬉しき折かな。しばし少し立隠れて聞くべき物の隈ありや。つきなくさし過ぎて参りよらん程、皆ことやめ給ひては、いとほいなからんと給ふ。御けはひ顔かたちの、さる直々しき心地にも、いとめでたく忝く覺ゆれば、人聞かぬ時は、わけ暮かくなん遊ばせど、下人にて、も都の方より参り立まじる人侍る時は、音もさせ給はず。大かたかくて、女君たちおはします事を、かくさせ給ひ、なべての人に知らせ奉らじと覺し、のたまはする、と申せば、打笑ひて、あぢきなき御物隠しなり。しか忍び給ふなれど、皆人有り難き世のためしに、聞出づべかめるを、との給ひて、なほするべせよ。我はすきくしき心などなき人ぞ。かくておはしますすらん御有様の、あやしく、げになべてに覺え給はぬ也。とこまやかにの給へば、あなかしこ、心なきやうに、後の聞えや侍らんとて、あなたの御前は、竹のすいがいしこめて、皆へだてことなるを、教へよせ奉れり。御供の人は、西の廊によび居系

て此の殿居人あへしらふ。あなたに通ふべかめる、すいがいの戸を少し押開けて見給へば、月をかしきほどに、霧わたれるを眺めて、すだれを少し短く巻上げて、人々居たり。簀子すこにいと寒げに、身ほそくなえはめるわらはひとり、同じ様なるおとな杯居たり。内なる人、ひとり柱にすこし居隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隠れたりつる月の、俄にいとあかくさし出でたれば、扇ならで是れしても、月は招きつべかりけりとてさし覗きたる顔、いみじくうたげに、匂ひやかなるべし。添伏したる人は、この上に傾きかゝりて入る日をかへす撥こそ有りけれ。さまことにも思及び給ふ御心かなとて、打笑ひたるけはひ、今すこし重りかに、よしづきたり。及ばずとも、これも月に離るゝ物かはなどはかなきことを、打ちつけのたまひかはしたる御けはひども、更に餘所よそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。昔物語などにかたり傳へて、若き女房杯の讀むを聞くに、必かやうのことを云ひたる、さしもあらざりけん、にくゝ推しはからるゝを、げにあはれなる物の隈あるべき世なりけり。と心うつりぬ

べし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また月さし出でなんとおぼす程に、奥の方より、人おはすと告げ聞ゆる人やあらん。すだれおろして皆入りぬ。(雑本)

源氏作意

さてこの源氏物語の作意につきては、古來種々の説をなし、佛者はこれを以て天台六十帖註釋十卷、法華玄義十卷、法華文句十卷、これに各部の重要書となす。に擬して卷數を立て、因果の教理を覺らしめんとせるものと云ひ、儒者は春秋になづらへて勸善懲惡の教をなすものとなし、或は莊子の寓言に基づきて假托の詞を用ゐしと説き、又は司馬遷の史記に則りて世家列傳を配置せるものと論ず。而して他の之を貶するものは背德誨姦の書讀むべからざるものと罵れり。されど此の如きは畢竟史眼を具へざるものゝ臆測に止り、紫式部の本意を得たる者にもあらねば、又當代物語の真相を解したる者とも云ふべからず。此等の諸説に群を抜きたるものは本居宣長の玉の小櫛の説にして、從來の臆説を斥け、源語は一篇の人情小説物の哀れを寫し出したるものなりと道破せり。蓋し、こは諸説中最も穩當なる見解なるべし。前述の如く物語小説の發達はま

づ安信傳説に起原して怪談ものとなり、説話のものとなり、次に人情もの寫實物となるものにして、其の進歩は皆趣味の開發に基づくものなれば、源語が竹取を離れて宇津保落窪及び其他の物語を過ぎ、尙伊勢、大和等の歌物語、土佐、蜻蛉等の日記文の粹をも蒐めて、茲に豊富圓熟なる小説を完成したるは、全く當代の趣味が既にこの點まで發達し來りしに依るものなるが、されど此の文藝を利用して、教理、寓意、勸懲等、主義の具體的説明を爲す如きは一般學術に對する意識の大に發達したる遙に後代の事に屬し、源語の當時に於ては未だ考へられざりし所なり。又室町以後の如き想像の缺乏せる時代ならば、抽象的理想によりて興味を助くるの要もありしなるべく、或は江戸時代の如き儒教の盛なる問なりせば、趣味を損じてまでもその主義を迎ふるの業も行はれしなるべけれど、藤原の第二期源語創作の時代にありては、抽象的理想を押し立て、若しくは嚴格なる主義を奉ぜしむべき程、窮屈なる社會にては無かりしを知らざるべからず。この點より見るも作者式部に他意ありしにあらざり、源語は趣味の産物にして唯優に説話的より人生的に進めるものとのみ見るを當と

すべし。尤も作風は尙多く作者の主觀を寫し、又教理、妄信、怪談、靈異に關する描寫も至る所に存すと雖も、こは一は彼女の作風が純客觀的性質のものにあらずしと、他は當代社會が實に此の如き信仰、妄信に傾せられ居たりしとに因るのみ。即ち此の時代の種々の宗教的信仰行はれ、陰陽五行の妄信さへこれに加はりて、雑多の民間信仰、風俗習慣を形作り居たりしこと前節に於て述べたりし所の如し。されば此等の社會を描寫せんとするには、たとへ其の筋が幾分事實により幾分架空に成れりとするも、自然に此等社會の信仰を寫出するに至るべきは理の見易き處なり。特に當代の人生觀たる因果應報の説は、最も深く作者の腦裡を支配し居たりしものと見え、前後事件の照應起伏の如きは主にこの主義によりて用意せらるゝ傾向あり。例へばこれを大にして源氏が壯年中、心のまゝなりし種々の振舞が、將來に報を惹起すべき因縁となり、中頃は榮華を極めしと雖も、後年にはその應報やうやく熟じて衰運に向ふことなる如き。又これを小にしては、源氏が繼母藤壺に對する過は、やがて報いて正妻女三宮を柏木右衛門督に汚さるとせるが如き、不義の出たる冷泉

院に子孫出でまざる源氏を貶謫せる朱雀院に幸なかりしとなす等、又は貧富苦樂も宿世の因縁を以て説明し、堪ふべからざる不幸も、いふがひなき宿世と諦めて運命に甘んずる如き、この物語の思想の主なる部分をなす。以て作者紫式部が信念の如何を覗ふに足るべし。或論者がこの物語を以て、宗教々理を布衍したるものとなすも、此の如きを見ての説なるべし。されどは實際に當代信仰の寫實作者自身の情趣にして、殊更に教理を述べんとせるものはあらず。換言すれば此の如きは時代の反映にして作者の意識的行爲にはあらず。

次に此の物語を罵りて誨姪の書となし、女の讀むべからざるものは伊勢源氏とさへ言へるは、今にして之を見れば大に其の言に理あるを覺ゆと雖も、これによつて直に罪を紫式部に負はしめ、其の品性上にも及ぼさんとするは、少しく酷に過ぐ。明に云へば、當時の社會には、吾人を支配するが如き道德なるものなかりき。換言すれば、彼の社會の道德と吾人今日の道德とは全く標準を異にし、吾人のつとめて排せんと欲する事項も、當時に於ては何等罪惡と認め

道德觀念

られざるもの多かりしなり。されば現代思想の標準を以て直に平安朝の當時を律し、吾人に非なる者をとつて直に古人を付度するは、少しく當を得ざるものと云ふべし。もし源語に罪ありとすれば、其の責は必ず社會に歸すべく、紫式部は只其の社會を忠實に描寫せるものと云ふに止めざるべからざるなり。

紫女の理想

以上論じ來れば源語は全く一篇の寫實小説に外ならざるが如くなれども、此等の間に唯一つ作者の理想として覗ふべきものは紫の上によりて具體的にせられたる婦徳にあり。箒木に於ける雨夜の品定に種々の婦人をさまざまに評し、所々の談話中に評論を試みしめたる所は、皆これ婦徳の理想を標準として、これかれ相及ばざる點、缺けたる様々を表さんとしたるものに外ならず。或は清きに失し、或はなまめかしきに過ぎ、或は嫉みの心恐ろしく、或は醜き深なさけ、又はめやすく、心軽きなど、千紫萬紅具に個々の性格を寫し、然もその背後に作者が理想の那邊に存するかをうかゞはしむ。此の點を以てすれば、源語は溫和なる美しき理想小説なりと云ふも、不可なかるべし。

かくの如く作者紫式部の天才によりて従来文學のあらゆる技術を吸収し、平安朝の世の優雅なる趣味を遺憾なく發揮したる源氏物語は、當代及び爾後の小説界を獨占して大に翫賞せられ、ついで摸擬者を生じ、註釋者を出し、鎌倉室町の無學なる時代に於てすら多數の註釋書を出し、河海抄、花鳥餘情等を始め、最も便なると最も有力なるとを擧ぐれば、北村季吟の湖月抄、安藤爲章の紫家七論、本居宣長の玉の小櫛、萩原廣道の評釋等なるべし。源氏小鏡、忍州の如きは此の物語の梗概を記せるもの、柳亭種彦の種々の文學に影響を與へしこと殆ど他に比儔を見ず。田舎源氏は同翻案なり。

第三節 源語同時の散文

小説の源氏物語と相並びて、平安朝散文の雄と見るべきは同じき頃の清少納言が枕草紙なり。彼女は後撰集撰者の一人清原元輔の女にして、一條天皇の皇后定子に仕へ、博識達才の譽あり。長徳二年皇后崩御の後は宮を出で、いづこにかさすらひけん、いたく落魄せる由古事談に見ゆれど、詳なる事を知らず。

此の書の名は卷の末に、宮の御前に内の大臣の奉りたまへりけるを、これに何をかまじし、上の御前には史記といふ文を書かせたまへるなど宣はせしと、枕

にこそはし侍らめと申しかば、さば得よとて賜はせたりしを、あやしきをこよや何やと盡きせず多かる紙の數を書きつくさんとせしに、いと物覚えぬ事ぞ多かるやとあるより出でたるものなるべけれど、そは何時よりの事なるか明ならず、古き書には多く清少納言が記とのみ見えたり。さてその内容は、彼女の女が奇警なる觀察眼を以て、自ら宮廷生活をなせる間に見聞せる事件感想を、何彼となく書き列ねたる一箇の隨筆にして、あぢきなきもの、いとほしげなるもの、心地よげなるもの、めでたきもの、なまめかしきもの、にくきものなどの項を設け、或は森は湯は井は、受領は歌は等の題をかゝげて奇警なる敘述をなし、又は何とはなく目撃の事實を敘して之を評論せるなど、その體一にわらず、而してその文章は簡潔趣味に富み、流石に女流の細心と思はるゝ點も多けれど、又篇中至る所に自讚の記事見え、儕輩は元よりおしなべての男さへ物の數とも思ひ足らざる驕慢の性表れ居る所より見れば、彼の女が如何に男性的にして才發ある勝氣の女たりしかを知るべく、又當代の社會が如何に女性にその位置を與へたりしかの状をも覗ふに足る。紫式部はその日記にこれを

評して、清少納言こそしたり顔にいみじう侍りし人と云へり。

春は曙、やう／＼白くなりゆく、山際すこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる、夏は夜、日の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして山際いと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びいくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風の音、蟲のねなどいとあはれなり。冬は雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白く、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして炭もてわたるも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭のつ火をけの火も、白き灰がちになりぬるはわろし。……大進なりまさか家に、みやの出でさせ給ふに、東のかどはまつあしになして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋のあねばいりなんやとおもひて、かしらつきわろき人も、いたくもつくろはず、よせておるべきものと思ひあなづりたるに、びらうげの車などは、門あひさければさは

りてえいらねば、例の筵道しきておる、に、いとにく、はらだ、しけれどいかいはせん。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るもねたし。御前に参りてありつるやう啓すれば、こゝにも人は見るまじくやは。などかはさしもうちとけつる。と笑はせ給ふ。されどそれは皆目なれて侍れば能くしたて、侍らんにしこそ、驚く人も侍らぬ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えば笑はんなどいふほどにしも、これ参らせんとて御座などさしいる。いでいとわろくこそおはしけれ。などてか。其の門せばく作りて、住み給ひけるぞといへば、笑ひて、家のほど身のほどにあはせて侍るなりといらふ。されど門のかぎりを高くつくりける人も、さこゆるはといへば、あなおそろしとおどろきて、それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、うけ給はりしるべくも侍らざりけり。たまたま此の道にまかりいりければ、かうだに辨へられ侍りといふ。その御道もかしてからざめり。筵道敷きたれば、皆おちいりてさわぎつるはといへば、雨のふり侍れば、げにさも侍らん。よし／＼又仰せかくべき事も侍る。

まかりたち侍りなんとていぬ。何事ぞ生昌がいみじうおぢつるはと問はせ給ふ。あらず。車のいらざりつること、いひ侍ると申しておりぬ。……同じつぼねにすむ若き人々などして、よろづの事も知らず、ねふたければ皆ねぬ。東の對の西にひさしかけてある北のさうじには、かけがねもなかりけるを、それもたづねず、家ぬしなれば、案内をよくしりてあけてけり。あやしうかればみたるもの、聲にて、さふらはんにはいかい、とあまた、び云ふ聲に、おどろきて見れば、几帳のうしろにたてたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきくしきわざ夢にせぬもの、家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめり。とおもふもいとをかし。我がかたはらなる人をおこして、かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるをといへば、かしらをもたげて見やりて、いみじう笑ふ。あれはたそけせうにといへば、あらず。家あると局あると、定め申すべきことの侍るなりといへば、門の事をこそ申しつれ。障子あけ給へとやはいふ。猶其の事申し侍らむ。そこにさふらはんはいか

にくといへばいと見苦しき事、更にえおはせじとて笑ふめれば、若き人々おはしけりとして、引きたて、いぬる後に笑ふ事いみじ。あけぬとならばたいまづ入りねかし。消息をするによかなりと、誰かはいはんとげにかしきに、つとめて御前に参りて啓すれば、さる事もきこえざりつるを、よべのことため、入りたりけるなめり。あはれあれをはしたなく、いひけんこそ、いとほしけれと笑はせたまふ。……うつくしきもの。爪に書きたるちこの顔、雀の子のねずなきするにおどりくる、又紅粉などつけて据ゑたれば、親雀の蟲など持て来てく、むるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎて這ひくる道にいと小さき塵などありけるを、目敏に見つけて、いとをかしげなる小指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。尼にそきたる兒の目に、髪のおほひたるを、掻きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。……遠くて近きもの。極樂船の道、男女の中。

其の觀察其の筆致奇警は奇警なりと雖も、尙温き情趣に於て少しく缺くる所

あるを遺憾とす。これ作者が勝氣の性を以て常に自己の主觀を固守せるが故に温情を以て其の客觀と同化すること能はざりしを以ての故なり。本書が文學的價值上、量に於てのみならず、質に於ても源氏物語に一步を譲るべき所以全く爰にあり。されどこの文は後世に源語と相并びて行はれ、その筆致も創作上影響を及ぼしたる所少からざりき。かの兼好法師の徒然草は正しくこの摸倣に出でたるものなるべし。

これが註釋には季吟の春曙抄最も行はる。又加藤盤齋に萬葉抄、岡西惟中の傍註、盛井義知の裝束抄等あり。

右の外此時代の散文に紫式部日記、和泉式部日記及び少しく後れて更科日記、狭衣物語、濱松中納言物語あり。紫式部日記は紫式部が中宮彰子に仕へたる間の、後宮の朝暮を寫したるものにて事實を記すを主とせるものなれば、内容の大に味ふべきものあるにあらざれども、流石に源氏物語の作者が圓熟せる筆はこの日記の上にも覗ふべし。

この註釋書には盛井義知の傍註、清水宣昭の釋及び現代に至りて一二の講義あり。

紫式部日記

秋元弘のけはひのたつま、に土御門^長のありさまいはん方なくをかし。池のわたりの梢ども遣水のほとりの草むらおのがじ、色づきわたつ、大かたの空もえんなるにもてはやされて、不斷の御どきやうの聲をあはれまさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えぬ水のおとなひ夜もすがら聞きまがはさる。御まへにも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞きめしつゝ、なやましうおけしすすべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御ありさまなどのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御まへをこそ尋ねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへたとしへなくよろづ忘るゝにも、かつはあやしき……源氏の物語おまへにあるを、殿^長の御覽じて、例のすゝるごとくも出できたるついでに、梅のえだにしかれたる紙にかゝせ給へる。すきものと名にしたてれば見る人のをらすぐるはあらじとぞおもふたまはせられたれば、人にまだをられぬものを誰かこのすきものをとはくちならしけむ

めざましうときこゆ。渡殿にねたる夜戸をたゞく人ありときけど、おそろしさに音もせであかしたるつとめて、

よもすがら水鶏よりけになくなくぞまきの戸口にたゞきわびつるかへし。

たいならじとばかりたゞく水鶏ゆゑあけてはいかに悔しからまし

和泉式部日記は長保五六年の間、彼の女が敦道親王に思はれし間の事を記せる短篇にして、和泉式部物語とも稱せらる。彼の女はむしろ歌才に於て當代に群を抜き出づと雖も、散文は更に見るに足らず。

夢よりもはかなき世の中を歎き侘びつゝあかしくらす程には、はかなくて四月十日あまりにもなりぬれば、この下暗がりもていく。はしのかたを眺むれば、ついひぢの上の草の青やかなるも人は殊に目といめぬを、あはれにながひる程に、近きすいがいのもとに、人のけはひのすれば誰にかと思ふほどに、さし出でたるを見れば、故宮^{みや}に侍ひしことねりわらはなりけり。哀れに物を思ふほどに來たれば、などかいと久しう見えざりつる。遠ざかる昔

のなごりにはと思ふを、などいはずれば、その事とさぶらはでは馴れ馴れしきやうにやとつゝ、ましうさぶらふうち、日ごろ山なまかりありき侍りてなむ。いとたよりなくつれづれに候ひしかば、御かはりに見参らせむとて、帥の宮^{みや}になむ参りて侍りしと語れば、いとよきことにこそあなれ。その宮はいとあてにけずかうおはしますなるは、昔のやうにはえしもあらじなどいへばしかおはしませど、いとけずかうおはしまして参るやと問はせ給ふ。「参り侍りと申し侍りつれば、これ持て参りていかゞ見給ふとて奉らせよとて、橘の花を取り出でたれば、むかしの人のといはれてまゐりなむ。いかゞ聞えさせむといへば、ことばに聞えさせむもかたはら痛うて、何かはあだわだしくも聞えさせ給はざるをはかなきことと思ひて、

かをる香によそふるよりは、郭公聞かばやおなじ聲やまさると
更科日記は菅原道真の裔^{ウヂ}孝標^{タカノリ}の女の橘俊通といふに嫁ぎたるが、康平元年五十歳にして夫に死別し、これより哀なる寡居をなせる間に、つくづくと過ぎし幼時を思ひ起して書き記せしもの。發端は彼の女が十三歳にして、父の任地

上總より京に歸りくる旅路に筆を起し、それより京畿の神佛への物語、後朱雀天皇の中宮源子及び祐子内親王への宮仕、結婚、生子、死別の哀傷にて日記は終る。この書の名目は夫俊通が信濃守たりし縁につき、更科の月を詠みし歌多きより出でしものなるべく、内容は著者が極めて信仰厚き、空想的の性情を流露し、切實はむしろ悲哀の調を有し、樂多き世を厭ひて頼を彼の世にかくるの傾あり。

あづまぎの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけるとにか、世の中に物語といふものゝ、あんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるひるまよひるなどに、姉、繼母などやうの入々の、その物語かの物語、光源氏のあるやうなどところどころ語るを聞くに、いとゆかしさまされど、我が思ふまゝにそらにかでか覺え語らむ。いみじく心もとなさまゝに、等身に薬師佛を作りて、手洗ひなどして、ひとまにひそかに入りつゝ、京に疾くのほせ給ひて、物語の多く候ふなるある限見せ給へ」と身を捨て、額をつさいのり申す程に、十三にな

る年のぼらむとて九月三日九月元門出でて今たちといふ所にうつる。……天喜三年十月十三日の世の夢に居たる所の屋のつまの庭に阿彌陀佛立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに透きて見えたまふをせめてたまに見奉れば、蓮華の座の土をおがりたる高さ三四尺佛の御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて御手片つ方をば擲げたるやうに今片つ方には印をつくりたまひたるを異人の目には見つけ奉らず、我ひとり見奉るに流石にいみじく氣恐ろしければ、籠のもと近くよりてもえ見奉らねば佛さばこの度は歸り後にむかへに來んと宣ふ聲、わが耳一つに聞き居て人はえ聞きつけずと見るにうち驚きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼としける。

第四節 狭衣と濱松中納言

後世の大作源氏物語は爾後に大なる影響を及ぼし、當代の末、永承天喜の頃に出でたる狭衣物語の如きは、全く範を彼に取りぬ。狭衣物語は容儀めでたき狭衣大將が、従妹源氏の宮といふに戀して思叶はず、その間に係る男女のなか

らひを以て一篇の骨子とし、かくて源氏宮は齋院となりて世の巷をはなれ、大將は思ひかけし宮ならでその面影ある姪を得て契り濃かに、やがて帝位の譲をうけて御門となりましめ、めでたく此世に榮え給ふといふにて終る。その筋は光源氏と藤壺紫の上、その他の女性との關係に似たりと雖も、亦源語の後篇、薫大將と宇治大姫君との關係に思ひ寄せたる節も多きを覺ゆ、卷數は唯四のみなれば、源語の如き複雑豊富なる趣味はこれなしと雖も、筋の變化に注意し前後首尾を整頓せる點は、形式上一段の進歩と見ざるべからず。唯その寫せる性格甚だ明ならず、人生の眞實を寫すよりも古に倣ひてみだりに形を表さんとし、描寫の筆も委曲に過ぎて清新の創作に乏しきは、この作の到底源語に及ばざる所なり。蓋しこれ作者の手腕下れるのみならず、時代の一般が既に文學的機運の衰頽に向ひ來りし結果なるべし。殊にこの小説の上に注意すべきは、宗教的妄信の文學上に現るゝに至りし事にあり。竹取宇津保に見えたる説話は、尙幼稚なる思想にして宗教的のものとは云ひ難かりき。源氏物語に於ける因果應報の信、宿世の念は、切實なる人生觀にして單に妄信との

み言ひ去るべきものにはあらずき。然るに狹衣に至りては、源氏物語に見えたる如き佛教に關する記事のますます増加し來りしは勿論、尙人生の描寫が露骨に過ぐるまでには理性的となりしにもかゝはず、當時漸く勢力を有し來りし神佛混淆の信が、宗教の教ふるがまに、不調和に信奉せられ、或は天人の交通となり、或は加茂明神の顯形、天照大神の詔宣となりて自然の行動と混寫せられぬ。これ平安朝の初より醸成せられし神佛の妄信が、歴史風俗の上には早くより行はれしことを示すと雖も、大鏡の文等に文學上にはこの頃に及びて始めて現はるゝに至りしもの、鎌倉を經、室町時代に至りて宗教的妄信が文學衰頽の原因となりし濫觴は、既にこの時にありきと云ふを得べし。この物語の文は

少年の春は惜めどもとまらぬものなりければ、やよひ二十日あまりにもなりぬ。御前の木だちなになく青み渡りて木暗きに中島の藤は松にとのみ思はず咲きかゝりて山郭公まちがほなるに、池の汀の八重山吹は井手のわたりに異らず見渡さるゝ、夕ばえのをかしさを獨見給ふに飽かねばさ

ふらひわらはのおかしげなるして一枝折らせ給ひて源氏の宮の御方にも
参りたまへれば

といふより始る。その文作の如何に整頓するに至りかを見るに足る。平家物語

大原御幸の中の名文、中島の山吹咲き亂れ八重たつ雲の絶え間より山郭公の一聲も君の運根初
花より珍らしく岸の山吹咲き亂れ八重たつ雲の絶え間より山郭公の一聲も君の運根初
ゆきを待ち顔なりは上引せる狭
衣の文より出てしものと覺し。

廿日なれば日さへ遅く出づる頃にて、こと訪ふべき垣根もおぼつかなければ、
此所かして佇みつゝ見めぐり給ふにいと大きな堂ども數多ありて三
昧勤め行ふ氣色尊げにて僧房ども夥多つゝきなどはせで、此所かして竹の
林ばかり小暗うしなつゝ、長き世の住處と思ひたるも目とまりて、哀に羨
しく思さる、山より僅に落ち來る水をほのゝ竹の樋どもを蜘蛛手にまか
せやりつゝ、待ち設けたる様も水のくさび固めたらんころほひはいかゞと
心細げなる様かぎりなし。居給へる所と見ゆるは寺よりは少しのさきでぞ
ありける。帯にせる細谷川の音さやかに流れて同じき岩のたゞずまひも、
心ある氣色しるく、時折節の花紅葉の木ども數を盡したると見えて、見處多

くぞしなされたりける。されど淺茅が原も殊に尋ぬる人も無かりけると
見えて、心のまゝに色を盡して亂れ合ひたる草、前裁どもに露の白玉と心え
て、虫の音も外よりは耳のいとまなかりけり。軒を争ふ八重葎も、げに人こ
を見えぬ。秋の景色はとく知られぬべかりけり、稻葉の風も耳近くは聞き
慣れ給はぬにいなおほせ鳥さへ音なふも、様々に様かはりたる心地して心
細げなり。

さてこの作者は明ならず。近古以來紫式部の女大貳三位の筆など傳ふるも
のあれど、信ずるに足るべき證據なし。

濱松中納言物語はまたの名、御津の濱松と云ふ。殆ど狹衣と同代の作にして
今四卷あり。もとはその前後に尙數卷ありしものなるべし。筋は中納言な
る人幼くして父に別れ、左大將なる養父に育てられて人となりしがいつしか
に己が生父の唐帝第三の皇子として生れ返れる由を聞きて戀しさのあまり、
朝に三年の暇を乞うて彼の土に渡ることより今の物語は始る。

孝養の志深く思ひたちし道なればにやおそろしう遙に思ひやりし浪の上

なれど荒き浪風にも遇はず思ふかたの風なむ殊に吹き送る心地して唐のうんれいといふ所に七月かみの十日におはしつきぬこれより皇子を尋ねて逢ふを得しが又その母後の艶なるに思ひ亂れて夢き契をこむることあり。かくて三年して歸朝の後も彼の縁この縁より多くの女に契るとふ當代にためしある佳人才子の艶話が骨子たり。品さまの女性の色を争ふ紳士さては尼聖の様など一度源氏物語に描かれたる趣向を再び茲に衣を換へてあらはせる感あるは狭衣と同く源語の影響を脱せざるが爲にして文學としては作者の爲に惜むべき所なり。たゞ作者がこの摸擬の跡を覆はんが爲に舞臺の一半を唐に取り或は事實の簡繁に心を用ゐて首尾の整頓を企てたる如きは多とせざるべからざる點ならん。

頃は三月の二十日のほどなれば雪こそ積らね谷の底などには猶うち消えとまりつゝ都には皆青葉になりにし花の梢今盛に開け散り残れるも風知らせむ惜しげに見え渡さるゝにもろこしの事のみおぼしやられて戀しさはおくれざりけり。三吉野の山よりふかく思ひ入れどもかくておはし

つきたれば山の方に堂いとをかしう立てゝ我が居所は廊だつものをいとかりそめに造りて住ひたる有様とりのねだによのつねなるは聞ゆべもあらぬ世界に吳竹を隔てゝぞ人の家は見ゆる。誰かはかゝる住ひする人のあらむと見つゝ入り給へばひじり思ひもよらずあさましげに思ひ驚きたるさま限なし。でしどもなど立ち騒ぎきよめしよきおましなど参りて入れ奉りけり。ひじりは年六十ばかりにてもと人がらは口をしききははあらざりければにやなげのおいびとも見え物きよげにさらばひて賤しからず住ひなどきたなげならずしなして堂どもあらまほしげなり。まづうち守り奉りて佛などの變じ顯れ給へるにやと見驚かれてうち泣きつゝ年比の御物語申し我ものたまはせてもろこしの三の宮の母后しかじかのひじりに御せうそこ聞えしをいかになりけむ。その人はまだ世にやおはするとそのひじりに逢ひ奉りて必ず尋ね聞えよとのたまひて御せうそて傳へ給へるを歸りまうで來しすなはちもえたづね出し奉らず。又いと物騒がしく紛はしき事どものみ侍りて今までになり侍りにけるをか

らうじてなむこの山におはすると聞きつけ奉るまゝに喜びながらなどのたまふ。

さてこの物語は、更科日記と同じく菅原孝標の女の筆に成れり。彼の女が空想的にして情詩趣に富み、深く源氏物語を耽讀せし由は前に云ひぬ。この作の源語の影響を印するその所以明なるべし。

同代の諸物語

源氏物語の後、狭衣濱松以前に於て、尙多くの小説は出でたるなるべし。その名のみありて書の中に残らざるものには、狭衣物語の文に見えたるに、あしびたくや物語、大津の王子物語、おほる物語、濱松中納言物語にも見ゆ、かくれみの物語、かはほり物語、からくに物語、濱松中納言物語にも見ゆ、袖ぬらす物語、たまのを物語、ふせご物語、みづからくゆる物語あり、更科日記に、あさうつ物語、かばね尋ねる宮物語、しらゝ物語、とをきみ物語等あり、作の巧拙は今より推知するに難けれども、源氏物語より狭衣、濱松中納言に互れる間は、多少の衰運には向ひしもの、尙平安朝文學の盛期と稱して可なるべし。但し茲に一考あり。物語とは面白きこととを解するが故の名なれば、必ずしも筆に上せて散文の小説となしたるもの、異名のみとは解すべからず。されば、必ずしも筆に上せて散文の小説となしたるもの、異名のみ

るいは、口の上のみ語られて人々の弄となりしものが多きに居るべく、その中の或物筆にのせられて後世にも傳へらるゝに至りしものなること、恰も地方の童話の或は記され或は口のみ語られて人々に傳へらるゝの少きが、一つの不審なり。尙題目を見ても、道心すに多き物語の今に傳へらるゝこと、少きが一つの不審なり。尙題目を見ても、道心すむる物語、かくれみの物語、みづからくゆる物語など、小説と云はんよりは、童話にやと思はるゝものも少なきからず。尙可考。

第五節 和歌

韻文と散文

凡そ文學の大勢を觀するに、韻文まづ榮えて散文之に次ぐ。藤原氏の前期に古今集あつて後期に源語、枕草子出でたるは即ちこの自然に合すと見るべし。されど兩者同時に隆盛を極むること、これまた自然の不能とする所なれば、や、後期の散文盛なる時に及びては、前期の韻文は漸く衰勢の運に向ひ、いつしか散文的勢力の影響を蒙るに至ることも争ふべからざる事實なり。古今に昌なりし和歌が、後選に漸く頹勢を現せしことは既に前章にのべたる所ありき。藤氏の榮華と共に文藝の道いよゝゝ繁く、歌人輩出し作歌の量甚だ多きを加ふるに至れりと雖も、質に於ける衰退の大勢は未だ容易に挽回するを得ず、作歌は古今を理想として舊格を守り、然も詩趣の情熱を失ひて、散文的委曲を求むるの風となり來りたり。此の時に至つて出でたる勅撰集を拾遺和歌

拾遺和歌集

集二十卷とす。收むる所は萬葉古今後撰と重複する所もあれど、尙ほ此等に遺れるを拾ふと云ふを以て主義とせるが如く、當代歌人の詠よりは、むしろ人麿貫之以下前代の人に重きを置きたるものなり。故にこの集を以て直ちに當代の歌運を論斷すること能はざるに似たれども、つらくその通篇を観察せば、當代の撰者が好んで集めたる所の歌によりて、一般の傾く所を知ること決して難事にはあらず。

み熊野の浦の濱木綿百へなる心は思へど唯に逢はぬかも
朝なぐけづれば積るおち髪の亂れて物を思ふころ哉
戀しきを何につけてか慰めむ夢だに見えずぬる夜なければ
尾上なる松の梢はうちなびき波の聲にぞ風も吹きける
藻かり舟今ぞ渚にきよすなる汀の田鶴も聲さわぐなり
仇なりな鳥の氷におり居るは下よりとくる事は知らぬか
み山いで、夜半にやきつる時鳥曉かけて聲のきこゆる
身にかへてあやなく花を惜む哉いければ後の春もこそあれ

人麿貫之
忠見
讀人不知
重之
兼盛
長能

拾遺抄

都にて珍しと見る初雪は吉野の山に降りやしぬらむ
餘韻よりも説る明瞭を思ひ、情感よりも却つて説明を好むに至れる風見るべきにあらずや。

さてこの撰者及び撰出年代につきては古來の諸説一定せるを見ず。又當代他に拾遺抄十卷と稱するものありて、藤原公任が集千三百餘首を撰びたるを花山院更にその中より五百八十餘を擇みて抄とせられたるものとも云ひ、或は集は花山院抄は公任とも説き、又は抄先に出で、集はそが増補なりとも唱ふるなど、學者各見を異にせり。予は集抄兩者の内容より考へて、抄がまづ長徳三年以後に成り、後年を経てこれを増補し、長保三年に集の選出を見たりとの説を穩當となさんと欲す。但しその選者が果して花山院と公任とのいづれがいづれなりやは、未だ詳にすること能はず。

多く前代の歌を集めたる拾遺集は既に如此なるが、次に當代の歌人として其後の傾向を代表する者はと云はゞ、まづ必ず一方に藤原公任、他方に曾根好忠を押さるべからず。而して女流には和泉式部、赤染衛門の二人群を抜けり。

夏はぎの麻のをがらとあだ人の心かるさといづれまされり
 虫の音もまたうちとけぬ草むらに秋をかねても結ぶ露かな
 みしま江に角ぐみわたる芦の根の一よの程に春めきにけり
 由良の門を渡る舟人楫をたえゆくへも知らぬ戀の道かな
 されど強ひて時流を脱し、大膽に新奇を求めんと欲せる結果、往々修辭の蕪雜、
 思想の卑俗を招きて、詩の域に入り得ざるものも少からず。
 年ふれば老いぬる人の白髪を夏も消えせぬ雪かとぞみる
 の如きむしろ滑稽に近からずや。但しこの新風は次期の歌人源經信その子
 俊賴を得て始めて一世を風靡しぬ。會丹以て地下に知己を得たるを悦びけ
 ん。

和泉式部

一條天皇の前後文學盛に起り、有髯男子の詩歌に名を得たる者多きことは前
 に述べる所の如くなるが、閨秀文學家としても、散文に紫式部と清少納言とあ
 るに對し、韻文には和泉式部と赤染衛門とあり。和泉式部は越前守大江雅致
 の女、始、和泉守橘道貞に嫁して小式部を生みぬ。のち道貞に別れて、冷泉第三

の皇子爲尊親王に愛せられしが、親王薨して給ひて後は御弟敦道親王の寵を
 蒙れり。又一時上東門院に仕へ、ついで丹後守藤原保昌に伴なはれて彼の國
 に下れることもあり。娘小式部が藤原定頼の戯問に答へて、大江山生野の道
 の遠げればまだふみも見ず天の橋立と詠みしは此折の事なり。其の他和泉
 式部は尙多くの人と契を交したるものゝ如く、其の性多情、従つて多感にして
 歌ふ所情火燃ゆるが如く、詩趣あるもの甚だ多し。歌集五巻、續集二巻、摸擬を
 事とし、平板を旨とせる當代の歌界に、麗しき一美花を飾りしものと見るをう
 べく、奇を衒はず情を偽らざる所に、おのづからなる情溢れ流れては清泉とな
 り、とゞまりては美玉となるの概あり。

人の身も戀にはかへつ夏虫のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ
 あらざらむ此の世の外の思ひでに今一度の逢ふこともがな
 うきことも戀しきことも秋の夜の月には見ゆる心地こそすれ
 夏の夜は横の戸たゞき門たゞき人だのめなる水雞なりけり
 白露も夢も此の世もまぼろしもたとへていはゞ久しかりけり

難波津のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ葦の八重ふき
流石に現世に狂ひ居たりし彼の女もいとし子に別れてはその悲をば感ぜざ
るを得ず。かれの愛女小式部失せての年院より其の名にあて、絹を賜ひし
ときのうた

もろともに昔の下には朽ちずして埋もれぬ名を見るが悲しき
また世のはかなきを歎きては

冥きより冥き路にぞ入りぬべき遙に照らせ山の端の月
露を見て草葉の上と思ひしは時待つほどの命なりけり

いかにせむいかにかすべき世の中は背けば悲し住めば住みうし

赤染衛門は赤染時用の女實は平兼盛の子なりと云ふ。長じて大江匡衡に嫁
し、舉周江侍従を生む。一時道長の妻倫子に仕へぬ。家集二卷あり。されど
彼の女の健腕達作は、たま〜時の人をしてその能才に驚かしめたりと雖も、
真に歌人として、作の高下巧拙に至りては、到底和泉式部の詩趣深さには如か
ず。

同氏の諸歌

かはらむと祈る命は惜しからで別ると思はむほどを悲しき

今夜こそ世にある人はゆかしけれいづくもかくや月を見るらむ

やすらはで寝なましものを小夜ふけて傾くまでの月を見しかな

尙當代の歌人として押すべきは、縉紳には藤原實方、源道濟、藤原長能、同道信、同
義方、同道雅、同定頼、同義忠、同元真、大中臣輔親等、縉流には能因、道命、良暹等、女子
には選子内親王、伊勢大輔、馬内侍等なり。實方は行成を辱めて陸奥の歌枕見
て参れとて追ひ下されし人、道濟は詩文に通じ、詠歌は暢達を以て勝る。長能
は和歌を以て人に教ふる始をなしし人、能因は橘永愷の遁世して歌道行脚を
なせる一奇人、白川の關の逸話を以て名あり。

櫻がり雨は降りさぬ同じくはぬるとも花の陰に宿らむ 實方

何せむに命をかけて誓ひけむいかばやと思ふ折もありけり 同道

古は身にしむ秋も無かりしを老いては物を悲しかりける 道濟

朝ぼらけ雪降る空を見わたせば山の端ごとに月ぞのこれる 同

一重だにあかぬ句のいとしくやへ重れる山吹の花 長能

萩風もや、吹きそむる聲すなり哀れ秋こそふかくなるらし 同
 都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の關 能 因
 心あらひ人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を 同
 嵐ふくみひろの山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり 同
 明けぬるれば暮るゝ者とは知り乍ら尙怨めしき朝ぼらけ哉 道 信
 今は只思ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな道 雅
 朝ぼらけ宇治の川霧たえくゝにあらはれ渡るせ々の網代木 定 頼
 敷妙の枕の塵やつもるらむ月のあかりはいこそねられね 頼 家
 深山木のこりやしぬらむと思ふまにいとゝ思の燃え増る哉 元 眞
 おほぢ父うまご輔親三代までに戴きまつるすべらおほむ神 輔 親
 名に高き錦の浦を來て見れば潜がぬあまは少かりけり 道 命
 さびしさに宿を立ちいで眺むればいつこも同じ秋の夕暮 良 退
 いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな 大 輔
 ゆかばこそ逢はずもあらめ等木のありと計は音づれよかし 馬 内侍

君すらもまことの道に入りぬなり一人や長き關に惑はむ 選子内親王

第四章 院政時代

第一節 政權の移動

藤氏の権力は御堂關白道長を最頂とす。道長の薨後長子頼通代つて關白と
 なり、朝に居ること五十餘年、榮華は前代にも勝れりと稱せらるれども、凡庸の
 才は子孫百年の謀をなすに適せず、後冷泉天皇崩御し、後三條天皇位に即き給
 ふに及んで、従來政權の後援たりし外戚の關係も絶え、弟教通、子師實相次いで
 關白の職に備はれりと雖も、遂に父祖の昔にかへし得べくもあらず。加ふる
 に後三條天皇は資性剛健、嚴明にまし、東宮におはせし時より深く藤氏專
 横の弊を更革せん御志ありければ、延久元年（一七二九）即位し給ふに及びて
 藤氏以下の莊園を整理し、上下の節儉を令し、自ら宣旨升を制して衡量の末ま
 でもおきて給へる如き、王政再び見るべきものあらんとせしに、惜いかな天皇
 在位僅に四年、延久四年十二月不豫によりて位を太子に譲り給ふ。或は曰は
 く由來藤氏の政權を專にするに至りしは、歴代の天子位を遜れば政に預らず

後三條天皇

院政の始

幼子を以て攝籙に託し、幼主成長の後と雖も政權藤氏を去らざるに起因す。累朝の習弊を改めんには讓位の後も尙ほ先帝の國政を聽くの先例を作らざるべからず。後三條天皇夙にこゝに志あり、即ちこれが先例を成さんと欲せられたるものなりと。されどこの志遂に全きを得ずして翌年崩御し給へり。ついで白河天皇即位し給ひ、在位十四年にして位を堀河天皇に譲り、この朝廿一年、鳥羽天皇の朝十六年、崇徳天皇の朝六年、凡て四十四年の間は、全く父帝の遺志を以て法皇の御身ながら院中に政を裁し、藤氏をしていよゝゝ實權より遠ざからしめ給ひぬ。此の間法皇は一方に佛法を篤信し、そが興隆の爲には費用を吝まず、造寺塔、造像具、供養、法會等を盛ならしめ給ひしこと前代未聞と云ひ、法親王を宣下し、僧門を尊崇し、従つて寺領の擅施もいよゝゝかさむに至りしかば、茲に前代よりその徴を示し居たりし南北の僧衆、いよゝゝ横暴の機會を得、忍辱の佛法は今や魔劍を振つて王法をも凌駕せんとする狀に及びたり。されば民間に於ける信仰の度もますますゝ甚しく、流弊として妄信の浸染も次第に抜くべからざる勢力を有し來り、傳説、文學の上にもその反映を示す

篤信佛法

平安王朝の
末路

に至りしは免るゝ事能はざる自然の勢なりき。白河法皇崩じ給ふや、鳥羽上皇代りて同じく院政を裁し給ひ、近衛天皇の在位十五年間政治は全くその方寸より出づる所なりき。ついで後白河天皇位につき給ひ、在位僅に三年、御子二條天皇、御孫六條天皇及び御子高倉天皇、御孫安徳天皇四朝の間院中にありて政を攬給ふ。以上鳥羽、後白河の兩法皇また篤く佛法を信じ、文藝を好み遊宴の風流尙昔と異なることなかりけれども、年を経るに従つて公卿遊惰に流れ、武士は遠近に勢力を扶殖し、僧徒の横暴は日に甚しきを加へ、都鄙に盜賊多く地方に謀叛の輩あり、且つ後白河天皇御在位の時衰へ來れる藤氏の間にも政權の争を生じて保元の亂を見、二條天皇の時は平治の亂となり、高倉天皇の時平清盛が顯達衆目を驚し、前後二十年の間甘き榮華の夢を食れりと雖も、やがて宗盛以下一門のはかなき最後は平安朝第四期に終を告げ、流石に靜けかりし四百年の京都朝廷もこれを掉尾の一大波瀾として、新しき武家鎌倉の世と移り行けるなり。然らばこの間に於ける文壇の狀態は果して如何なりしぞ。

第二節 散文

文學の衰頹

藤氏の勢力によりて直接間接に助長せられたりし第三期の散文學も、藤氏の榮華が創設的清新の氣を失ふに及んで、漸く衰頹の運に向ひたることは前に述べたる所の如し。然るに第四期院政の時代に入りては藤氏の實権いよいよ弱ると共に文學もまた益々衰へ、當代の創作として今に傳へらるゝものは「夜半の寢覺」とりかへばやと外一二の小さなものに過ぎず。但しこの兩者の今に傳はる者は多く後世の改竄もしくは補正に出でたる點多きに似たれば、直にこれを以て確たる論斷を下すこと難しと雖も、子を以てその親を考ふることを得とすれば、恐らくは内容と形式とに於て前期に出でる源語狹衣等の模倣を主とし、多少これに奇矯なる變化を與へんとしたるが如きものに過ぎざりしものと推量せらる。されば此等創作の缺乏に代りて文壇に現れたるものは、東西の説話を編纂せる宗教的雜話集と假名文にて書きたる雜史書とのみなりき。宗教的雜話集として此期に出でたるものは即ち今昔物語三十餘卷なり、每章今は昔の句を以て始るによりてこの名あり。又宇治大納言源隆國の作と稱せらるゝもの、宇治大納言物語とも呼ばる。天竺震且本朝に亘

今昔物語

れる珍事異聞を、順を追うて輯録せるものなるが、まづ卷の一より三までは釋迦の傳記、四は佛滅後遺弟等の逸事、五は佛の本生談、六と七とは佛教が支那に傳播せる當初の事蹟及びかの後のことども、八は散佚して傳らず。九、十は支那に於ける雜話、十一より二十までは本朝佛教の渡來寺塔の建立、諸法會の起原、高僧傳、經陀羅尼の功德、往生談、諸佛菩薩の利益、因果應報のことより怪談にも及び、以下は史談、武勇譚、もろくの逸話、傳説等その種類二三にあらず、その依れる所は印度支那の傳説怪談の典籍より又我國の古典、諸緣起及び一般の口碑に出でたるものも多きが如し。蓋し編者を源隆國とする説當を得たるに近く、彼が晩年後冷泉天皇の康平前後、數年間の苦心によりて成れる者なるべきか。されど吾人は是に多くの文學的價值を附する能はず、記事もとより詩趣あるを採れるにあらず、文もとより洗練の麗しさをあらはさんとしたるものにあざればなり。唯その文構想なきうちにおのづから簡勁の長を有し、以上の小説文に比して多くの漢語を使用せる點は、後世和漢混交文の前驅となりしものなるを注意しおくべきのみ。吾人は又この書によりて印度及

び支那の説話が如何に多くわが下層の民間にも入りしかを知り、佛教信仰の性質が如何に現世と來世とに向けられ居たりしかの真相を解するの料を得べし。かくてこの書は自ら大なる文學的價值を有せざれども、後世の傳説に影響を與へ、ひいて近世傳説の勃興にも資料を供したる點多きは文學史上注意すべき要點なり。

舍衛國鼻缺猿供養帝釋語第二十三

今昔 天竺の舍衛國に一の山有り。其の山に一の大なる樹有り。其の樹に千の猿住みぬ。皆心を一つにして天帝釋を供養し奉りけり。其の猿九百九十九は鼻無し。今一つの猿は鼻有り。此諸の鼻無き猿集りて、一つの鼻有る猿を啖ひ蔑づる事無限り、汝はこれ片輪者也。我等が中に不可交と云ひて、同所にも不令居。然れば此の一つの猿、歎き佗ふる程に、九百九十九の猿は種々の珍菓を備へて、帝釋に供養し奉るに、帝釋此を不受給して、此の一の鼻有る猿の供養の物を受給ひつ。其の時に九百九十九の猿、帝釋に向ひて申さく、何の故有りてか我等が供養を不受給して、片輪者の供養を受給

ふぞや。帝釋答へて云はく、汝等九百九十九は、前世に法を謗りたる罪に依りて、六根を全く不具して鼻無き果報を得たり。一の猿は前世の功德に依りて六根を全く具せり。只愚癡にして師を疑ひしに依りて、暫く畜生の中に生れたる也。速に佛道に入れ。汝等九百九十九は、片輪者として麗しき者を啖ひ蔑る也。此に依りて汝等が供養の物は不受と。此事を聞いて後より、九百九十九の猿我が身の根の缺けたる事を觀じて、一の猿を啖ひ蔑る事絶えにけり。此の譬を以て懈怠放逸なる衆生の、精進持戒の人を誹謗するに准へて佛の説き給ふ也けり。亦余の人の鼻缺猿と云ふは此の事を云ふぞとなむ、語り傳へたるとや。

源頼光の郎等たち紫野にて物見る事

今はむかし、攝津の守源の頼光の朝臣の郎等にて有りける、平の貞道、平の季武、坂田の金時と云ふ、三人のつはものありけり。皆みるめもきらくしく、手さく魂ふとく、思量ありて、おろかなる事なかりけり。されば東にても、度々よき事どもして、人におそれられたる、つはものどもなりければ、攝津の守

も是れらをやむ事なき者にして、うしろまへに立て、ぞつかひける。しかるあひだ、賀茂の祭のかへさの日、此の三人の兵いひ合せて、いかでか今日物を見るべきとはかりけるに、馬に乗りつゝきて紫野へゆかむに、いみじく見ぐるしかるべし。歩より顔をふたぎて行くべきにはあらず、物はきはめて見まほし。いかゞすべきと歎きけるに、一人がいはい、いざ某大徳が車を借りて、それにのりて見むと、また一人がいはい。乗り知らぬ車にのりて、殿原にあひ奉りて、引きおとされて蹴られなんや。よしなき死にをやせむずらむと、今一人がいはい。下簾をたれて、女車の様にて見えんはいかにと、今二人の者、この義よかりなむといひて、かくいふ大徳の車、すでに借りもてきぬ。下簾をたれて、この三人のつはもの、しづの紺の水干、袴などを着ながら、乗りに履物どもは皆車に取り入れて、三人袖もいださずして乗りぬれば、心にくき女車に成りぬ。さて紫野の方へやらせて行くほどに、三人ながら、いまだ車にも乗らざりける者どもにて、物のふたに物を入れて振らむ様に、三人ふりあはされて、或は立板に額をうち、あるはおのれども、頭を打合せて、のけさ

また倒れ、うつぶし様にふし、くるめきてゆくに、すべて堪ふべきにあらず。かくして行くほどに、三人ながら酔ひぬれば、ふみ板にも吐きちらして、烏帽子をもおとしてけり。牛の逸物にて、はやく引きつゝ、行けば、横なまりたるこゑどもにて、いたくなはやめそ。はやめそ。といひ行けば、同じくやりつゝけてゆく車ども、うしろなるから雑色ども、これを聞きてあやしびて、この女房車は、いかなる人の乗りたるにかあらむ。東鳥の鳴きあひたる様に、舌だみたるは、心もえぬ事かな。東人の娘どもの物見るにやあらむと思へども、こゑはひ大きにて、男こゑなり。すべて心得ず覺えけり。かくて既に紫野に行きつきて、車かきおろして立てば、あまり疾く行きて立てつれば、事なるを待つほどに、この者ども、車に酔ひたる心ちどもなれば、きはめて心ちあしくなりて、目くるめきて、萬の物さかさまに見ゆ。いたく酔ひにければ、三人ながら、尻をさかさまにて寝入りけり。然る間に、事なりて物どもわたるを、死にたる様に、寐入りたる者どもなれば、つゆ知らで止みぬ。事はてゝ、車どもかけさわぐ時になむ、目さめて、驚きたりける。心ちはあし。

寐入りて物は見ず成りぬれば、腹だ、しくねたく、思ふ事限りなきに、またかへさの車、飛ばしどよめむに、我らの生きてはありなむや。千人の軍の中に、馬をはしらせて入らむ事は、常に習ひたる事なればおそれず。只貧窮氣なる、牛飼わらはの奴ひとり、身にまかせて、かくなやまされては、何の益の有るべきぞ。この車にてまた歸らば、我れらが命はありなむや。されば只しばしかくてあらむ。扱大路をすまして、歩より行くべきなりと定めて、人すみて後、三人ながら車よりおりぬれば、車はかへしやりつ。その後みな沓をはきて、烏帽子を鼻のもとまで引きいれて、扇をもて顔をふたぎてぞ、攝津の守の、一條の家にはかへりたりける。季武が後にかたりしなり。猛きつはものと申せども、車の戦は不用にさぶらふなり。其れよりのち、懲るともこりて、車のあたりにはまかりよらずと。されば心たけく、思量かしこき者どもなれども、いまだ車に一度も、乗らざりける者どもにて、かく悲しう、醉死たりける、をこの事なりとなむ、語り傳へたることや。

これについて宇治拾遺物語十五卷あり。宇治大納言物語に遺されたる雑話

を拾へる謂にして、材料は本邦の説話によく、經のこと、佛のこと、不思議のこと、怪靈のこと、歌遊の事、武勇の事など、後世の童話に入れるものも多くこの内に見ゆ、各項これも今はむかし又は、むかしを以て發語となす。今昔物語に比して文體新しげに整へるが如し。

袴垂合保昌事

むかし、はかまだれとていみじき盗人の大將軍ありけり。十月許にきぬの用ありければ、衣すこしまうけんとして、さるべき所々うかがひありけるに、夜中ばかりに人皆しづまりはて、のち、月のおほるなるにきぬあまた着たりけるぬしの、さしぬきのそばはさみてきぬの狩衣めきたるきて、ただひとり笛ふきてゆきもやらずねりゆけば、あはれ是こそ我にきぬえさせんとて出でたる人なめりと思ひて、走りかゝりてきぬをはがんとおもふに、あやしく物のおそろしくおぼえければ、そひて二三町ばかりいけども、我に人こそ付きたると思ひたるけしきもなし。いよく、笛をふきていけば、心みんと思ひて足をたかくして走りよりたるに、笛をふきながらみかへりたるけしき、

とりかゝるべくとおぼえざりければ走りのきぬ。かやうにあまたゝびと
 さまかうさまにするに、露ばかりもさはぎたるけしきなし。稀有の人かな
 と思ひて、十餘町ばかりぐして行く。さりとしてあらんやと思ひて、刀をぬ
 きて走りかゝりたる時に、そのたび笛をふきやみてたちかへりて、こはなに
 ものぞとゝふに、心もうせて我にもわらでつゐられぬ。又いかなるもの
 ぞとゝへば、今はにぐともよもにがさじと覺えければ、ひはぎにさぶらふと
 いへば、何者ぞとゝへば、あざな袴だれとなんいはれさぶらふとこたふれば、
 さいふものありとさくぞ、あやうげに稀有のやつかなといひて、ともにまう
 でことばかりいひかけて、又おなじやうに笛ふきてゆく。このひとのけし
 きいまはにぐともよもにがさじと覺えければ、鬼神にとられたるやうにて、
 ともに行くほどに家につきぬ、いづこぞとおもへば、攝津前司保昌といふ人
 なりけり。家のうちによび入れて、綿あつき衣一を賜はりて、きぬの用あら
 ん時はまゐりて申せ、心もしらざらん人にとりかゝりて、汝あやまちすなと
 ありしこそ、あさましくむくつけくおそろしかりしか。いみじかりし人の

ありさまなりと、捕へられて後かたりけり。

次に假名文の國史には榮華物語と大鏡とあり。御世々々の事を語る意にて
 いづれも世継と稱せられしものなるが、作者は或は赤染衛門と云ひ又は藤原
 爲業と稱すれども、實はいづれも詳にし難し。たゞその記事内容より推考す
 るに、榮華は堀河天皇の前後、大鏡は少しく後れて鳥羽天皇の頃に成りたるも
 のならんか。共に御堂關白道長が理想の榮華を極めたりし有様を敘述せん
 が爲に、前者は編年體ながら従來行はれ居たる物語小説の體を學び、特に源氏
 物語に擬して、作り物語の如くに裝ひしに反し、後者は佛典等に見ゆる寓話的
 の體裁を學んで、之に列傳の風體を用ゐ、道長の條に於て極力之を讚述したる
 の差あるのみ。

榮華物語總て四十卷。一々の卷の名は源氏物語のそれにならへるものと覺
 しく

月宴。花山尋ぬる中納言 様々のよろこび。見はてぬゆめ。浦々のわか
 れ。かゝやく藤壺。とりべ野。はつ花。岩蔭。日かげのかづら。つぼみ

花。玉の村菊。木綿四手。朝緑。疑。本のしづく。音がく。玉臺。御裳着。御賀。後悔大將。とりのまひ。こまくらへの行幸。わかばえ。みねの月。楚王の夢。衣の珠。わかみづ。玉のかざり。つるのはやし。殿上の花見。歌合。着るは侘しと歎く女房。晩待つ星。蛛のふるまひ。ねおはせ。煙の後。松のしづえ。布びきのたき。むらさき野。

などその名目趣あるが如くに似たれども、實は全編事實の上に成立せるものなれば、詩として味ふべき多くの妙所を有せず、文章も諸所措辭に注意し、漢語佛語を交へて、四六駢儷の句を連ねたる所も少からねど、尙通じてこれを讀めば、單調一味に失して、蕪雜冗漫なる所甚だ多きを覺るべし。吾人がこの書によりて注意すべき最も重要な事項は、この書が事實を傳ふるものとして、平安朝第三期の佛教的信仰が社會上及び箇人の上にいよいよ拔くべからざる者となり來れる由を告ぐる事なり。心をひそめて之をたどれば、源氏、狹衣、濱松より、今昔、榮華に至る思想信仰の變遷は、ほゞ覗ひ得べきが如し。

かゝる程に、中宮子威里におはしませば、内條一より、とくくいらせ給ふべきよ

し御せうそこたびくになりぬれど、としごろの多寶の御塔を四尺ばかりにつくりみがきたてさせ給て、やがて御持佛にもと覺しおきてさせ給へりける。いでき給へりければ、この供養せさせたまはんとて、その御いそぎなりけり。女房のなりどもれいの事共なれど、ちたくのゝしる。萬壽元年九月二十三日よりはじめさせ給て、五日のほど懺法御讀經なり。僧正は山の座主源さては講師十人をかたへは僧正かたへは凡僧なり。五日の程おぼしおきてさせ給へる御心の程いとめでたし。……その日に成りてこと始まりて、御塔のありさまをみれば、かの見寶塔品の涌出の塔も、かくこそはとめでたうかやきみえたり。たかさこそ四天王宮までいたらねど、かざりみがきすきとほりかやけるほど、そのときにあへるこゝちす。そのうちに釋迦多寶座をわけてならばせ給へる程など、ふたりの如來のひかりに、おまへよりはじめたてまつり、見佛聞法の人みな照され給へりと見ゆ。色紙の御經にしたゑかゝせたまへり。表紙の繪に、經のうちの心ばへをみなかゝせ給へり。中宮の進よりつねはいみじきさいくのこゝろにいれ、手を

つくしてつかまつらんほど、いみじうめでたし。殿の御まへ通是をかく。人しれずしたてさせ給へるほどを、かへすくめで奉らせたまふ。とのばらもいみじうかんじ申させ給ふ。上達部殿上人のこりなくまはり給へり。事どもはじまりて、山の座主この御ことをいみじうめで給ふ。いとめでたうたうとくて、塔のうちの二世尊のいだし給ふところの、おんぞうども思ひなされ給ふ事かぎりなし。

大鏡

後者大鏡八卷は雲林院の菩提講に來合せたる老人が講師まつ間の懷舊談によせて古事を語り出さしめ、之に一人の青侍を點出して變化を與へたる等の用意は、榮華の冗漫に比して大に賞すべし。且つ文體簡潔首尾のよく整頓せるは、編述その宜しきを得たるものと云はざるべからず。その發端の文に曰はく。

さいつころ雲林院の菩提講にまうで、侍りしかば、例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人、おんなどきあひて同じところなるぬめり。哀に同じやうなるもの、さまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ見かはして

いふやう年ころむかしの人に對面していかで世の中の見聞く事どもをまこえあはせむ、この唯今の入道殿下の御有様をも申しあはせばやとおもひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。おほしき事はぬはげに腹ふくる、心ちしける。かゝればこそ昔の人は、物いはまほしくなれば、穴を掘りていひいれ侍りけめとおぼえ侍る。返すく嬉しく對面したるかな。さてもいくつにかなり給ひぬるといへば、今一人の翁、いくつといふことも更に覺え侍らず。たゞしおのれは、故太政のおとゞ貞信公の、藏人の少將と申し、折の小舎人わらは大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母の、后の宮の御方のめしつかひ、かう名のおほやけのよつぎとぞいひ侍りしかな。さればぬしのみとしは、おのれにはこよなくまさり奉らむかし。みづからは、こわらはにてありし時、ぬしは廿五六ばかりのをのこにてこそはいませしかといふめれば、世繼しかく、さ侍りしことなり。さてもぬしのみ名はいかにぞやといふめれば、故太政大臣殿にて元服仕うまつりし時、きんぢが姓は何ぞと仰せられしかば、夏山となむ申す

と申し、を、やがてしげきとなむつけさせ給へりしなどいふに、いとあさましくなりぬ。誰も少しよろしきものどもは見おこせぬよりなどしけり。年二十ばかりなるなまさぶらひめきたるもの、せちに近く寄りていいと興ある事いふらうざたちよな。更にこそ信ぜられぬといへば翁二人見かはしてあざわらふ。

尙菅原道真左遷の條を例せば

右大臣才も世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても、ことの外にかしこくおはしまし、左大臣は、御年も若く、才もことの外に劣り給へるにより、右大臣御覺えことの外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけむ。右大臣の御爲によからぬ事出で来て、昌泰四年正月廿九日、太宰権師になし奉りて流され給ふ。………
かたぐいと悲しくおぼして御前の梅の花を御覽じて、
東風ふかばにはひおこせよ梅の花あるしなして春な忘れそ
又亭子御門に聞えさせ給ふ。

流れ行く我は水屑となり果てぬ君しがらみとなりて止めよ
なき事により、かく罪せられ給ふを、かしくおぼし嘆きて、やがて山崎にて
出家せしめ給ひてけり。その程、極めて悲しき事多かり。日頃へて遠くな
るまゝに、あはれに、心細くおぼされて、

君が住む宿の梢をゆくくとかくるゝまでにかへり見しはや
又播磨の國におはしつきて。明石のうまやと云ふ所に御宿りせしめ給ひ
て、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

此の後作者不詳の今鏡十卷あり。小鏡ともまた續世繼とも云ふ。大鏡の記
事につきて後一條天皇より高倉天皇までの記と大臣の傳とを記せるものと
す。但し文學として價值あるものにあらざるは勿論なり。

第三節 和歌

平安朝第四期の韻文は一時に衰退せる散文の大勢とは多少趣を異にせるも
のありき。即ち勅選集は拾遺集以後暫く中絶の姿にありしかども、和歌の流

行は遊戯と實用とを兼ねて聊も衰へず、白河天皇の應徳三年九月（一七四六）參議藤原通俊勅によりて後拾遺和歌集二十卷を奉選す。實に拾遺集の選に後るゝこと八十餘年なり。その選む所近代の作に多し。蓋し此の時代に及びては和歌はいよゝゝ作るべきものとなり、古を理想としながらも、尙如何にしてか清新の氣を加へんと試みし所あるが如く、内容に於ては古今の主觀的を離れて漸く敍景に傾き、修辭に於ては懸詞心鏡、有明のつきせす、たましくしげ、二對句、なはぬ身には叶はざりけれの如き類を好み、初句或は三句にて打切る事多く或は助辭を省きて語勢をつよむるなど、先集とて全くこれ無きにはあらざりしかども、これに至りて特に著しく増加し來りしを見る。集中の秀歌と覺しき二三をあぐれば

うたゝ寝に夜やふけぬらむ唐衣うつ聲高くなりまざるなり 藤原兼房
 うす墨にかく玉章と見ゆるかな霞める空にかへる雁がね 津守國基
 山高み都の春を見わたせばたゞ一むらの霞なりけり 大江正言
 あすよりはいとゞ時雨や降り添はん暮行く秋を惜む袂に 藤原範永

白妙の衣の袖を霜かとして拂へば月のひかりなりけり 藤原國行
 山櫻見にゆる道へたつれば人のこゝろぞ霞なりける 藤原隆經
 いかばかり神も哀と三笠山二葉の松の千代のけしきを 周防内侍
 高砂の尾上の櫻咲きにけり外山の霞たゞずもあらなん 大江匡房
 君が代は曇りもむらじ三笠山みねに朝日のさゝむかぎりは 同
 さく度にめづらしければ時鳥いつも初音の心地こそすれ 權僧正永縁
 諸共に出づとはなしに有明の月のみおくる山路をぞ行く 同
 選者通俊は天皇の寵臣、才和漢を兼ね深く政務に通ずと雖も、創作の才に至りては當代源經信或は大江匡房には及ぶべくもあらず。されば彼が、後拾遺集を選進するや世多くこの選の不當多きを難じぬ。一は以て和歌道のいたく近世的となり來りしことを見るべきなり。

つれづれとふる五月雨に日はくれぬ軒の雫の音ばかりして
 春風は吹くとも散るな櫻花花のこゝろをわれになしつゝ
 源經信は當代一流の歌人なりき。位は正二位官は大納言に上り、承徳元年八

十二にして莖ず。多藝にして漢詩管絃の道にも通ず。歌ふ所の歌必ずしも尙古になづまず、前代の曾根好忠等が試みて未だ圓熟せざりし、清新の作風を助長して特に敘景に重きを置きぬ。これやがて歌界を一新すべき有力なる前驅者たりしものとす。

煙たつ海人の苦屋も見えぬまで霞みにけりな鹽竈の浦

夕されば門田の稻葉音づれて芦のまるやに秋風ぞなく善

引板はへて守るしめ繩のたわひまで秋風ぞふく小山田の庵

三笠山峰より出づる月影は佐保の川瀬の氷なりけり

この風格を傳へて一世を風靡したる者は經信の子源俊賴なり。彼は堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕へ、從四位上右近衛少將に至り、木工權頭左京權太夫を兼ね、多藝父の如く殊に和歌をよくし、性溫厚寛仁にして衆望を得たり。其の家集を散木奇歌集と云ふ。

あさましやこは何事のさまぞとよ戀せよとても生れざりけり
世の中はうき身に添へる影なれや思ひすつれど離れざりけり

源俊賴

金葉和歌集

風吹けば蓮の浮葉に水越えて涼しくなりぬひぐらしの聲

鶉なくまのゝ入江のはまかせに尾花浪よる秋の夕暮

夕まぐれ戀しき風に驚けば萩の葉そよぐ秋にはあらずや

夕されば萩女郎花靡してやさしの野邊の風の景色や

彼の歌は彼の父の如く敘景に長じ、清新の風に於て更に一步を進めたるものあり。されどその極端に趣けるものは、その長所即ち短所にして、強ひて新しきを求めんと欲して往々難解の語を用ゐ、人の知らざる事を詠みて世を驚さんと試みたる弊は、往々詩趣を没して俗調に流れたるものも少からざりき。

これ聞かむこせのさ山の杉の梢たかに雨もしみゝにくきら鳴くなり
信濃なる木曾路の櫻咲きにけり風のはふりよすきまわらすな

彼が崇徳天皇の大治二年勅を奉じて、この主義の下に選進せしものを金葉集十巻とす。後拾遺集の選に後るゝこと四十二年、但し金葉集は前後三度まで選み改められしものなるが、如何せしやらん、現今流布の集は第二度目のものにて、初後の二集は續群書類從中に收められしのみ。集中の和歌は拾遺時代

以後特に現代に多くを採りその最多數なるを俊賴自身の三十六首と父經信の二十四首となす。蓋し選者が清新なる格調を尙べる精神よりせるに外ならず。

俊慧法師

俊賴の子俊慧法師また和歌に名あり。

夜もすがら物思ふころは明けやらで聞のひまさへつれなかりけり
岩間もる清水を宿にせきとめてほかより夏をすくしつるかな

藤原基俊

當代俊賴と并稱せられて、而もその人格及び歌風に於て相反するものは藤原基俊なり。彼は父兄が官位高く門地尊かりしにも拘らず、位從五位下、官右衛門佐に止りしは、其の性驕傲才學を恃みて漫に他を凌ぎしにより、上下の之を疎んじたるが爲なりき。彼の歌は古雅を主として俊賴の如く常規を逸せず、頗る幽遠の風あり。

もの毎に改されども戀しさはまたふる年にかはらざりけり
昔見し人は夢路に入りはて、月とわれとになりけるかな
契りおきしさせもがつけを命にておはれことしの秋もいぬめり

詞花和歌集

されど基俊は創作の才としてよりは歌論の學者として重んぜらるべし。若し俊賴を以てさきの會丹に似たりとせば、基俊は即ち四條大納言に近かゝるべきか。實に俊賴は清新の風に於て會丹を大成し、基俊は公任の三十六人選和漢朗詠集にならひて新三十六人歌仙、新選朗詠集を選しぬ。歌學書悅目抄また彼の作と稱して世に傳へらる。次いで近衛天皇の仁平元年(二八一)崇徳上皇の仰を被りて、左京大夫藤原顯輔詞花集十卷を選ぶ。金葉集選後廿五年に當る。其の歌調は殆ど金葉集と同じく、後拾遺集以前の古きを捨て、新しきものを得んと欲せるものなるが、されど求むる所の新とは思想根底の新にはあらで、たゞ舊想表出の方法如何を意味すること、後拾遺集等に異らず、且つ天才俊賴退きて世はいよいよ歌學批判の時代に入り來りしを以て、前代の作にして此の集に入れるものは暫くおき、まこと當代の歌人の作歌は概ね平易暢達を長とした、如何にかして同じ想を新しげに聞かせむかと心を用ゐつゝ、ありしもの、如し。選者の父顯季また歌に名あり、選者の子清輔父及び祖父にも優りて世に名聲を馳せぬ。

五月雨にとふ人もなし山里は軒のしづくの音ばかりして 顯季
 わが宿は庭もまがさも押しなべて今さかりなり撫子の花 同
 年毎にかはらぬものは春霞たつたの山の景色なりけり 顯輔
 月影にたづね來たれば時鳥なく山の端に横雲わたる 同
 秋風に棚引く雲のたえまより洩れいづる月の影のさやけさ 同
 散ればうし句へばうれし梅の花思ひわづらふ春の風かな 清輔
 長らへばまたこの頃や忍ばれんうしと見し世ぞ今は戀しき 同
 手枕にかきやる髪のみだれまでくもりも見えぬ秋の夜の月 同
 清輔また二條天皇の勅を奉じて續詞花集二十巻を選びしが奏覽を経るに先
 立つて天皇崩御し給ひ此の集は勅選に入れられず收めて群書類從にあり。
 されど彼は基俊と同じく歌人としてよりも歌學者として重んぜらるべし。
 その著書としては和歌に關する古事雜話の集に袋草紙あり歌論に與儀抄和
 歌初學抄あり選集に今選集あり。清輔の義弟法橋顯昭和歌をよくしまた歌
 學に通じしばしば論議する所あり其の著袖中抄尤もよく行はる。拾遺抄註

藤原清輔

法橋顯昭

崇徳上皇

散木集註も亦その選述にかゝると云ふ。
 此等以外に當代に於て注意すべき歌人は崇徳上皇なり。鳥羽院の御子保元
 の亂に敗を取りて御身は讃岐に流され給ひ遂に彼の地に崩し給ひぬ。され
 ば世事意に戻り鬱屈の情禁じ難きもの暫く和歌に送りしものか。
 月清み田中に立てるかりいはの影ばかりこそ曇なりけれ
 かくばかりうき身なれども捨て果てんと思ふになれば悲しかりけり
 うき事のまどろむ程はわすられて覺ひれば夢の心地こそすれ
 瀬をはやみ岩にせかる瀧川のわれても末に逢はむと思ふ
 此の如く近代尙二三の歌人ありと雖も概してこの世は歌論批判の時代に入
 り口には華實を備へたる古を理想とすとは稱し乍ら實は嶄新なる意匠洗練
 せる措辭が一般の嗜好する所なり詞花集續詞花集を経て今後數十年に及べ
 る間の歌人は多く此の風に傾きたり。
 政治上院と内との對立はやがて保元平治の世の亂を招き絶代の幸運兒と羨
 望せられたりし平相國の一門も放逸の因果立ちどろにめぐりて大頭頼朝の

千載和歌集

藤原俊成

新府を建設すべき礎石を築くに至つて平安朝の世は終を告ぐ。前述金葉詞花二集の後三十餘年、この平安朝最期の歌壇によりて産出せられたるものを千載和歌集廿卷となす。藤原俊成が源平對立の最中、壽永二年二月に院宣を蒙り文治四年四月に選進せるものとす。俊成は御堂關白道長の五男長家の曾孫にして、始の名を顯廣と云へり。正三位皇太后宮太夫として家は五條室町にありしより、世に五條三位と稱す。歌を基俊に學び又深く俊賴の作を喜びしが、尙自らは學者として歌論の著に和歌肝要、古來風體抄、桐火鉢等あり。歌風は溫雅平懷を長として、先人のしばし清新を求めて奇に走り變を衒へるを避け、細心精緻よくその情を盡さんと欲したりしもの、如し。心敬の私語に彼が作歌の狀を記して「深更にとのあぶら細くあるかなきかに向ひ直衣のすゝけたるうちかけ古き烏帽子耳まで引き入れたまひ脇息により桐火桶を抱き詠吟の聲忍びやかにして夜たけ人靜まるにつけてうち傾きよ」と泣きたまへるとなんと。和歌が感興の餘にあらはるゝ文藝ならざるに至りし時代の風見るに足る。その家集を長秋詠草と云ふ。

浦傳ふ磯の苦屋の檝まくら聞きもならはぬ浪の音かな
戀せずは人は心もなからましももの、哀はこれよりぞ知る
おもかげに花の姿をさきだて、幾重越え來ぬ峰の白雲
夕されば野邊の秋風身に染みて鶉鳴くなり深草の里
過ぎぬるか夜半の寢覺の時鳥聲は枕にあるこゝちして
一代の泰斗として名歌尙多し。されど高雅平懷は彼に於てこそ始めて名歌をば得たれ、凡庸の徒は必ずしも之に則るべからず、且つ時勢の然らしむる所、修辭の洗練いよゝゝ進み嶄新なる意匠を用ゐんとする風は一般の傾向なりければ、彼の手によりて選ばれたる千載集の和歌も多くはこの特色を有すとして可なり。此の傾向の極端にまで發達助長せしめられたるものは、次期に選せられたる新古今集なり。かくて俊成は建仁三年九十歳の壽を保ちて薨す。

西行法師

この間拾遺集の當時に會根好忠ありしと相似て、少しく時流と伴はざりし一人の歌人あり。西行法師とす。彼は俗名を佐藤義清といへり。もと鳥羽上

皇に仕へし北面の武士なりしが友の頓死に^①深く世の無常を觀じ、妻子を捨て、出家剃髮し、諸國を行脚して詠歌三昧に入りぬ。後鳥羽上皇の建久元年(一八五〇)年七十五にて寂す。されば彼の經歷と信念とは多少他と趣を異にし、加ふるに在俗の昔よりこの道の天才なりければ、その詠出せる歌は一種の風骨を有し、縦横自在にして規格に拘らざる點、後世師範家の悦ばざる所なりと雖も、風調清新の氣を有して内容の單調を脱却し、且つ眞個の人生に肉迫せるが如き概あるは、新しき形に舊想を盛るを事とせる平安末期歌人の企及し能はざる所なり。その集を山家集二卷とす。其の修辭或は他に及ばる所あるべしと雖も、其の歌想に至りては、當代に異彩あるものとして尊重せざるべからず。

覺束な秋はいかなる故のぬればすゝろに物の悲しかるらむ、
なげ、とて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな
こゝろなき身にもあはれは知られたり鳴たつ澤の秋の夕暮
道のべの清水ながる、柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ

吉野山やがていでじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらむ
津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり
ねがはくは花のもとにて春死なむその更衣の望月の頃
眞菅生ふる山田に水をまかすればうれしがほにも鳴く蛙かな
遙なる岩のはざまにひとり居りて人目つゝまで物思はゞや
この外武家の出たる源三位賴政薩摩守忠度また同代有數の歌人たりき。
庭の面はまだかはおぬに夕立の空さりげなくすめる月哉 賴政
木の葉散る志賀の都の庭の面はそのあと、見る礎もなし 同
都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關 同
ほのかにも梢は見えず故郷を思ひやらする春霞かな 同
さい波や志賀の都はわれにしを昔ながらの山櫻かな 忠度
行きくれてこの下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし 同
さよふけて鹿の音遠くなり行くは峯の嵐や吹きよわるらむ 同

第四節 歌謠

催馬樂歌

上古の歌はその名の如く聲に擧げて歌ふのみのものなりしが、奈良朝以後文字の使用ありてより、一部は記載せられて目にも見るべきものとなり、平安朝に入りてはいよいよ見るべき文字讀むべき歌として創作せらるゝ事となり、たゞ發聲の儀式に當りてのみ古の風を存することとなりしが如し。されば此の轉移の跡を充して耳に娛むべき歌の表は來らざるべからざるは自然の勢なり。茲に於て初期以來上流の間に謳はれ始めしものを催馬樂歌とす。こは古の端謠或は俗歌に拍子樂器を加へ、雅樂の一種として殿上にも謳はれしより起りて漸次廣行するに至りしもの。この起原は甚だ古きもの、如くなれつきても數説あり。(一)昔地方より民の貢を運ぶ時に歌ひ來りしものなればと云ふ説(二)神樂の前張と同じ拍子にて歌ふが故ならんとの説(三)最初の歌に「伊天安加己未早去欲云々」と馬を催す詞あるが故なりとの説(四)馬を催す詞の爲ならば音讀すまじ、こは唐樂の催馬樂に起りしものならんと。歌詞は風俗歌の一種にして、もとはこれを歌ふものなりけんを、平安朝唐樂の流行につれ、その音調に依りて譜を定め、雅樂の一種となり、後には笏拍子、和琴、琵琶、笙、篳篥、横笛等の樂器に合せて奏する事となりしものなり。但し、舞な其の歌曲の數律呂合せて六十餘曲なり。曲名を擧ぐれば、河東、東屋、走井、飛鳥、井、育、柳、伊

勢海、庭生、我門、爾我門乎、大路、大芹、淺水、挿柳、鷹子、逢路、道口、更衣、何爲、鶴鳴、老鼠、陰名、呂に安
 名、新、年、梅、枝、櫻、人、葦、垣、山、城、眞、金、吹、紀、伊、國、葛、城、竹、川、河、口、此、殿、者、此、殿、西、此、殿、東、鹿、山、美、作
 藤、生、野、妹、與、我、淺、綠、音、馬、妹、之、門、席、田、大、宮、總、角、本、道、淺、山、眉、止、之、女、酒、飲、田、中、井、戶、無、力、蝦、蟷、
 波、海、鈴、之、川、石、川、與、山、與、山、我、家、あり、こ、の、註、釋、書、に、は、賀、茂、眞、淵、の、催、馬、樂、考、橋、守、部、の、催、
 馬、樂、譜、入、續、
 等、見、る、べ、し。

いで我駒はやく行きこせまつち山 あはれ まつち山 はれ つち山
 まつらん人を 行きて あはれ 行きてはや見む(我駒)
 東屋のまやの あまりの雨そゝぎ 我立ちぬれぬ その戸ひらかせ か
 すがひもとさしもあらばこそ そのと 我さゝめ おしひらいて來させ
 我や人つま(東屋)
 あげまきやとうとうひろばかりやとうとう さかりてねたれども まるび
 あひけりとうとう かよりあひけりとうとう (總角)
 西寺のく 老鼠若鼠おん裳つんづ袈裟つんづ法師に申さん師に申せく
 (老鼠)
 力なきかへるく 骨なき蚯蚓く (無力)

神樂歌

而して此等はたゞ音楽として弄ばるゝに止り、和歌の外には文學として取扱はるゝこと無かりければ、これを弄ぶ人、その作の巧拙を論ずる事もなく、これを諷謔するの技能をのみ注意する事にてありき。

これと共に神前に奏せらるゝ神樂歌あり。古代の短歌に笏拍子及樂器を合せ又これに合して舞を舞ふものなるが、何時しか催馬樂歌も合せ奏でられしより、神樂歌と稱するものゝ中に多くの形式の異なる催馬樂も含まれ居るところを知るべし。今に傳ふる曲目を擧ぐれば庭燎、阿知女、鼓木、帶、杖、篳篥、弓、鉦、鉦、杵、蓋、千鈿、

註釋書には賀茂真淵の神樂歌考、橋守部の神樂歌入文本居大平の神樂歌考、橋守部の神樂歌入文本居大平の神樂歌考、橋守部の

み山にはあられふるらし外山なる正木のかつら色つきにけり(庭燎)

弓といへばしななきものを梓弓まゆみ槻弓品こそあるらし(弓)

陸奥のぬだちの文弓我ひかばやうくよりこしのびくに(弓立)

きり、せんざいいやらびやくしゆとうちやうせつしんてうしやうく

げやわかぼしはみやうじやうはくはやくこ、やなりにしかもこよひの月のたこ、にたこ、にますや(吉々利々)

この外に尙地方の鄙歌として今に傳はる古風の俗歌あり。萬葉集中にも少しく收められ、眞淵翁の風俗歌考、栗田寛翁の古語集等に見るを得れども、文學上さまで重きをなすものにあらずれば、さのみはとて省きぬ。

今様歌

たゞ音楽としてのみ用ゐられたる此等催馬樂風俗等も、世の推し移ると共に漸く舊き趣味となり、清新を求むる人情は茲に節をかしき俗歌の流行を促しぬ。當世風との意にて之を今様歌と呼ぶ。何時の程より始まれるかは明ならねども、村上天皇第十七の姫宮、美濃青墓の長者として今様に堪能なりしとも傳ふれば、平安朝第二期の末には、既にこの流行ありしは疑なかるべし。式紫

部日記に「若やかなる公達今様歌うたふと見え、枕草子に「されど紫清二女の頃までは歌はの床下に今やうは長くてくせづきたるなど見ゆ。」尙歌の句法も一定したるものにあざりしものゝ如くなるが、その後佛教の流行に従つて作出せられたる七五調の和讃の影響、この歌の上にも及び内容が多く佛教的なると共に、形式も五七調に近き今様歌次第に多く弄ばるゝに至り、堀河鳥羽兩朝以後、和歌の歌合盛行せる餘勢に導かれて、この今様の歌合の事さへ行はるゝに至りたり。承安四年九月一日後白河法皇の御所に今様合あり。堀河の輩三十人を選びて雌雄を決せしめらる。師長資賢、されど今様歌は本來音楽的に聲調を主とするものなるが故に、此等

作出せられたる今様歌も三十一文字の短詩形のみ盛なる文學界に、多少變則なる此種の歌形を見るを悦ぶと云ふ事の、外文學上としたる價值を認むべからず。

像法轉の時には、藥師の誓をたのもしき、一たび御名を聞く人は、よろづの病なしといふ。(梁塵口傳集)

四大聲聞いかばかり、よろこび身よりも餘るらむ、われらは來世の佛ぞと、たしかに聞きつる今日なれば、(同)

よろづの佛の願よりも、千手の誓をたのもしき、枯れたる木草もたちまちに、花さき實なるところ聞け。(源平盛衰記)

ついで神樂歌、催馬樂歌が古風として殆ど儀式的に堂上に保存せらるゝに至りし平安朝の末期に及びて、この新しき今様歌は、上流の人々のみならず、當時白拍子と稱せる遊女の間にも用ゐられて、一般に平民的性質のものとなり來りし事を注意すべし。白拍子とはもと素拍子の意にて一種の歌ふ調子、或は語る調子と呼ぶ名と見るべきものなりしが、後には轉じて歌と舞とを以て此

白拍子

道を立つる遊女の通稱とはなりぬ。其の起源に關しては源平盛衰記に、世に白拍子と云ふもの有云々、我朝には鳥羽院の御宇に鳥の千歳和歌の前として二人の遊女舞初けり、初はひたゝれに立鳥帽子、腰に刀をさして舞ひければ、男舞と申けり、後には事がら惡とて鳥帽子、腰刀をやめて水干に袴計を著て舞ふと、徒然草には、多久賀申けるは通憲入道舞の手中に興ある事どもを選で、磯の禪師といひける女に教てまはせけり、白き水干にさうまきをさゝせ、鳥帽子を引入たりければ、男舞とぞいひける、禪師が娘靜といひける此藝をつげり、是白拍子の根元なり、佛神の本縁をうたふ、其後源光行多くの事をつくれり、後鳥羽院の御作もあり、龜菊にをしへさせ給ひけるとぞと、そのいづれが眞なるやは明にし難けれども、平家の世昌の比には佛神の本縁のみならず、目前の敘景もしくは哀情など詠出することともなりしもの、如し。平家物語、祇王の條に『さう今様一つ歌ふべしと宣へば佛御前承り候ふとて今様一つを歌ひたる、君を始めて見る時は千代も經ぬべし、姫小松御前の池なる龜岡に鶴こそ群れて遊ぶなれと押し返し、三返歌ひすましたりければ、見聞の人々皆耳目を驚

朗詠

かす」と見え、同後徳大寺實定卿月見の條に「さ夜もやうく更け行けば舊き都の荒れ行くを今様にこそうたはれけれ。舊きみやこを來て見れば、淺茅が原とぞなりにける、月の光は隈なくて秋風のみぞ身にはしむと押し返し、返うたひすまされければ大宮を初め奉りて御所中の女房たち皆袖をぞぬらされける」と見ゆ。

當代の歌謠としては、今様歌の外尙朗詠の流行せる事を忘るべからず。朗詠とは内外の漢詩文中の名句を抽出し、是を倭讀に讀みあらためて聲朗らかに吟詠するものを云ふ。又今古の名歌をもその間に挿みて同じ音節に謳ふなり。こは何時の程より始りしかを明にせざれども、藤原公任卿に和漢朗詠の編あるを以て見れば、この時代は既にこの遊の隆なるに至りし頃なるべし。

閑居

都府樓觀看瓦色 觀音寺只聽鐘聲
 晦跡未拋苦經月 避喧猶臥竹窓風

菅丞相
 平佐幹

陶門跡絶春朝雨

燕寢色衰秋夜霜

江以言

我宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに遍

昭

(和漢朗詠集)

紅葉

紅林定有重青日 素髮應無更綠春
 紅葉嵐深窓暗雨 蒼花日暮鬢寒霜
 山雲秋後隔霜觸 野客朝來穿錦樹

菅三品
 匡衡
 後三條院

いかなれば同じ時雨に紅葉するは、その森の薄く濃からん

堀河右大臣

(新選朗詠集)

こは平安朝末より鎌倉時代にかけて大に行はれ、殊に今様歌は遊女白拍子に伴ひて、ますます新しき者となりぬ。そは後章に至りて更に述ぶる事とすべし。

第五章 平安朝思想の變遷

平安朝四百年の文學は、以上を以て敘述し畢りぬ。今翻つて之を思想變